

平安京左京三条三坊十町跡・ 二条殿御池城跡・烏丸御池遺跡

— 中京区金吹町における埋蔵文化財発掘調査 —

2022年

株式会社 アルケス

平安京左京三条三坊十町跡・
二条殿御池城跡・烏丸御池遺跡

— 中京区金吹町における埋蔵文化財発掘調査 —

2022年

株式会社 アルケス

例 言

1. 本書は京都府京都市中京区両替町通押小路下る金吹町 454、455、457-5 に所在する平安京左京三条三坊十町跡・二条殿御池城跡・烏丸御池遺跡（20H581）の報告書である。
2. 本調査は、所在地の開発工事計画に伴って行われた試掘調査によって遺構が確認されたため発掘調査が行われた。
3. 本調査は、田丸産業株式会社の委託を受けた株式会社アルケス（代表取締役 持田 透）が実施した。
4. 本調査の発掘期間は令和3年5月6日から令和3年7月31日である。
5. 本調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言のもと行った。
6. 本調査の体制は以下のとおりである。

調査主体：株式会社アルケス
調査員：石井明日香
7. 本報告書の執筆・編集は石井が行った。
8. 本報告書では以下の地図を調整・編集した。

京都市地形図（1：2500）「聚楽廻」「御所」「壬生」「三条」京都市都市計画局
9. 本報告書で示す座標・方位は国土座標第VI系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海水面（T. P.）に基づく数値である。
10. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。
11. 本報告書に掲載した写真は、遺構を石井、遺物を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。
12. 本調査にあたり、以下の方々に助言をいただいた。（敬称略・五十音順）

伊藤淳史（京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター）
浜中邦弘（同志社大学歴史資料館）
13. 出土した遺物は、関連する図面、写真とともに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管されている。

凡 例

1. 写真図版の縮尺は任意である。
2. 報告書に掲載した遺物番号は実測図、観察表、写真図版にそれぞれ対応している。
3. 本報告書で使用した土色は、以下を使用した。
『新版 標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局監修
4. 出土した遺物の年代は、以下を参考にした。また遺物の時期表記は小森氏の編年に依拠した。
土器編年とその年代観は図1とする。

小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』 京都編集工房

奈良時代 750頃	平安時代					鎌倉時代		室町時代			安土 桃山	江戸時代			明治					
	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃		1660頃	1740代頃	1820代頃						
京都 I	京都 II	京都 III	京都 IV	京都 V	京都 VI	京都 VII	京都 VIII	京都 IX	京都 X	京都 XI	京都 XII	京都 XIII	京都 XIV							
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

図1 土器編年・年代観

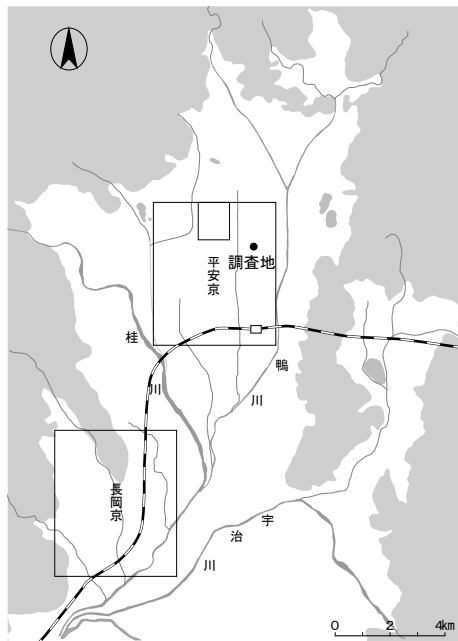


図2 調査地位置図

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺構	5
(1) 基本層序	5
(2) 遺構の概要	5
(3) 第1遺構面の遺構	13
(4) 第2遺構面の遺構	17
(5) 第3遺構面の遺構	17
(6) 第4遺構面の遺構	20
(7) 第5遺構面の遺構	25
(8) 第6遺構面の遺構	31
4. 遺物	34
(1) 江戸時代の遺物	34
(2) 室町時代から桃山時代の遺物	34
(3) 鎌倉時代の遺物	41
(4) 石製品	41
(5) 瓦	41
5. まとめ	45
(1) 調査地の遺構の変遷	45
(2) 落込み状遺構について	46
(3) 溝185・186・195・402、溝439・440と土橋について	49

挿 図 目 次

図1	土器編年・年代観	
図2	調査地位置図	
図3	調査区配置図	1
図4	調査前全景	1
図5	作業風景	1
図6	調査対象地と周辺地図	2
図7	調査区壁面土層図	6
図8	第1遺構面全体図	7
図9	第2遺構面全体図	8
図10	第3遺構面全体図	9
図11	第4遺構面全体図	10
図12	第5遺構面全体図	11
図13	第6遺構面全体図	12
図14	個別遺構図1 溝010	13
図15	個別遺構図2 集石遺構005・050	14
図16	個別遺構図3 集石遺構015・045	15
図17	個別遺構図4 室307、土坑306・310	16
図18	個別遺構図5 礎石建物1、集石遺構340	18
図19	個別遺構図6 土取坑群	19
図20	個別遺構図7 柵1、土坑145、土器溜207	21
図21	個別遺構図8 溝185・186・195・402、土坑243	22
図22	個別遺構図9 土取坑187・404、溝188	23
図23	個別遺構図10 土坑413・437、溝439・440	26
図24	個別遺構図11 溝239、溝状遺構220	27
図25	個別遺構図12 落込み状遺構240	28
図26	個別遺構図13 集石遺構420、落込み状遺構405・425	29
図27	個別遺構図14 土器溜215・415、井戸410	30
図28	個別遺構図15 落込み状遺構285・297	32
図29	個別遺構図16 土橋465	33
図30	遺物実測図1	35
図31	遺物実測図2	37
図32	遺物実測図3	39
図33	遺物実測図4	40
図34	遺物実測図5	41
図35	遺物実測図6	42

図36	遺物実測図 7	43
図37	遺物実測図 8	44
図38	遺構変遷図	47
図39	二条殿龍躍池推定範囲	49
図40	溝185関連遺構図	50
図41	溝185断面模式図	50
図42	溝185出土石製品	51

表 目 次

表 1	周辺調査一覧	3
表 2	遺構概要表	5
表 3	遺物概要表	34
表 4	遺構変遷	46
表 5	落込み状遺構の比較	48
表 6	二条殿の変遷	52
表 7	出土遺物観察表	53
表 8	出土石製品観察表	57
表 9	出土瓦観察表	57

図 版 目 次

図版 1	1 区第 1 遺構面	全景
	1 区第 2 遺構面	全景
図版 2	1 区第 3 遺構面	全景
	1 区第 4 遺構面	全景
図版 3	1 区第 5 遺構面	全景
	1 区第 6 遺構面	全景
図版 4	2 区第 3 遺構面	全景
	2 区第 4 遺構面	全景
図版 5	2 区第 5 遺構面	全景
	2 区第 6 遺構面	全景
図版 6	第 1 遺構面	溝010
	第 1 遺構面	集石遺構005
	第 1 遺構面	集石遺構050

- 図版 6 第 1 遺構面 集石遺構045
第 1 遺構面 土坑310
第 1 遺構面 室307
第 1 遺構面 土器溜043
第 1 遺構面 井戸027
- 図版 7 第 2 遺構面 集石遺構080
第 2 遺構面 井戸066
第 3 遺構面 礎石建物1
第 3 遺構面 土取坑群
第 3 遺構面 井戸351断面
第 4 遺構面 柵1
第 4 遺構面 溝185・186・195
第 4 遺構面 溝188
- 図版 8 第 4 遺構面 土坑145
第 4 遺構面 土取坑187・404
第 5 遺構面 溝439・440
第 5 遺構面 落込み状遺構240
第 5 遺構面 落込み状遺構425
第 5 遺構面 土器溜215
第 5 遺構面 土器溜415
第 5 遺構面 井戸410
- 図版 9 第 6 遺構面 落込み状遺構285・集石遺構250・土坑280・溝281
第 6 遺構面 落込み状遺構297
第 6 遺構面 集石遺構250断面
第 6 遺構面 土坑280断面
第 6 遺構面 土橋465
- 図版10 出土遺物 1
- 図版11 出土遺物 2
- 図版12 出土遺物 3
- 図版13 出土遺物 4

1. 調査経過

今回の発掘調査は京都市中京区両替町通押小路下の金吹町 454、455、457-5 における集合住宅建設に伴う土地開発に先立って行われた。

遺跡としては平安京左京三条三坊十町跡（遺跡番号：1）・安土桃山時代の二条殿御池城跡（遺跡番号：471）・縄文時代から飛鳥時代の集落跡である烏丸御池遺跡（遺跡番号：464）に該当し、鎌倉時代の押小路殿、室町時代の二条殿、近世には金座・銀座に該当する。

文化財保護法第 93 条に基づく届出（20H581）を受け、京都市文化財保護課による試掘調査が行われた。試掘調査の結果、敷地の一部で平安時代から中世の遺構面が良好に残存していることが確認され、対象地のうち 224 m²の発掘調査が指導された。株式会社アルケスは開発事業者である田丸産業株式会社からの委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査は令和 3 年 5 月 6 日から表土掘削を開始し、6 面分の調査を行った。遺構面ごとに京都市文化財保護課の検査を受け、令和 3 年 7 月 31 日に終了した。

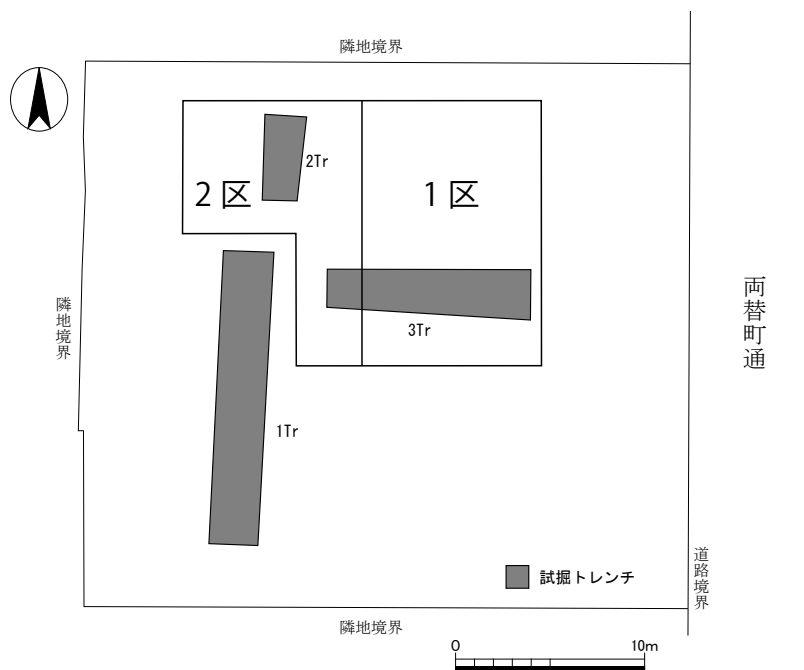


図 3 調査区配置図 (1/400)



図 4 調査前全景 (南西から)



図 5 作業風景

2. 位置と環境

調査地は、鴨川によって形成された扇状地の比較的安定した基盤層上に立地している。この扇状地は平安京左京域では北北東から南南西の方向にのびる。扇状地上には点々と弥生時代頃の集落遺跡が分布しており、今回の調査地も弥生時代から古墳時代の集落である烏丸御池遺跡にあたる。この遺跡は、北は現在の押小路通付近から南は蛸薬師通付近まで約0.7 km、東は麩屋町通から西は西洞院通まで約1 kmの範囲にわたる。北は烏丸丸太町遺跡と、南は弥生時代の大集落跡である烏丸綾小路遺跡と接している。

その後、平安京遷都に伴い、当地は平安京左京三条三坊十町に位置するようになる。平安時代前期の当町の利用についてはよくわかっていないが、平安時代中期には陽明門院禎子内親王の御所となった。この御所は、承暦四年（1080）に焼失する。

その後、藤原家成、藤原範光邸を経て、鎌倉時代には後鳥羽上皇の御所となり、承元三年（1209）に上皇が渡御している。この御所は、押小路殿、三条坊門烏丸殿、押小路烏丸泉殿などと呼ばれた。

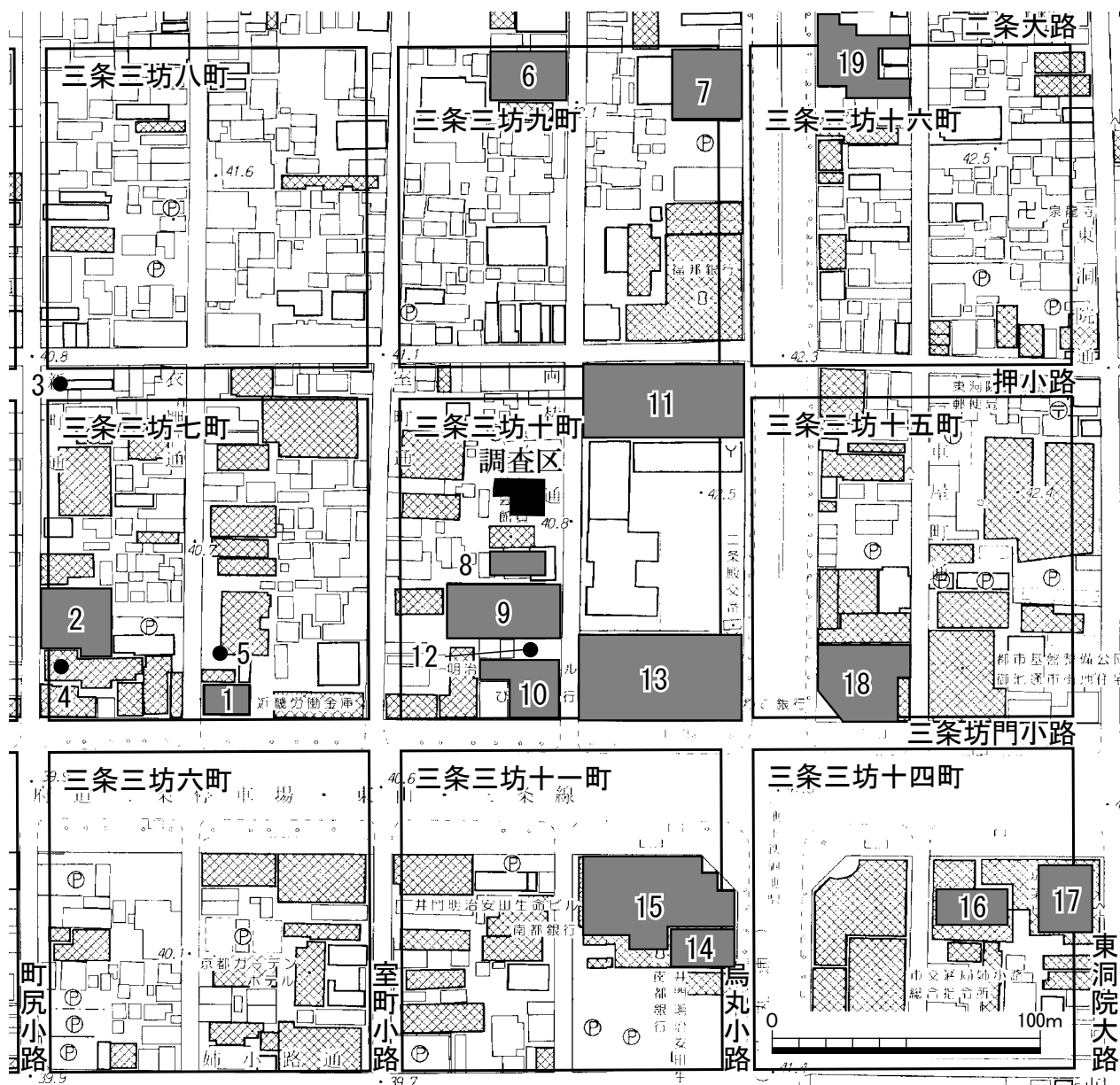


図6 調査対象地と周辺地図 (1/2500)

承久の乱ののち、陰明門院藤原麗子の邸宅となり、貞応元年（1222）に焼失。正嘉元年（1257）には後嵯峨天皇が御所を造営した。

弘長二年（1262）には、藤原成子の邸宅となる。13世紀末から14世紀初め頃に二条撰関家に譲られたとみられ、それ以後、二条殿と呼ばれて代々二条家の邸宅として室町時代まで存続する。二条殿は「龍躍池」と呼ばれた泉と池を中心とする庭園で名を馳せ、洛中洛外図にもその様子が描かれている。二条殿は文明九年（1477）の放火により焼失。文明十八年（1486）には再建されるが、二条家の零落により、二条殿も荒廃していった。その後、二条晴良によって建て直されるが、二条殿の庭園を気に入った織田信長が京都における御座所にこの地を選び、二条家を報恩寺に移させて、天正四年（1576）から二条御新造（二条殿御池城）を造営した。信長は天正七年（1579）にこの二条御新造を誠仁親王に進上し、このことから御所の上御所に対して下御所あるいは二条新御所と呼ばれるようになる。天正十年（1582）の本能寺の変の際に信長の長子信忠はこの下御所で討ち死にし、下御所は焼失する。

表1 周辺調査一覧

番号	条坊	調査法	内容	文献
1	三条三坊七町	発掘	古墳時代の遺物包含層、平安時代後期の南北溝・柱穴、鎌倉時代～室町時代の土坑。	『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財京都市埋蔵文化財研究所)
2	三条三坊七町	発掘	平安時代の土坑・掘立柱建物、鎌倉～室町時代の堀(妙覚寺城の堀跡)・土坑・井戸、桃山～江戸時代の鋳造遺構。	『妙覚寺城跡—平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡—』古代文化調査会
3	三条三坊七町	立会	鎌倉～室町時代の落ち込み。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局
4	三条三坊七町	立会	平安時代後期の土坑、室町時代の木棺墓・土坑、江戸時代の土坑。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財センター
5	三条三坊七町	立会	平安時代後期の柱穴、鎌倉～江戸時代の池、江戸時代後期の土坑・溝。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局
6	三条三坊九町	発掘	平安時代前期の柱穴、室町時代の柵、桃山～江戸時代初期の堀状遺構・井戸・柵、江戸時代の井戸・路面・建物。	『平安京左京三条三坊九町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-15』(財京都市埋蔵文化財研究所)
7	三条三坊九町	発掘	桃山～江戸時代前期の土坑・柱穴・井戸・溝・濠・柵列・石垣。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財京都市埋蔵文化財研究所)
8	三条三坊十町	発掘	平安時代後期～鎌倉時代の溝・石敷き・柱穴・集石、室町時代の土坑、江戸時代の井戸・土坑・溝。	『平安京左京三条三坊十町(押小路殿・二条殿)跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-8』(財京都市埋蔵文化財研究所)
9	三条三坊十町	発掘	平安～室町時代の井戸・建物・池・石・石垣・土坑・柱穴、桃山～江戸時代の石垣・井戸・土坑・柱穴、江戸時代後期の建物・柵・井戸・石室・土坑・柱穴。	『平安京左京三条三坊十町(押小路殿・二条殿)跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-7』(財京都市埋蔵文化財研究所)
10	三条三坊十町	発掘	平安時代の落ち込み・溝(三条坊門小路北築地内溝)・土坑、鎌倉～室町時代の落ち込み・堀・溝・瓦敷遺構・土坑、安土桃山～江戸時代の浴室遺構・落ち込み・石組・土坑・炉・溝・石室。	『平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-20』(財京都市埋蔵文化財研究所)
11	三条三坊十町	発掘	平安時代～中世の土坑・柱穴・溝、安土桃山時代の堀。	『平安京左京三条三坊十町 二条殿御池城跡』古代文化調査会
12	三条三坊十町	試掘	押小路殿の園池にかかわる落ち込み肩口。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局
13	三条三坊十町	発掘	平安時代後期の烏丸小路西側溝・井戸、鎌倉時代の烏丸小路西側溝・井戸、室町時代の溝・井戸・柱穴・土坑、江戸時代の石垣・池・井戸・石室・柱穴・土坑。	『押小路殿の研究』『平安博物館研究紀要第2輯 平安文化の研究1』平安博物館 『平安京跡研究調査報告第12輯 押小路殿跡 平安京左京三条三坊十一町』(財古代学協会)
14	三条三坊十一町	発掘	烏丸小路西側溝。平安時代の井戸、鎌倉時代の溝、室町時代の井戸。	『平安京跡研究調査報告第12輯 押小路殿跡 平安京左京三条三坊十一町』(財古代学協会)
15	三条三坊十一町	発掘	烏丸小路西側溝。平安時代の門跡、室町時代の土坑墓・火葬墓。	『平安京跡研究調査報告第14輯 平安京左京三条三坊十一町(第2次調査)』(財古代学協会)
16	三条三坊十四町	発掘	平安時代中期の溝、鎌倉時代の溝・土坑・柱穴・堀、室町時代の井戸・土坑・堀。	『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財京都市埋蔵文化財研究所)
17	三条三坊十四町	発掘	東洞院大路路面・西側溝。鎌倉～室町時代の溝・井戸、室町時代後期の堀。	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財京都市埋蔵文化財研究所)
18	三条三坊十五町	発掘	鎌倉時代の石組みの堰をもつ池・地鎮遺構、室町時代の土坑墓群、江戸時代の天秤工房跡。	『平安京左京三条三坊十五町—ニチコン株式会社新築に伴う調査—』古代文化調査会
19	三条三坊十六町	発掘	平安時代後期の井戸、鎌倉～室町時代前期の掘込、室町時代後期の二条大路南側溝、桃山時代の池状の掘込・ピット、江戸時代の礎石建物・井戸・杭列・掘込。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財京都市埋蔵文化財研究所)

近世になると、烏丸通と室町通の間に新道（両替町通）が開かれ、慶長十三年（1608）から両替町通の二条通と三条通の間に金座・銀座・朱座が相次いで設置された。

過去の周辺調査では、上記の歴史を反映し、豊富な遺構遺物が発見されている。特に今回の調査地の南側で2002・2009年度に実施された調査（図6-9・10）では、鎌倉時代から室町時代まで形を変えながら存続する庭園遺構が見つかった。あわせて庭園に伴う可能性のある建物も見つかり、それまで文献や絵画資料には記されるものの、考古学的には明らかになっていなかった二条殿の庭園の実態を知る資料として注目された。

本調査では、過去の周辺調査及び歴史背景を踏まえたうえで遺構の確認を行った。一部攪乱で壊されているが、遺構面は比較的良好に残存しており、最大6時期の遺構を確認することができた。特に室町時代の二条殿に該当する時期の遺構が複数面に及んでいること、室町時代から桃山時代にかけて区画溝が段階的に埋没する過程を確認できた。

3. 遺構

(1) 基本層序 (図7)

現地表面から近現代の攪乱や、近世の火災処理土坑等 (I) を除去した、約 0.6 ~ 1.3 m まで掘り下げ、標高 40.4 m から調査を行った。褐灰色砂泥と硬くしまる明黄褐色シルト (II) を基調とした整地土を確認した。この明黄褐色シルト層は溝 010・011 を境に南側へ落ち込む様子が見られ、落込の上には褐灰色砂質土が堆積する。この整地土上で江戸時代の溝 010 や井戸 027 などを検出した。上記の整地土を除去し、さらに 0.1 ~ 0.4 m 下で褐灰色砂泥に灰白色シルトブロックを多く含む (III) 整地土を部分的に検出した。さらにこの整地土の 0.1 ~ 0.2 m 下で、灰黄褐色砂泥と褐灰色~灰白色粗砂 (IV) を基調とした整地土を確認した。この整地土上では、礎石建物や集石遺構、土取坑などの遺構を確認した。さらにこの整地土を 0.2 ~ 0.26 m 除去すると黒褐色砂泥 (V) を基調とした整地土を検出した。この整地土上で溝 185・186・195・402 や柵などの遺構を検出した。上記の整地土を除去し、さらに 0.25 ~ 0.45 m 下でしまりの強い黒褐色砂泥 (VI) 層を検出した。この整地土上で落込み状遺構が掘りこまれていることを確認した。この整地土は層厚 0.1 ~ 0.2 m 程度であり、この整地土の下で灰黄色シルトを基調とした地山面を確認した。この地山面上で最初期の落込み状遺構が掘りこまれている。

(2) 遺構の概要

今回の調査では 6 面分の調査を行い、鎌倉時代から江戸時代までの遺構を検出した (表 2)。

第 6 遺構面の遺構は、落込み状遺構などを検出した。第 4・5 遺構面の遺構は、溝と柵、落込み状遺構を検出した。また調査区南半分程にわたって粘土採掘土坑と考えられる多様な形状の土坑を多数検出した。第 2・3 遺構面では、土取坑を検出した。第 1 遺構面では、井戸や土坑、室などを検出した。室は内側を三和土で叩きしめ、埋甕を伴ったものであった。

以下、調査した遺構面順に特筆すべき遺構を詳述する。

表 2 遺構概要表

時代	主要遺構	備考
第 1 遺構面	溝010、集石遺構005・050、集石遺構015、集石遺構045、土器溜043、土坑310、室307、井戸027	江戸時代
第 2 遺構面	集石遺構080、井戸066	桃山時代~江戸時代
第 3 遺構面	礎石建物 1、集石遺構340、土取坑124・125・129 ~ 131・141・381、井戸351	戦国時代~桃山時代
第 4 遺構面	柵 1、溝188、溝185・186・195・402、土坑205、土坑243、土坑181・183、土取坑187・404	室町時代
第 5 遺構面	溝239、溝439・440、落込み状遺構240、落込み状遺構405・425、集石遺構420、土器溜215、井戸410	鎌倉時代~南北朝時代
第 6 遺構面	土橋465、落込み状遺構285・297 (集石遺構250、土坑280、溝281)	鎌倉時代

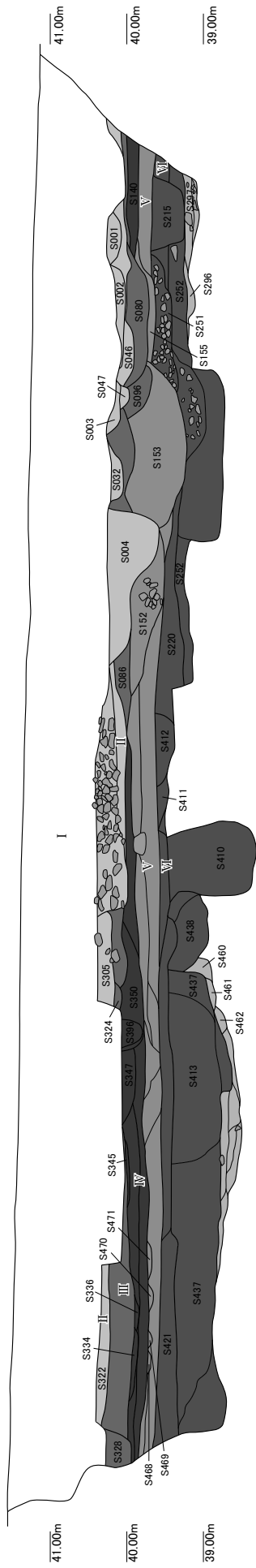
北壁

Y=-22,040

Y=-22,035

Y=-22,030

Y=-22,025



東壁

X=-109,595

X=-109,600

X=-109,605

X=-109,610

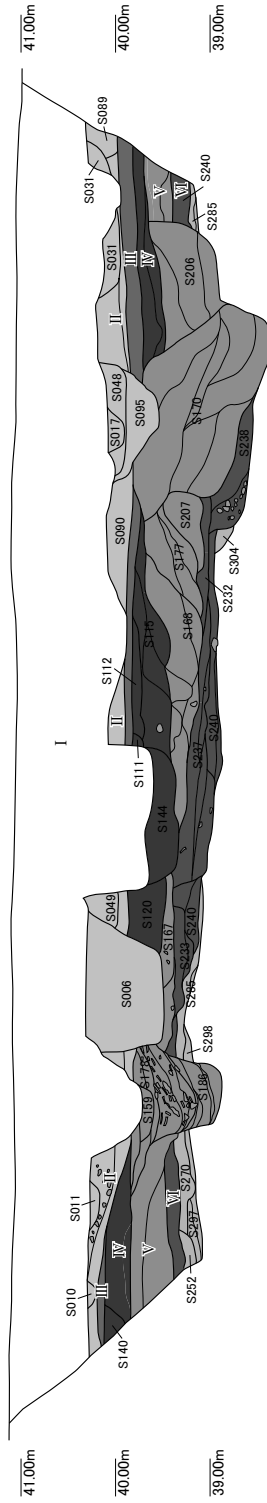


図7 調査区壁面土層図 (1/80)

X=-109.595

Y=-22.045



A

Y=-22.040

B

Y=-22.035

C

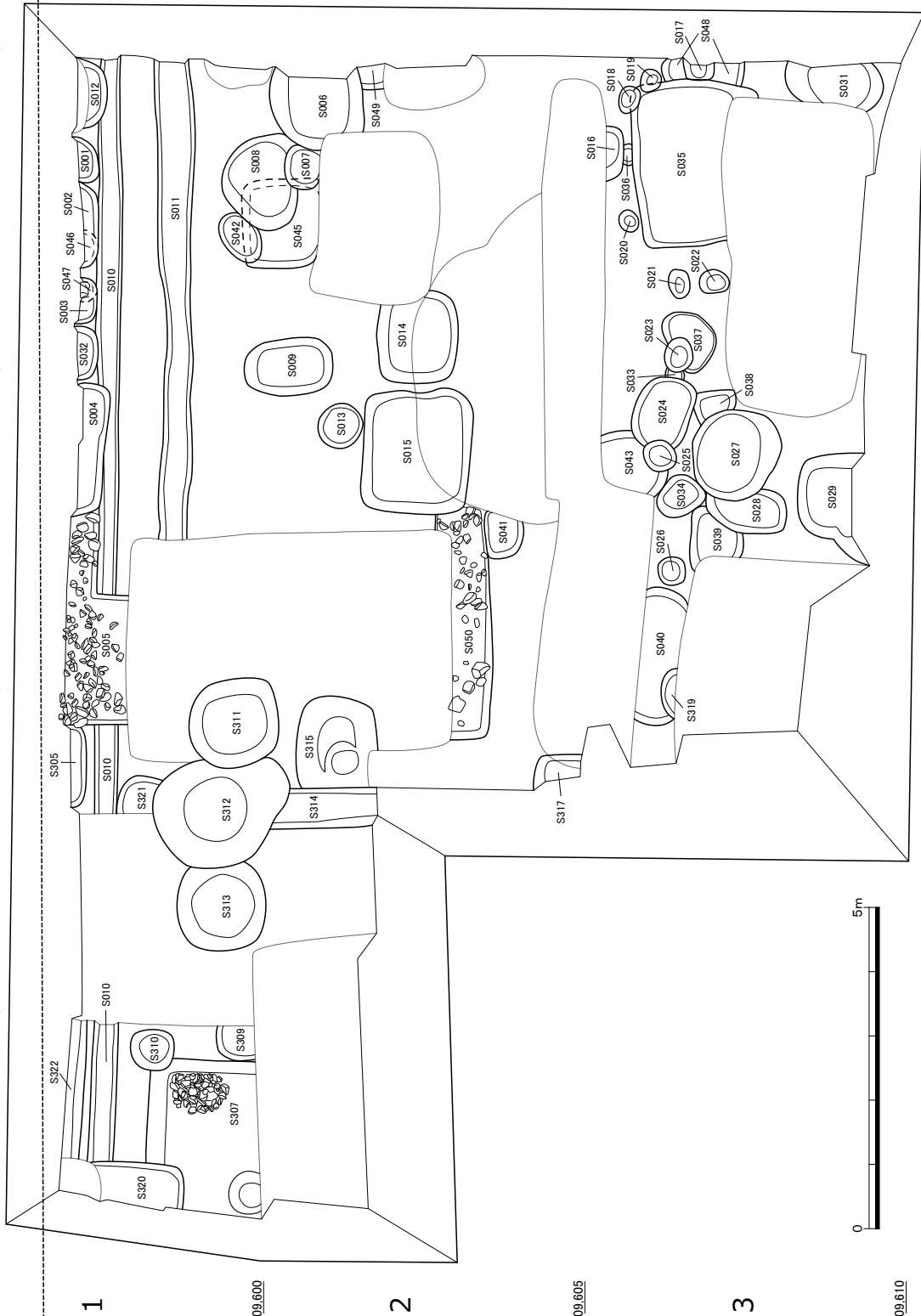
Y=-22.030

D

Y=-22.025

E

西二行北二門



1

X=-109.600

2

X=-109.605

3

X=-109.610

西二行北三門

图8 第1遺構面全体図 (1/100)

X=-109.595
Y=-22.045



Y=-22.040

Y=-22.035

Y=-22.030

Y=-22.025

A

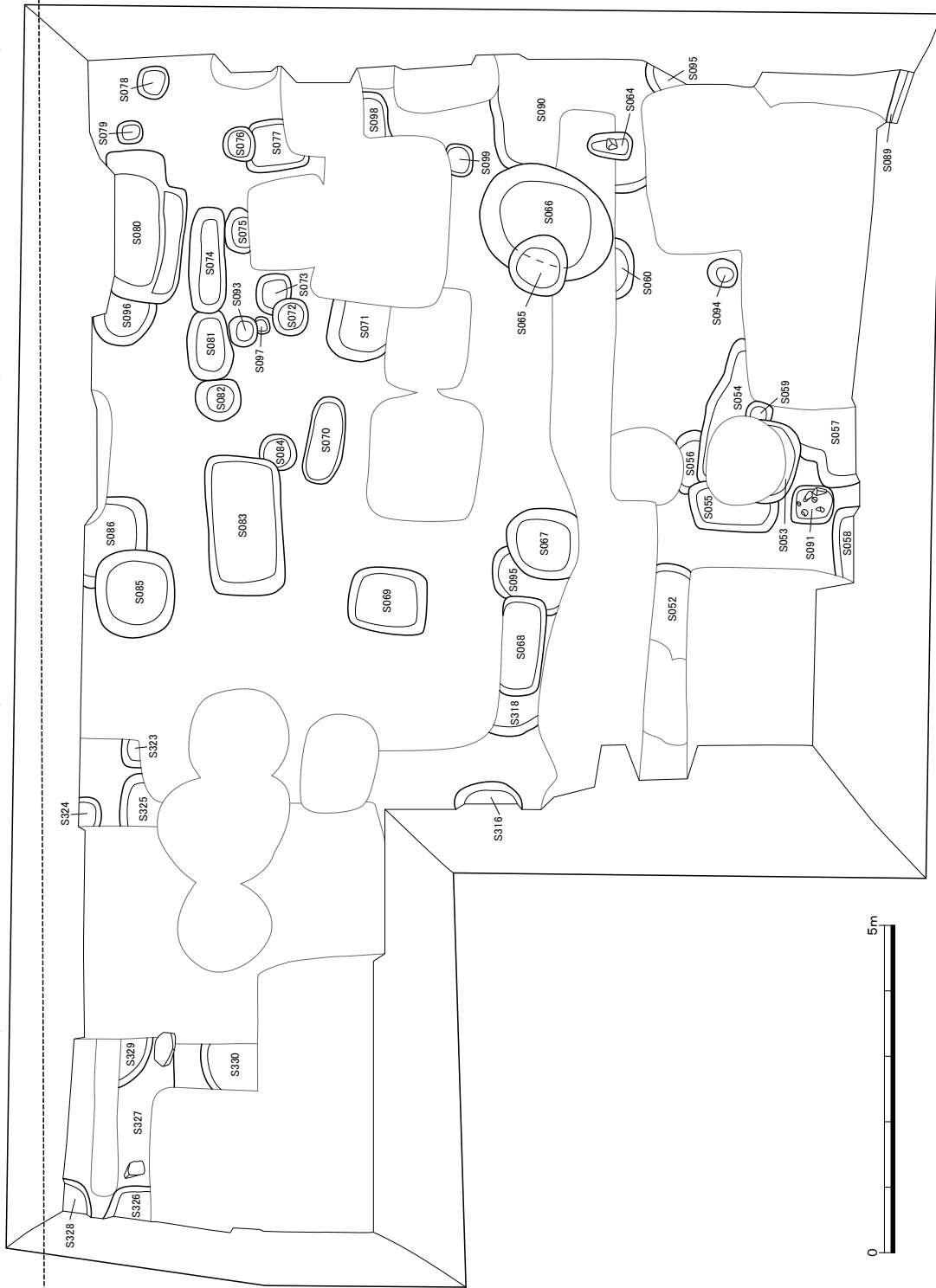
B

C

D

E

西二行北二門



1

X=-109.600

2

X=-109.605

3



X=-109.610

西二行北三門

图9 第2遺構面全体図 (1/100)

X=-109.595

Y=-22.045



E

Y=-22.025

D

Y=-22.030

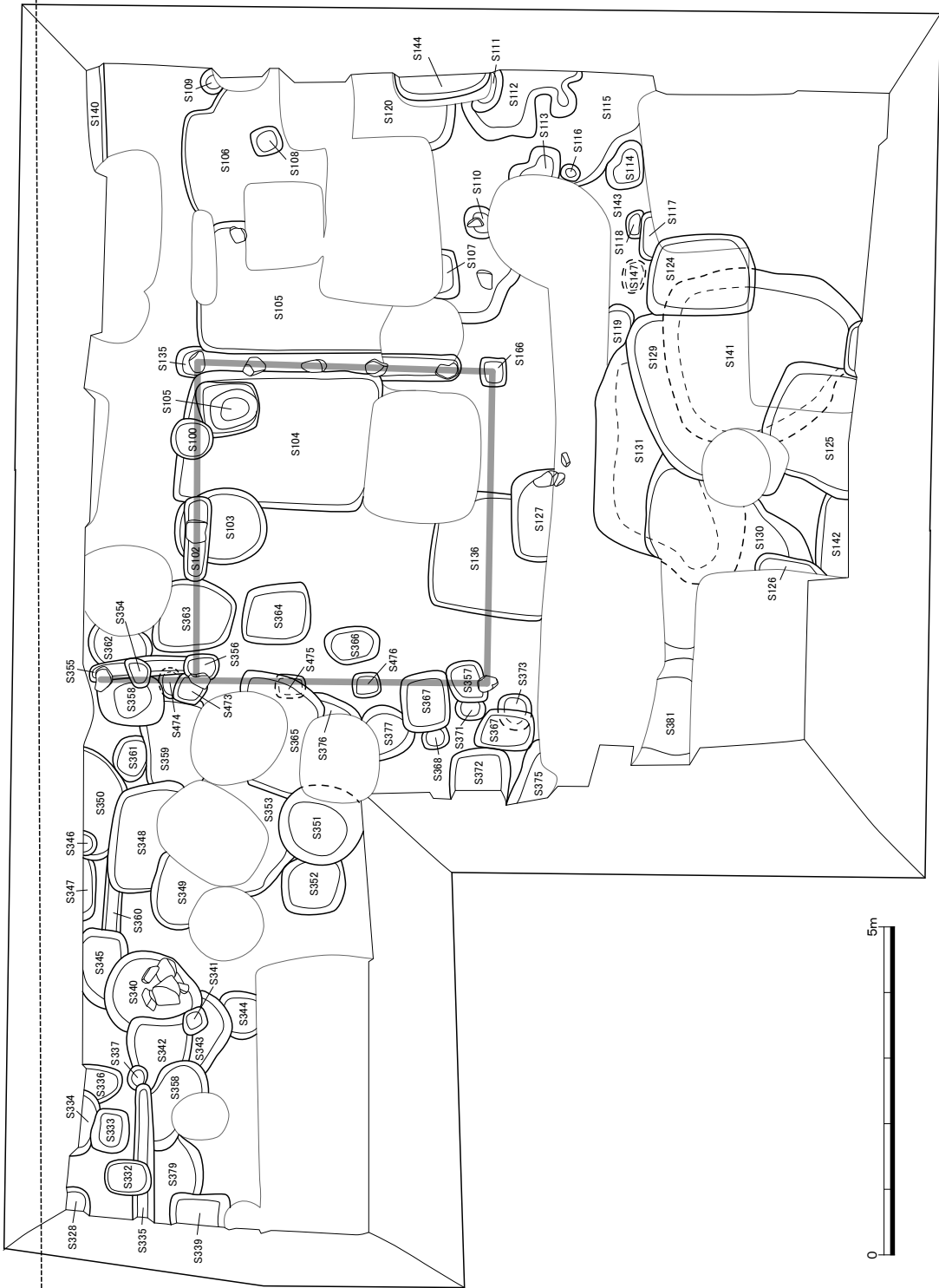
C

Y=-22.035

B

Y=-22.040

A



1

X=-109.600

2

X=-109.605

3

X=-109.610

西二行北三門

图 10 第3遺構面全体図 (1/100)

X=-109.595
Y=-22.045



Y=-22.040

B

Y=-22.035

C

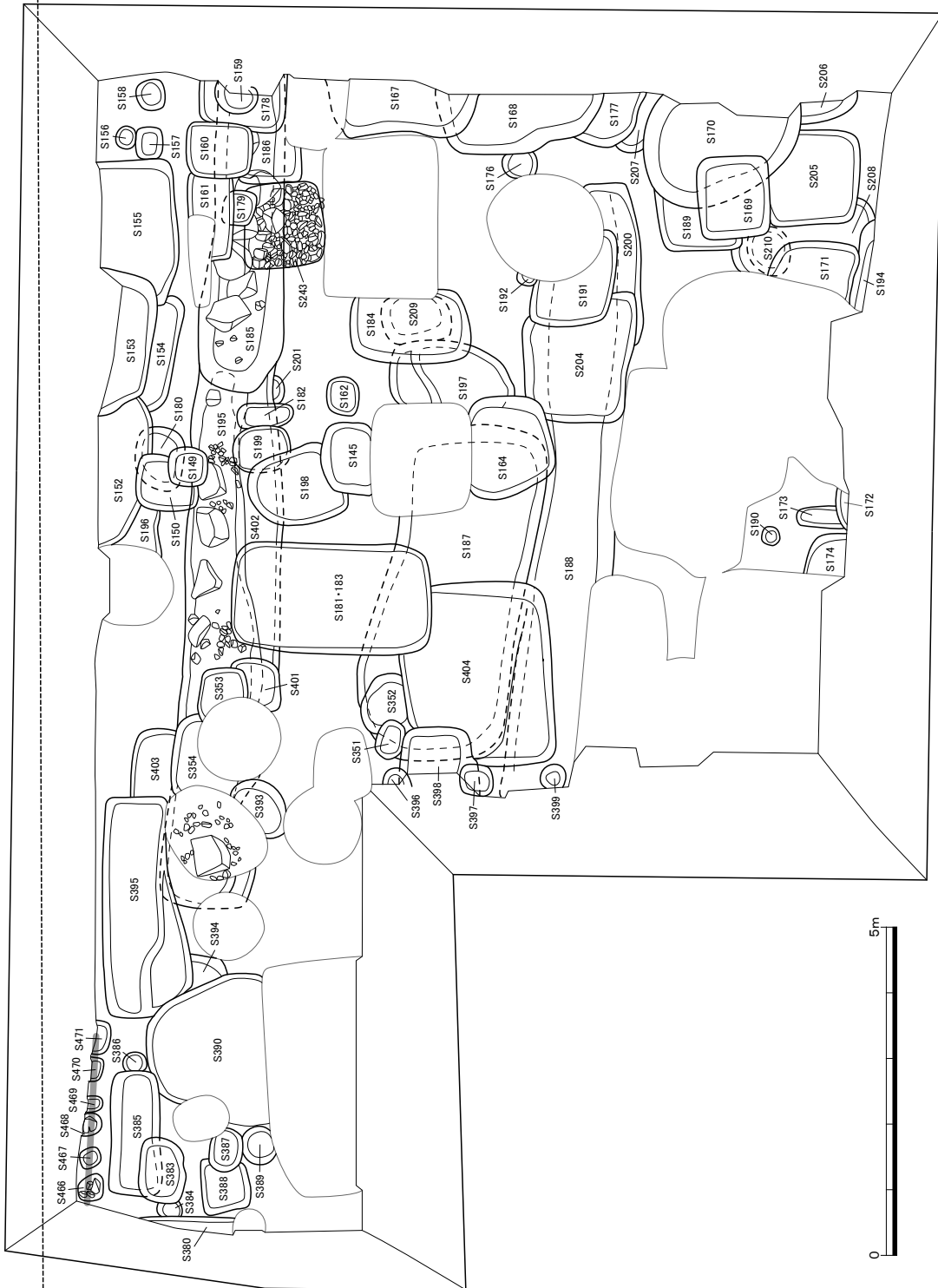
Y=-22.030

D

Y=-22.025

E

西二行北二門



1

X=-109.600

2

X=-109.605

3

X=-109.610



西二行北三門

图 11 第 4 遺構面全体図 (1/100)

X=-109.595

Y=-22.045

Y=-22.040

Y=-22.035

Y=-22.030

Y=-22.025

E

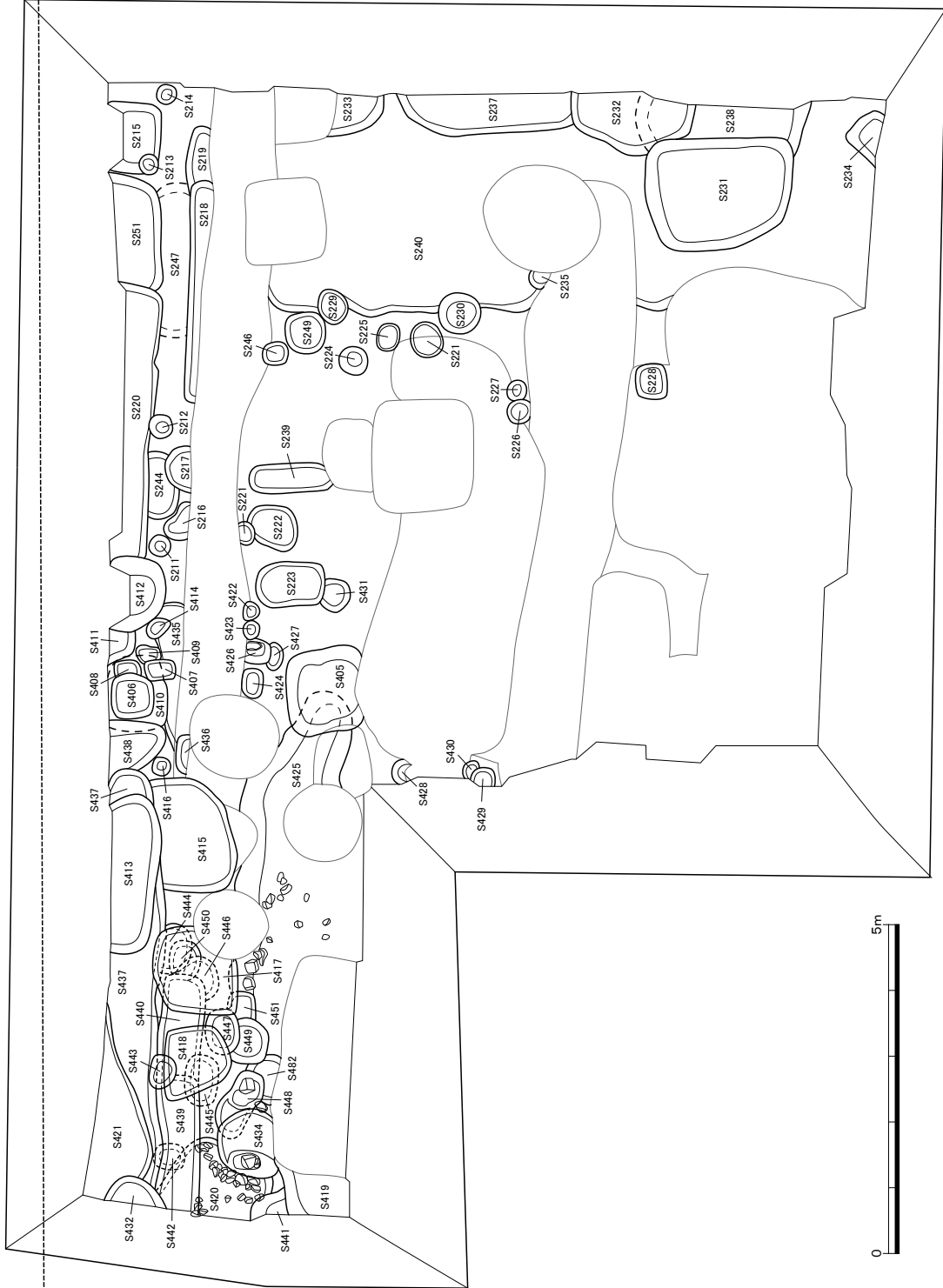
A

B

C

D

西二行北二門



1

2

3

X=-109.600

X=-109.605

X=-109.610



西二行北三門

图 12 第 5 遺構面全体图 (1/100)

X=-109.595
Y=-22.045

A

Y=-22.040

B

Y=-22.035

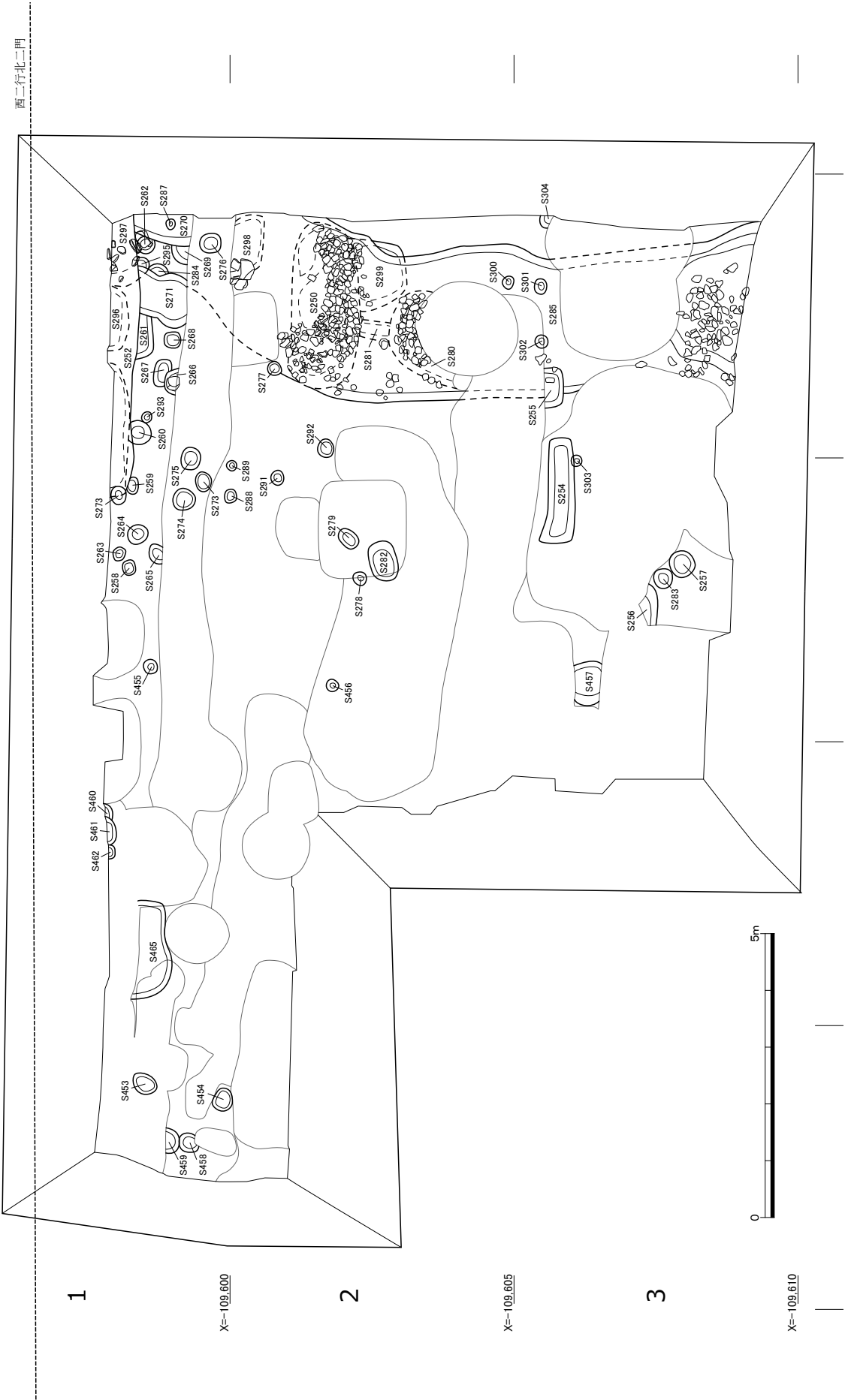
C

Y=-22.030

D

Y=-22.025

E



西二行北三門

图 13 第 6 遺構面全体图 (1/100)

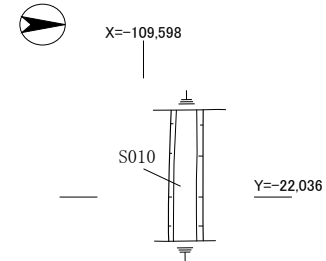
(3) 第1遺構面の遺構

第1遺構面では主に溝、ピット、土坑、集石遺構、室、井戸を検出した。

溝 010 (図 14、図版 6)

A～D1 グリッドで検出した、調査区を東西方向に貫く溝である。幅 0.35～0.4 m で深さは 0.12 m である。軸方向は N-90.5°-E である。並行する溝 011 より北は明黄褐色シルトを強固につき固めており、丁寧に整地する様子が確認できる。整地の区切りにあたる場所にあることから、区割りの溝であると推定される。

溝010

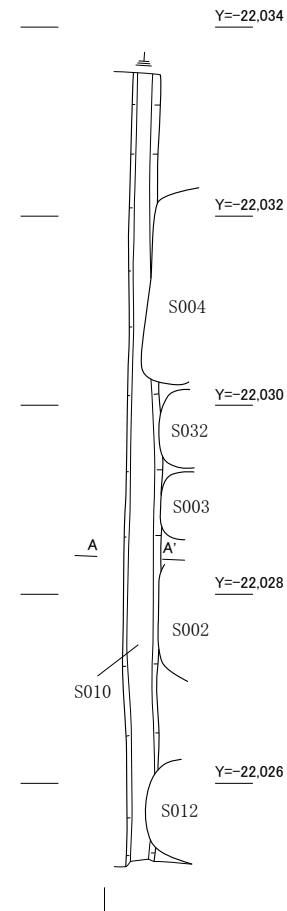


集石遺構 005・050 (図 15、図版 6)

集石遺構 005 は B～C1 グリッドで、幅 0.5～2.0 m、検出長 3.3 m で L 字状にクランクした形で検出した。深さは 0.12 m で、全体に 0.15～0.3 m 大の円礫を多く含む。

集石遺構 050 は B～C2 グリッドで、幅 0.8 m、検出長 3.6 m で検出した。深さは 0.1～0.12 m で、全体に 0.2～0.3 m 大の円礫を多く含む。

全体図で見ると集石遺構 005・050 は近世の火災処理土坑(攪乱)に壊されているものの逆コの字状の同一遺構であると考えられる。埋土はしまりの強い黒褐色土である。石を入れて突き固めている様子から整地と考えられる。



集石遺構 015 (図 16)

C2 グリッドで検出した、長軸長 1.95 m、短軸長 1.6 m、深さ 1.3 m の隅丸方形土坑である。上層～中層にかけて 0.1 m 前後のこぶし大の円礫が敷き詰められる。下層には 0.25～0.3 m 大のやや平たい円礫が多くみられる。埋土は褐灰色粘土である。

集石遺構 045 (図 16、図版 6)

D1・2 グリッドで検出した長軸長 1.4 m、短軸長 (1.2) m、深さ 0.98 m の隅丸方形土坑である。0.1～0.2 m 大の円礫を多く含む。埋土はしまりの弱い褐灰色土である。

後述する土坑 243 は同一遺構である可能性も考えられるが、溝 185 から礎石が入り込んでいること、埋土が大きく違うことから別遺構として報告する。

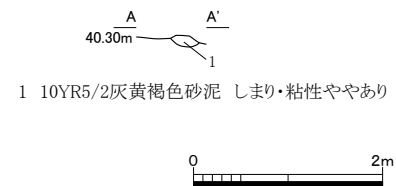


図 14 個別遺構図 1 溝 010 (1/80)

集石遺構005・050

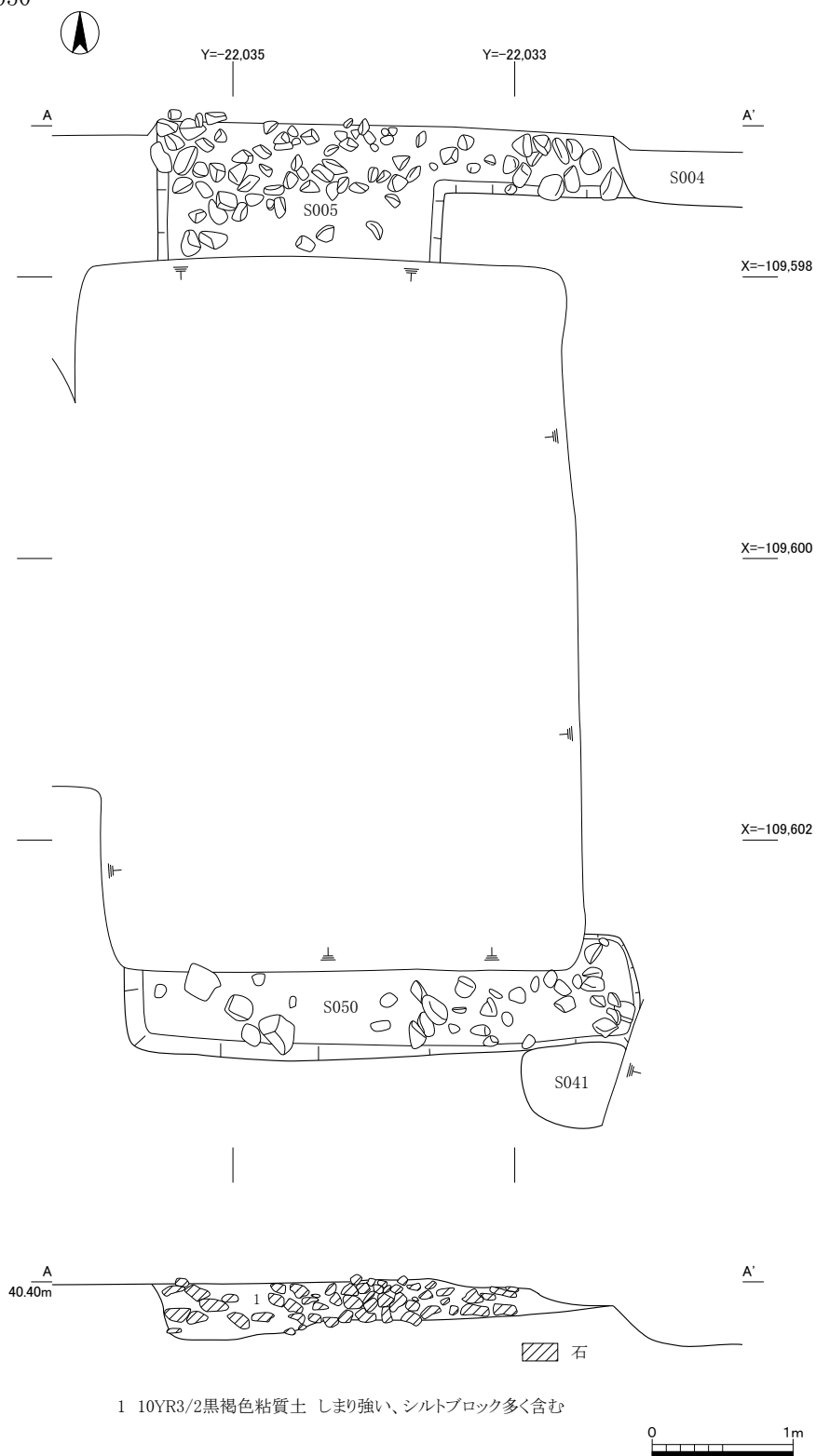
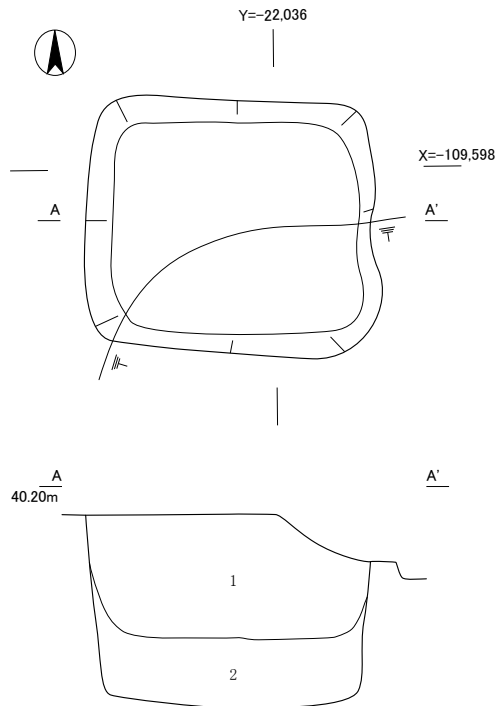


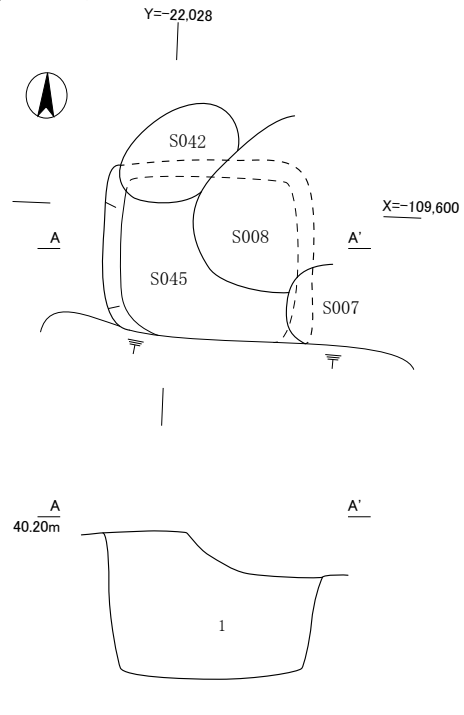
図 15 個別遺構図 2 集石遺構 005・050 (1/50)

集石遺構015



- 1 10YR4/1 褐灰色粘土 しまり弱い、25~30cm大の礫多量に入る
 2 10YR5/1 褐灰色粘土 しまり・粘性強い、40cm前後の石多く入る

集石遺構045



- 1 10YR7/1 灰白色砂礫 0.1~0.2m大の礫多量に入る、しまりなし
 10YR6/1 褐灰色粘土少量含む



図 16 個別遺構図 3 集石遺構 015・045 (1/50)

土坑 310 (図 17、図版 6)

A1 グリッドで、後述する室 307 の北東に接して検出した土坑である。長軸長 0.7 m、短軸長 0.65 m、深さ 0.24 m を計る隅丸方形土坑である。土坑内部に焼締陶器の鉢が口縁を下にした状態で据えられており、中央に 20 cm 大の角礫を据え、周囲に 10 cm 前後の円礫が複数入る様子を確認した。室 307 に関係する遺構と考えられる。

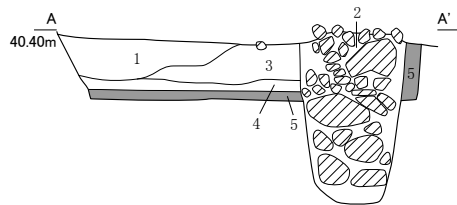
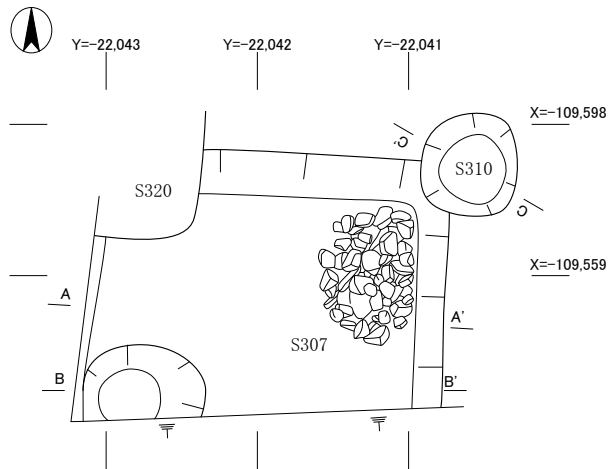
室 307 (図 17、図版 6)

A1 グリッドで検出し、調査区西壁以西へと続く。南側は大きな攪乱に壊されている。室は三和土で作られており、外寸は東西長 (2.4) m、南北検出長 (1.7) m を測り、壁厚は 0.3 ~ 0.4 m を測る。検出面から床面までの深さは 0.42 m で、粘土を叩きしめて平坦な床面を形成していた。また床面の室内南西隅には直径 0.6 m の穴をあけ、縁を盛り上げる。深さは 0.4 m である。穴の内側に甕を埋め込む様子が確認できた。

土器溜 043 (図 8、図版 6)

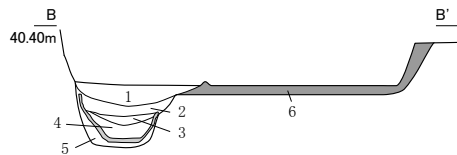
C3 グリッドで検出した土坑である。長軸長 (1.1) m、短軸長 (1.0) m、深さ 0.25 m を測る隅丸方形土坑である。埋土は褐灰色粘土である。

室307、土坑310



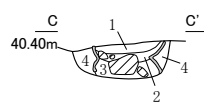
(307)

- 1 10YR4/2灰黄褐色粘土 しまり・粘性強い、三和土・炭化物含む
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色粘土(0.1~0.5mm大の石多く含む)
- 3 10YR1.7/1黒色泥砂 しまりあり
- 4 10YR3/1黒褐色粘質土 漆喰多く入る
- 5 2.5Y7/6 三和土(暗黄褐色)



(307)

- 1 10YR4/2灰黄褐色泥砂
- 2 10YR4/1褐灰色砂泥 しまり・粘性あり、明黄褐色シルトまじる
- 3 10YR7/6明黄褐色シルト
- 4 10YR7/4にぶい黄橙色シルト
- 5 10YR5/1褐灰色粘土
- 6 2.5Y7/6 三和土(暗黄褐色)



- 三和土
- 埋藏
- 石

(310)

- 1 10YR3/2黒褐色砂泥 しまりあり
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 しまり・粘性あり
- 3 10YR6/2灰黄褐色粘土 しまり・粘性あり
- 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥



図 17 個別遺構図 4 室 307、土坑 306・310 (1/50)

井戸 027 (図 8、図版 6)

C3 グリッドで検出した素掘りの井戸である。掘方は直径 1.4 m、深さ 1.6 m の円形である。底部は地山のシルト層下の砂礫層が露出している。

(4) 第 2 遺構面の遺構

第 2 遺構面では、ピット、土坑、井戸を検出した。

集石遺構 080 (図 9、図版 7)

D1 グリッドで検出した土坑である。長軸長 2.3 m、短軸長 (1.2) m、深さ 0.3 m の長方形の土坑である。0.1 ~ 0.2 m 大の円礫を多く含む。

井戸 066 (図 9、図版 7)

D2・3 グリッドで検出した素掘りの井戸である。掘方は長軸長 2.1 m、短軸長 1.6 m の楕円形である。底は地山のシルト層下の砂礫が露出している。

埋土から出土した遺物はわずかな小片のみであった。

(5) 第 3 遺構面の遺構

第 3 遺構面では、溝、礎石建物、ピット、土坑、集石遺構、土取坑、井戸を検出した。

礎石建物 1 (図 18、図版 7)

C ~ D1・2 グリッドで検出した礎石建物である。礎石は一辺が 0.2 ~ 0.35 m の扁平な川原石で、柱穴が掘りこまれている。東西に 2 間以上、南北に 5 間以上と考えられ、規模は東西方向に 4.8 m、南北方向に 4.5 m である。柱間は東西方向で 2.2 ~ 2.6 m を測り、南北方向で 0.6 ~ 1.2 m を測る。

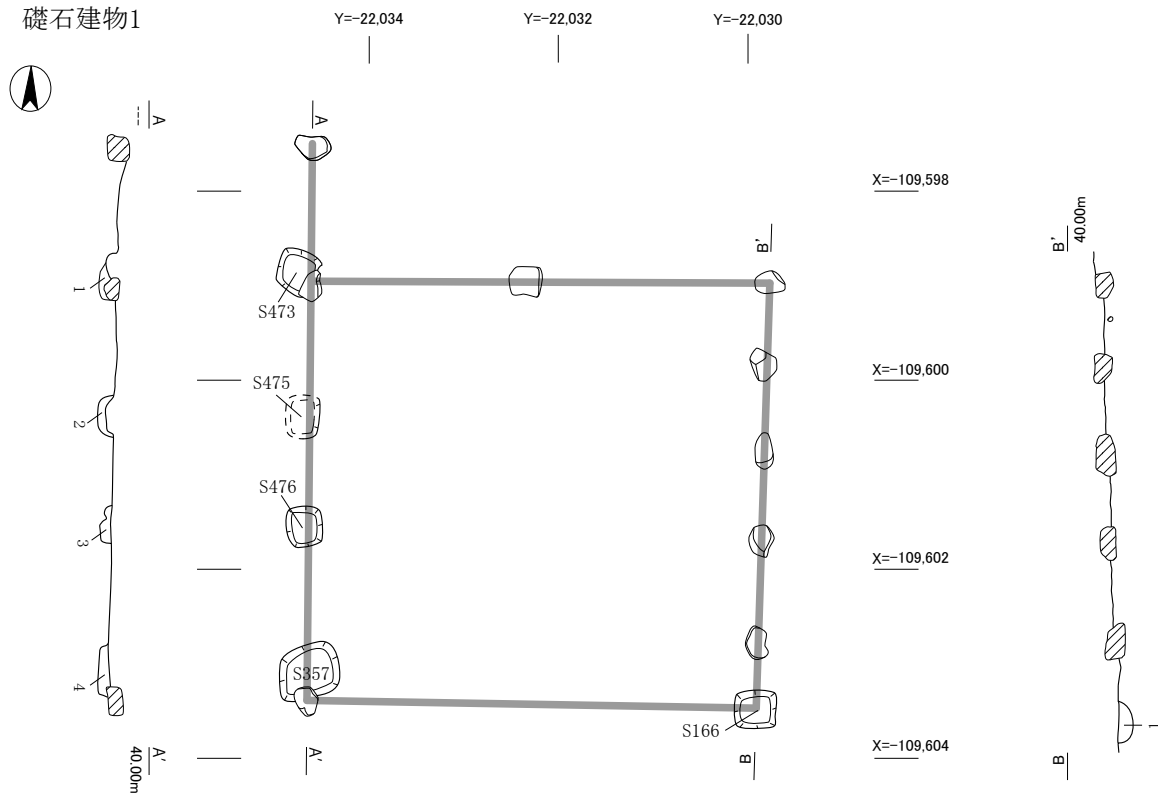
集石遺構 340 (図 18)

B1 グリッドで検出した、長軸長 1.35 m、短軸長 (0.9) m、深さ 0.2 m の土坑である。中央に 0.4 m 大の礫が埋め込まれている。周辺に 0.2 ~ 0.3 m 大の礫を置く。埋土は上層が褐灰色粘土、石の掘方にはにぶい黄橙色砂泥で固められる。

土取坑群 (図 19、図版 7)

調査区南側全体、B ~ D3 グリッドで検出した土坑群である。土坑 124・125・129 ~ 131、141、381 とした、幅 1.5 m ~ 3.0 m 規模の楕円形や方形の土坑が重複している。検出面からの深さは 0.8 ~ 1.06 m を測る。平面上では重複関係があいまいであったが、断面で確認した結果、下層はそれぞれに分かれているものの上層の流れ込みは共通しており、最上層はほぼ同一の土で埋められている。また、シルト質地山が砂礫層に切り替わる深さでほぼ底となっているため、土取り穴と考えられる。

礎石建物1



(473)

1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 しまり強い

(475)

2 10YR3/4暗褐色泥砂 しまり・粘性強い

(476)

3 2.5Y3/1黒褐色泥砂 しまり・粘性あり

(357)

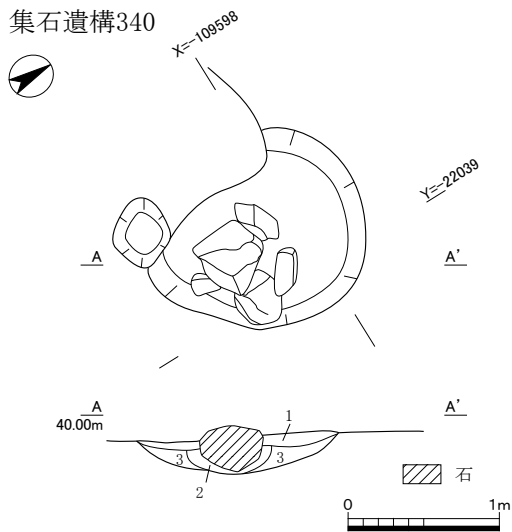
4 2.5Y3/1黒褐色砂泥 しまり強い

(166)

1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 しまり強い、3~5cm大の礫少量含む



集石遺構340



1 10YR4/1褐灰色粘土 赤褐色焼土粒多く含む

2 10YR7/2にぶい黄橙色砂泥 しまり・粘性強い

3 10YR2/1黒色砂泥 シルトブロック多く含む



図 18 個別遺構図 5 礎石建物 1、集石遺構 340 (1/80、1/50)

土取坑群

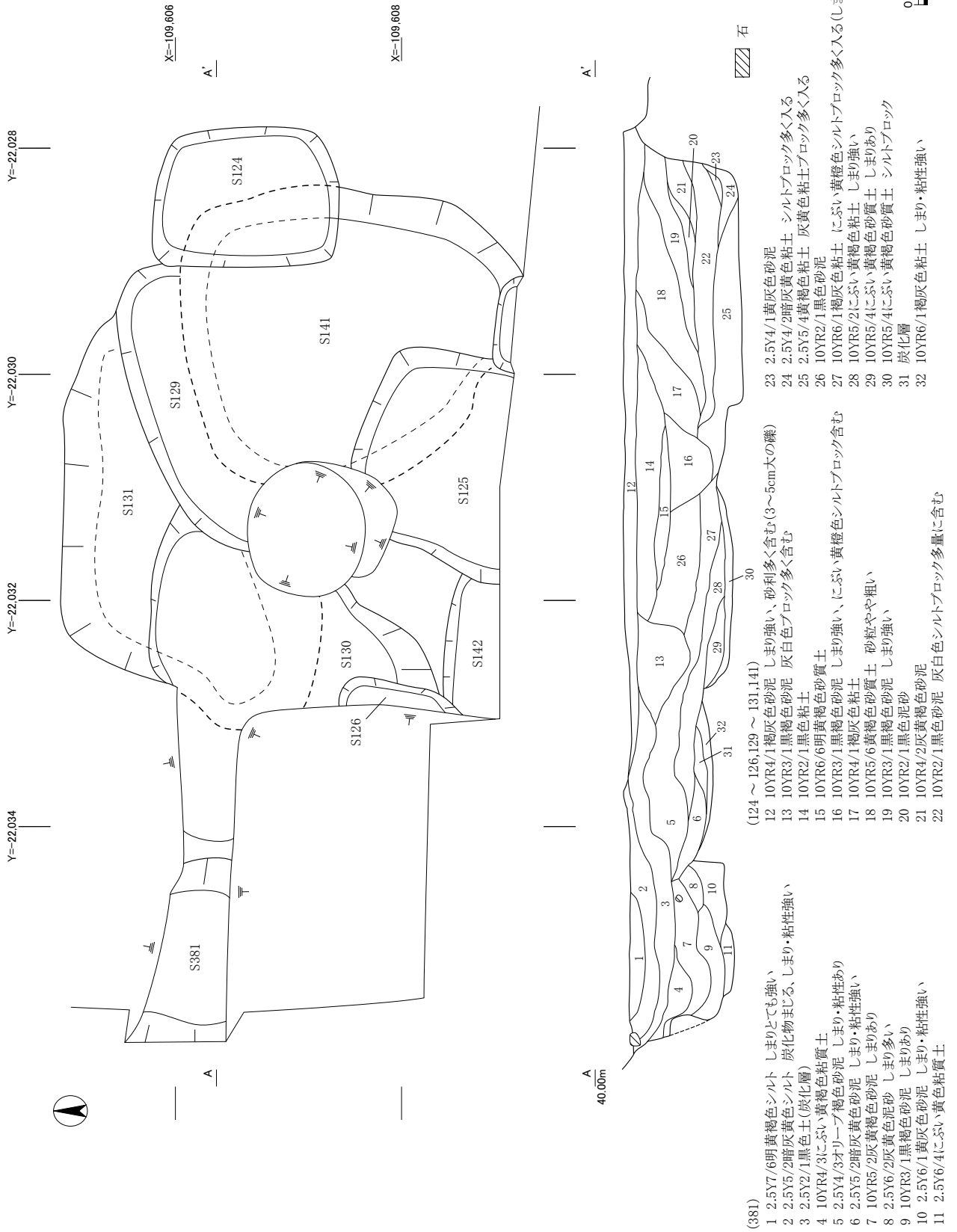


図 19 個別遺構図 6 土取坑群 (1/50)

埋土からは主に土師器皿や播鉢、染付碗などが出土した。概ね中世の遺物であるが、一定数平安時代の遺物が混入していることから、平安時代の遺構を大きく壊して土取坑を掘りこんだものと考えられる。

井戸 351 (図 10、図版 7)

B2 グリッドで検出した素掘りの井戸である。掘方は長軸長 (1.3) m、短軸長 1.2 m の楕円形である。深さは 1.4 m である。底は地山のシルト層下の砂礫が露出している。

(6) 第 4 遺構面の遺構

第 4 遺構面では、柵、溝、ピット、土坑、土取坑を検出した。

柵 1 (図 20、図版 7)

A・B1 グリッドで検出した柱穴列である。柱穴 466～471 のうち、柱穴 466・468・470 は径が長軸長 0.4 m、短軸長 0.35 m の隅丸方形で、柱穴 467・469・471 はそれぞれ径 0.3 m 前後である。柱穴 466 内からは 0.1～0.2 m 大の根石、柱穴 468 からは 0.3 m 大の礎石を検出した。

溝 185・186・195・402 (図 21、図版 7)

B～D1 グリッドで検出した東西方向の溝である。幅 1.3～1.4 m、検出長は約 16.2 m を測る。軸方向は N-93.2°-E である。検出時は約 2～5 m ごとに土坑状の単位が見えたことからそれぞれに番号を付与したが、一連の溝であると考えられる。また、後述する第 5 遺構面の溝 439・440、第 6 遺構面の土橋 465 もほぼ同軸であることから同一の溝である可能性が考えられる。

埋土は上・中・下の 3 段階がみられ、下層はしまりや粘性の強い灰黄褐色～暗灰黄色粘土、中層はしまりの強い黄灰色泥砂、上層は褐灰色～褐色泥砂で、焼土や炭化物を多く含む。上層には 0.5～0.7 m 大の石と、溝 195 以西では 0.04～0.1 m 大のぐり石も多く含んでいる。

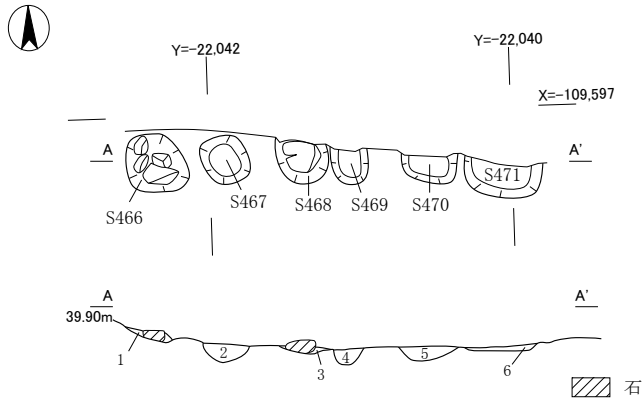
土坑の単位ごとに深さに多少の違いがある。特に後述する土橋 465 付近では底面の高さが上がっている。

溝 188 (図 22、図版 7)

B～D2・3 グリッドで検出した東西方向の溝である。幅 1.4 m、検出長は 9.2 m を測り、東西端は調査区外へ延びる。軸方向は N-95°-E である。深さは 0.74 m で、埋土は 4 層に分かれており、上層はしまりがある黒褐色砂泥や暗褐色砂泥で焼土粒や炭化物を多く含み、瓦を多く含む。下層はしまり・粘性が強いにぶい黄色粘土と黄灰色砂泥で、0.1～0.2 m 大の礫を含む。土取坑とみられる土坑 187・404 に壊される。

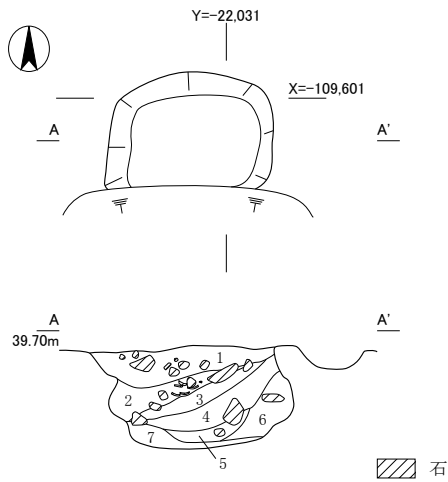
埋土からは 10 箱を超える大量の瓦が出土した。

柵1



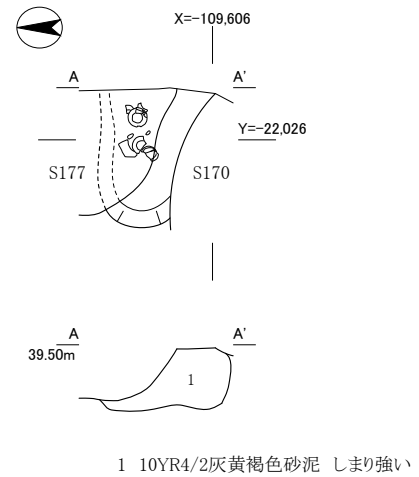
- (466)
1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 しまり・粘性強い
15cm大の礎石含む
- (467)
2 2.5Y3/1黒褐色砂泥 粘性強い
- (468)
3 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 しまり強い
20cm大の礎石含む
- (469)
4 2.5Y3/1黒褐色砂泥 粘性強い
- (470)
5 2.5Y4/1黄灰色砂泥 しまり・粘性あり
- (471)
6 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥

土坑145



- 1 10YR6/2灰黄褐色泥砂 しまり強い、10~20cm大の礫多く含む
- 2 N1.5/0黒色砂泥(炭化層) 10~30cm大の礫と土師皿多く含む
- 3 10YR3/2黒褐色泥砂
- 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 5 10YR5/1褐灰色砂泥 しまり・粘性強い
- 6 2.5Y4/1黄灰色泥砂 しまり強い
- 7 N5/0灰色粘土 炭化物多く含む、しまり・粘性強い

土器溜207



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 しまり強い



図 20 個別遺構図 7 柵 1、土坑 145、土器溜 207 (1/50)

溝185・186・195・402、土坑243

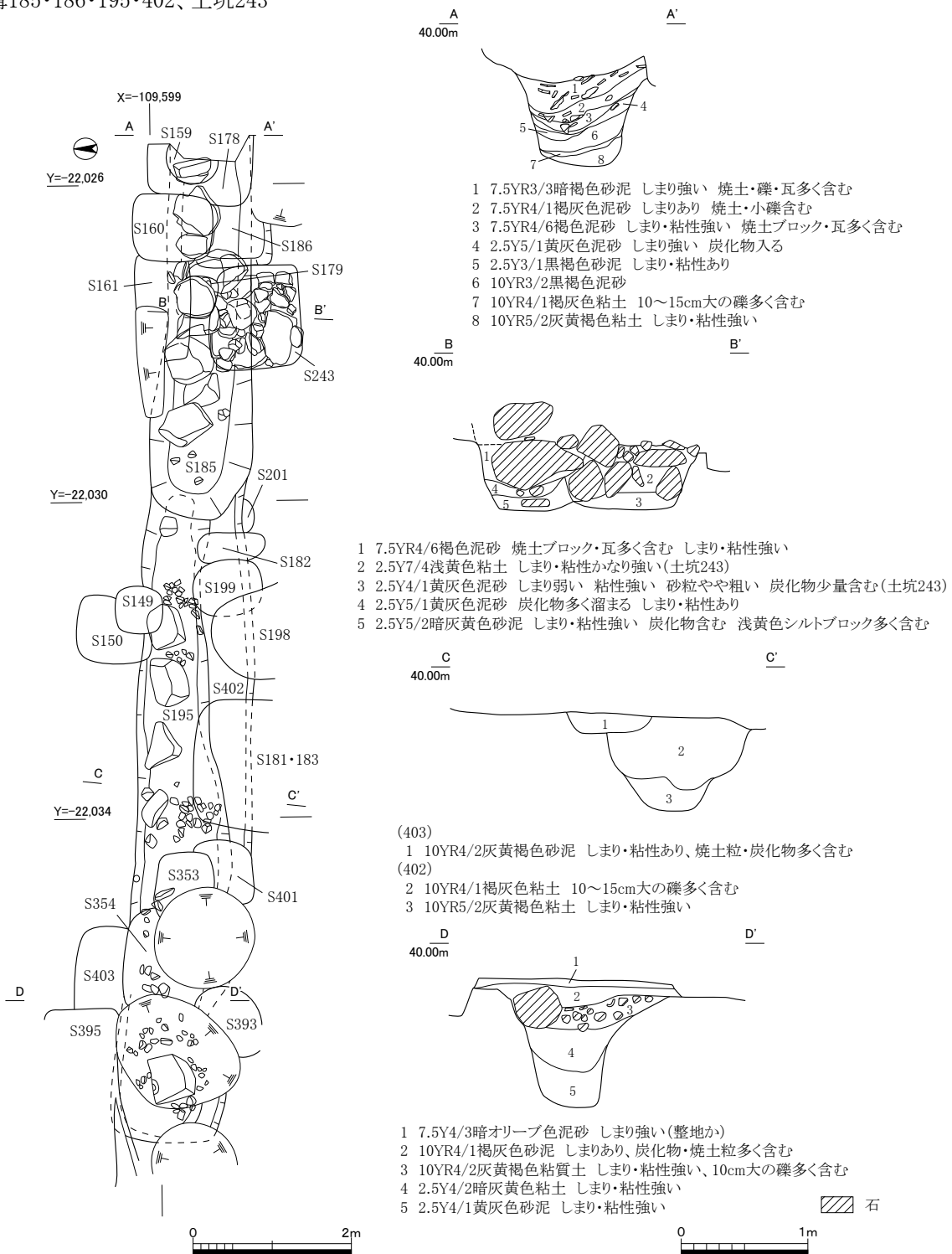


図 21 個別遺構図 8 溝 185・186・195・402、土坑 243 (1/80、1/50)

土取坑187・404、溝188

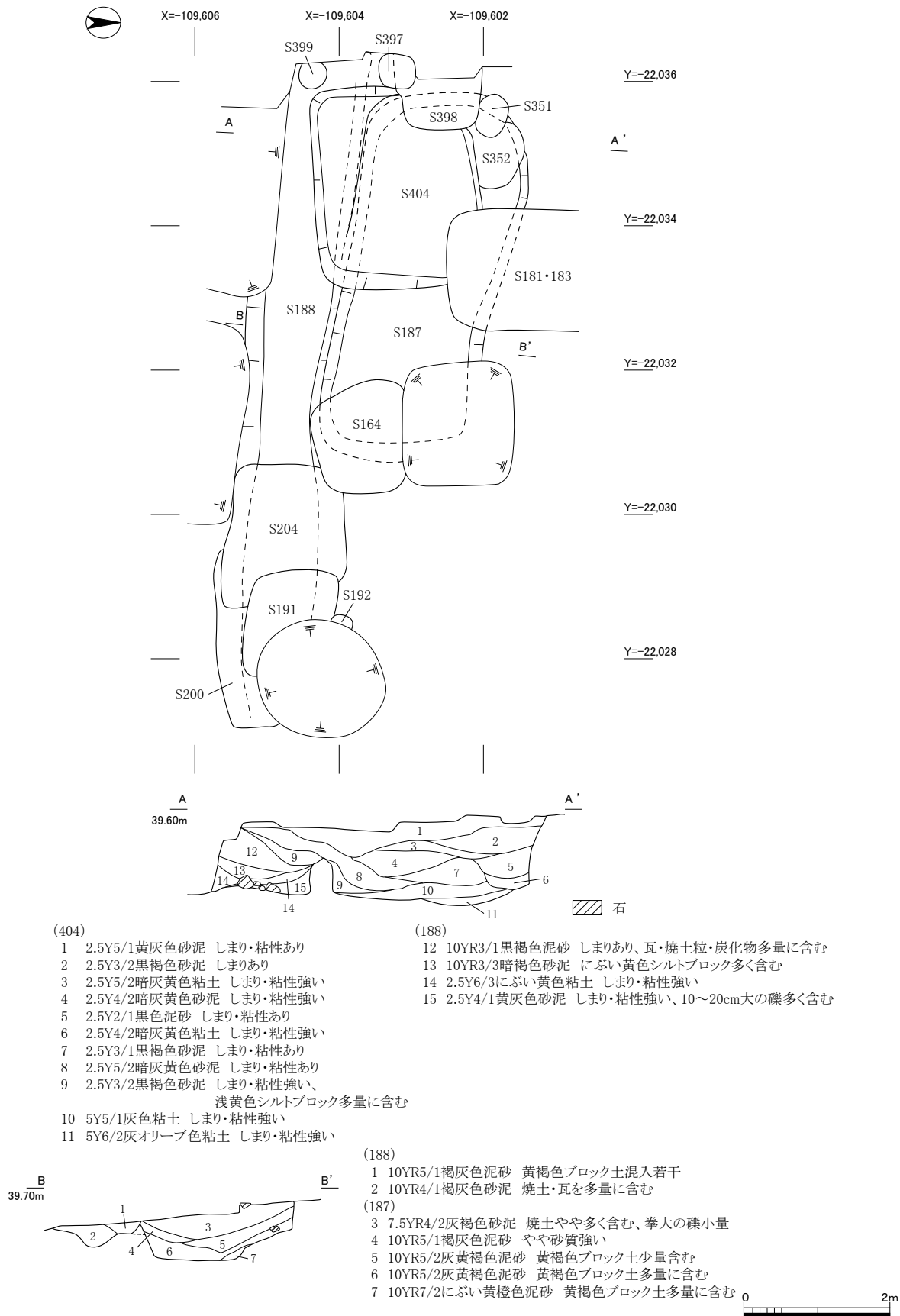


図 22 個別遺構図 9 土取坑 187・404、溝 188 (1/80)

土坑 145 (図 20、図版 8)

C2 グリッドで検出した隅丸方形の土坑である。長軸長 1.1m、短軸長 (0.75) mを測り、深さは 0.7 mである。断面形が不整形でややオーバーハングする様子も見られる。埋土は上層 (1・2層) が灰黄褐色泥砂と炭層、中層 (3・4層) が黒褐色泥砂、下層 (5～7層) がしまりや粘性の強い褐灰色砂泥・灰色粘土と分かれており、特に 2層の炭層から大量の土師器皿や瓦質土器等の遺物が集中して出土した。

土坑 205 (図 11)

D3 グリッドで検出した隅丸方形の土坑である。長軸長 1.4m、短軸長 1.35 mを測り、深さは 0.1 mである。土坑 169・170 に壊される。埋土は灰黄褐色シルトで、小片ばかりではあるが遺物が多数確認された。

土坑 243 (図 21)

D1・2 グリッドで検出した隅丸方形の土坑である。長軸長 1.3 m、短軸長 (1.06) mで、深さは 0.5 mである。埋土は、大きく 2層に分かれており、下層はしまりの弱い黄灰色泥砂で、上層はしまり・粘性の強い浅黄色粘土で、0.3～0.4 m大の石を多く含み、隙間を埋めるように 0.06～0.08 m大のぐり石を入れ、石の上面を平坦にする様子が確認できた。

溝 185 の中・下層を壊しており、溝 185 の上層には壊されていることから、本来の溝の機能時以降、最終埋没時以前の遺構であると考えられる。なお、第 1 遺構面で先述したように、上層に土坑 243 とほぼ同一の形状の集石遺構 045 があるが、集石遺構 045 がしまりの弱い灰白色土に 0.1～0.2 m大のぐり石が多量に入っているのに対し、土坑 243 は 0.3～0.4 m大の石を粘土で固め、上面を平坦にしていることから別の遺構と考えられる。

土取坑 181・183 (図 11)

C1・2 グリッドで検出した南北方向に長い長方形の土坑である。長軸長 3.0 m、短軸長 1.7 mで深さは 0.2～0.8 mである。溝 402 や、後述する土取坑 187・404 を壊している。

土取坑 187・404 (図 22、図版 8)

B・C2 グリッドで検出した東西方向に長い長方形の土坑群である。土取坑 187 は長軸長 5.2 m、短軸長 2.4 mを測り、土取坑 404 は長軸長 2.8 m、短軸長 2.2 mを測る。形状としては土坑 187 が 404 を壊す形で検出したが掘削した結果深度や埋土の様子から一連の土取坑であると判断した。深さは 1.0 mである。溝 188 を壊している。

土器溜 207 (図 20)

D3 グリッドで検出した、楕円形の土坑である。北と南を土坑に壊されるが、長軸長 0.9 m以上、短軸長 0.8 m、深さは 0.4 mを測る。土坑中心部に土師器皿が 3 枚、口縁部が上にくる正位置で置かれており、下に瓦や土師器皿の小片が集中する。

(7) 第5遺構面の遺構

第5遺構面で検出した遺構は溝、ピット、土坑、集石遺構、井戸、落込み状遺構である。

溝 439・440 (図 23、図版 8)

A・B1 グリッドで検出した東西方向の溝である。幅 0.7～0.8 m、検出長 3.6 mを測る。軸方向はN-93°-Eである。深さは0.6 mで、埋土はしまりの強い灰黄褐色砂泥である。

溝 239 (図 24)

C1・2 グリッドで検出した南北方向の溝である。幅 0.45 m、検出長 1.2 mを測る。軸方向はN-3°-Wである。深さは0.11 mで、埋土はしまりの強い暗黄灰色砂泥で瓦を多く含む。

土坑 413・437 (図 23)

A・B1 グリッドで検出した、長軸長 6.6 m、短軸長 0.8 mの土坑である。調査区北・西側へと続いており形状は明らかでない。深さは0.65 mで、埋土は黒褐色粘土である。炭化物と遺物を大量に含んでおり、廃棄土坑の可能性も考えられる。

落込み状遺構 240 (図 25、図版 8)

調査区東 (D2・3 グリッド) で検出した、幅 (3.3) m、検出長 9.0 mを測る落ち込みで、西から東にかけて緩やかな傾斜になっている。深さは最大で 0.5 mであった。埋土はにぶい黄色～暗灰黄色砂泥で、北から南へ堆積する様子が確認できる。埋土からは土師器皿などが出土した。

落込み状遺構 405・425 (図 26、図版 8)

調査区西側 (A～C1・2 グリッド) で検出した、土坑状の落込み 405 と、なだらかに西から東へ下がる落込み 425 である。当初別遺構として検出したが、位置関係や埋土から同一遺構と判断した。埋土は上層がしまりの強いオリーブ褐色泥砂で、中層が黄灰色～灰オリーブ色泥砂、下層は灰色～浅黄色粘土である。緩やかに北から南、西から東へ堆積する様子を確認することができた。埋土からは土師器皿や瓦質土器のミニチュア、白色土器の高坏などが出土している。

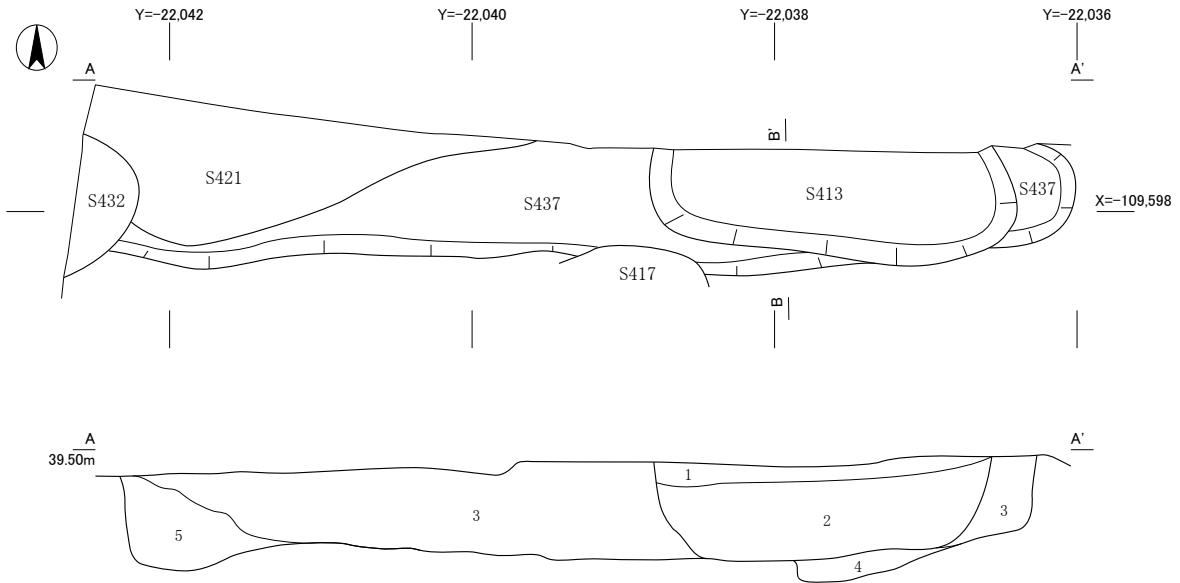
集石遺構 420 (図 26)

A1 グリッドで検出した、楕円形の土坑である。長軸長 1.7 m、短軸長 (1.2) mを測り、深さは 0.3 mである。埋土は暗灰黄色で、底面に 0.1～0.2 m大の礫が集中する様子を確認した。落込み状遺構 425 の縁に近いことから関連する遺構である可能性も考えられる。

土器溜 215 (図 27、図版 8)

D1 グリッドで検出した隅丸方形の土坑である。長軸長 1.04 m、短軸長 (0.84) mを測り、深さは 0.3 mである。埋土は、上層は粘性の強い黄灰色砂泥で、下層はしまりの強い暗灰黄色～オリーブ褐色泥砂である。下層に遺物が大量に入る。

土坑413・437

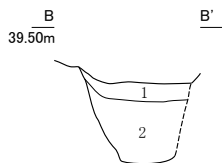


(413)

- 1 10YR4/1 褐灰色砂泥 しまり強い
- 2 10YR3/1 黒褐色粘土 しまり・粘性あり、炭化物多量に含む

(437)

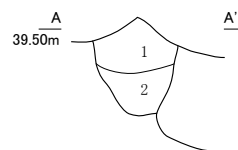
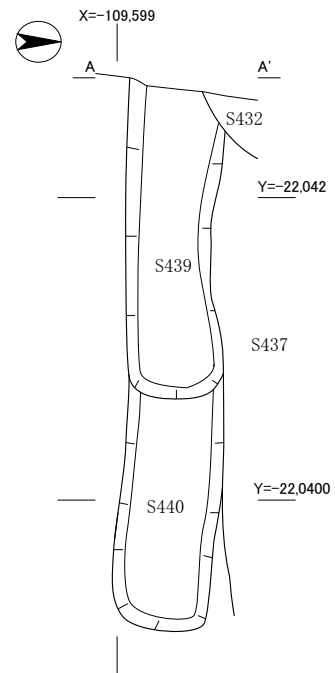
- 3 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 しまり・粘性強い
- 4 10YR5/1 褐灰色シルト
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂 しまり強い



- 1 10YR4/1 褐灰色砂泥 しまり強い
- 2 10YR3/1 黒褐色粘土 しまり・粘性あり、炭化物多量に含む



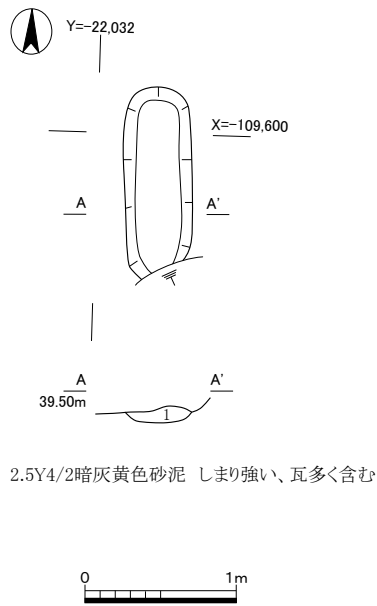
溝439・440



- 1 10YR4/1 褐灰色泥砂
- 2 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 しまり・粘性強い

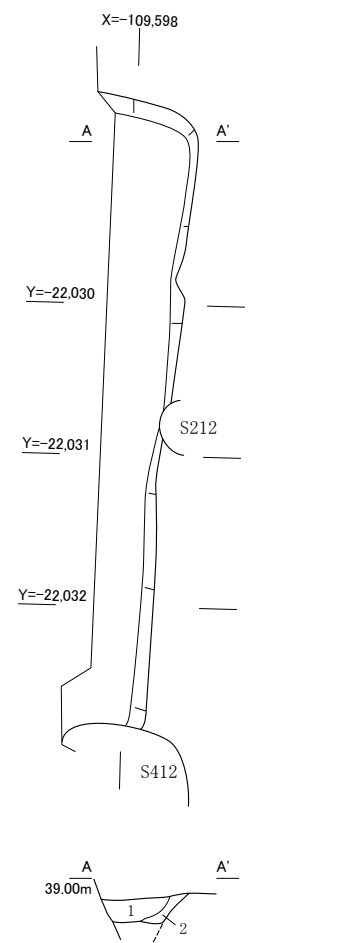
図 23 個別遺構図 10 土坑 413・437、溝 439・440 (1/50)

溝239



1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 しまり強い、瓦多く含む

溝状遺構220



1 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 粘性あり
2 10YR5/2灰黄褐色粘土 しまり・粘性あり

図24 個別遺構図11 溝239、溝状遺構220 (1/50)

土器溜 415 (図27、図版8)

B1 グリッドで検出した隅丸方形の土坑である。長軸長 1.75 m、短軸長 (1.15) mを測り、深さは 0.7 mである。溝 402 の西端の石で一部を壊されていた。埋土は上層が黒褐色砂泥、下層はしまりの強い黄灰色泥砂である。下層から大量の土師器皿が出土した。

井戸 410 (図27、図版8)

B・C1 グリッドで検出した隅丸方形の井戸である。長軸長 1.06 m、短軸長 (0.5) mを測り、深さは 1.0 mを超える。

溝状遺構 220 (図24)

C～D1 グリッドで検出した、調査区外の北側へ続く溝状の遺構である。長軸長 4.2 m、短軸長 (0.6) m、深さは 0.2～0.35 mで、埋土はにぶい黄褐色泥砂と灰黄褐色粘質土である。西側は土坑 412

落込み状遺構240

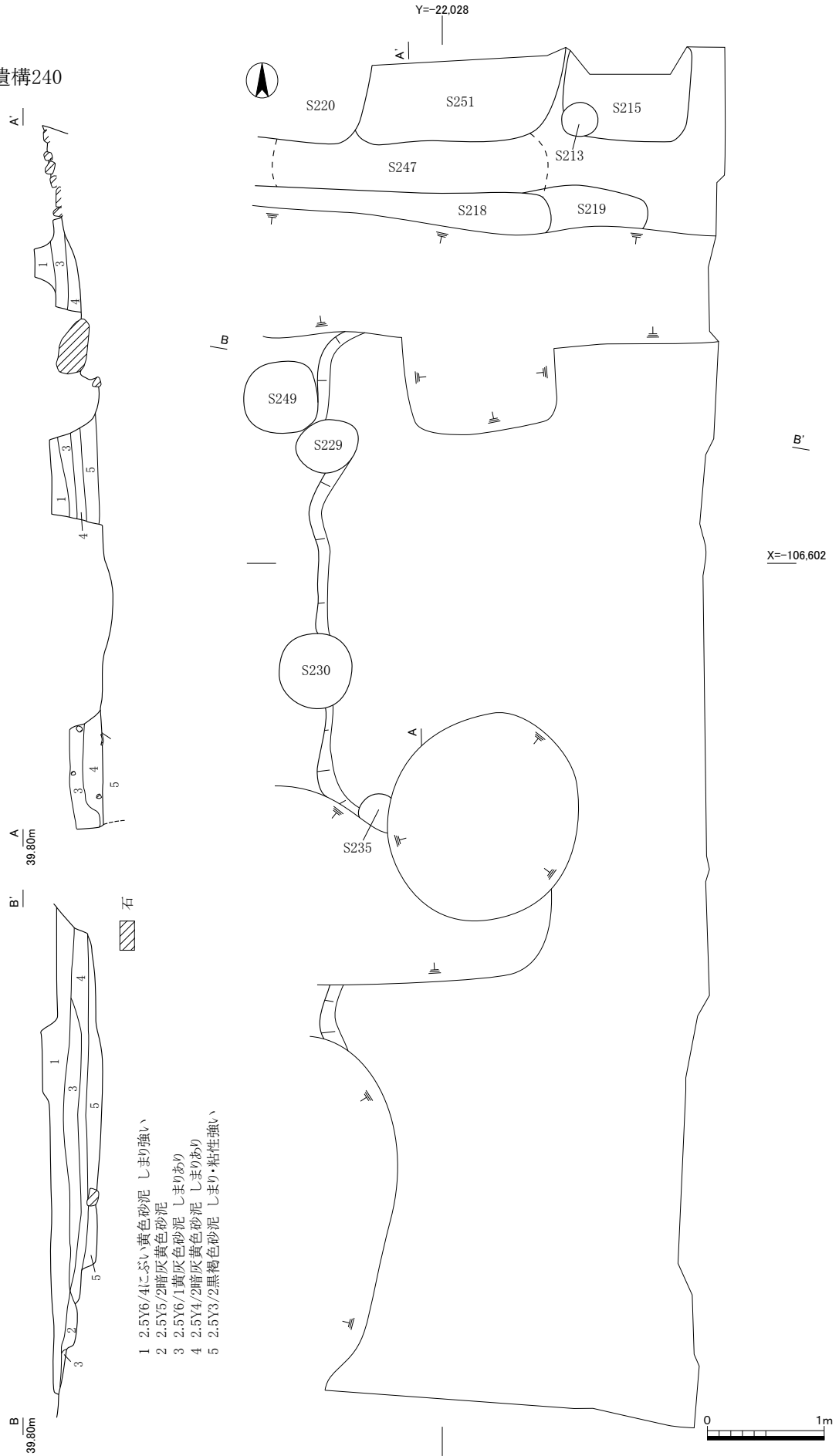


図 25 個別遺構図 12 落込み状遺構 240 (1/50)

集石遺構420、落込み状遺構405・425

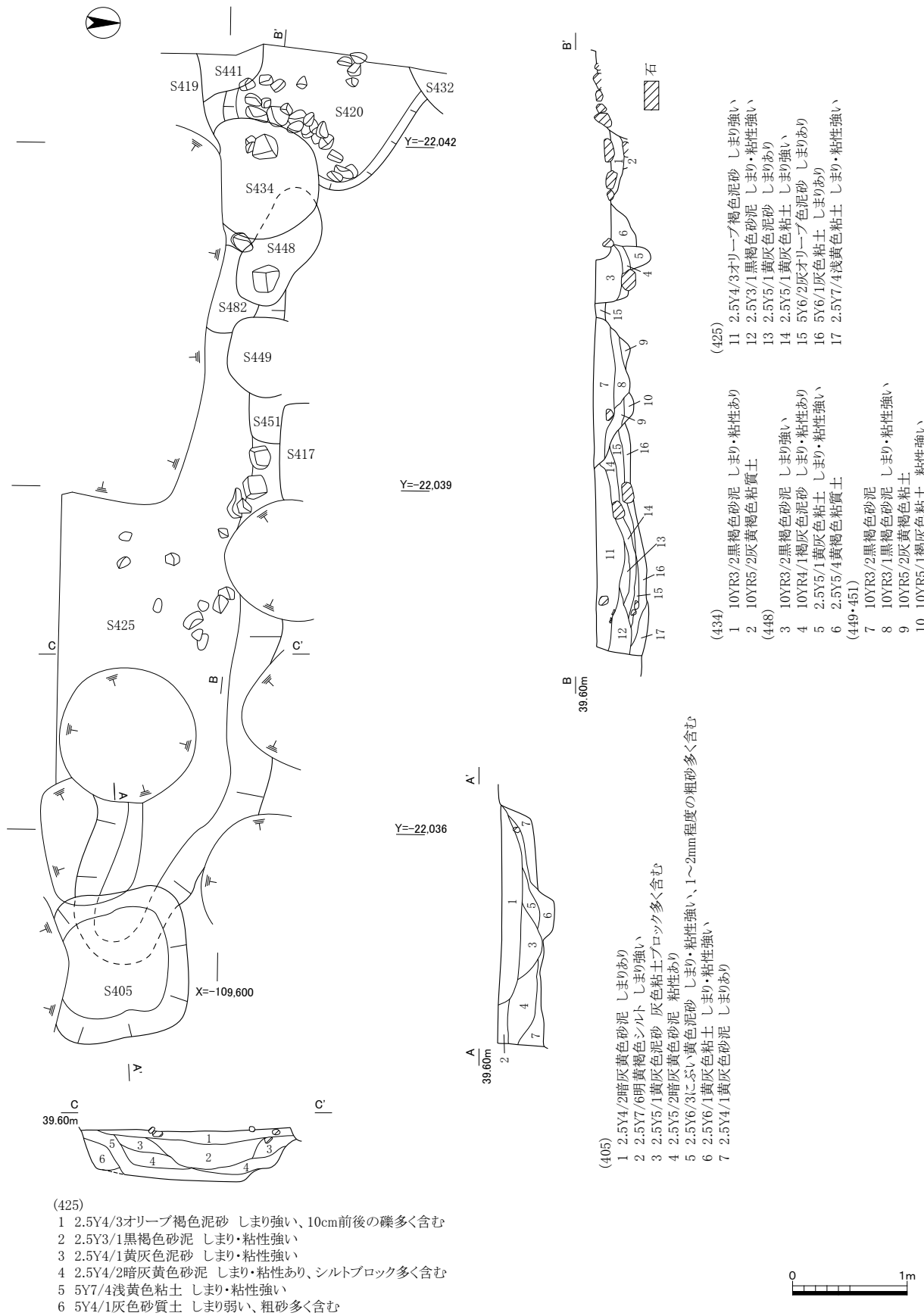
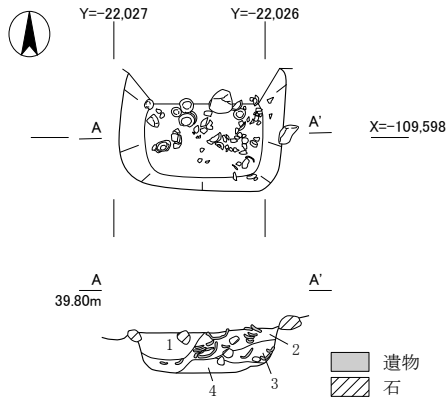


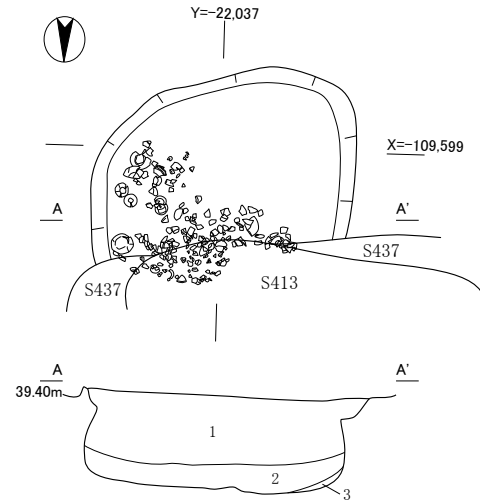
図 26 個別遺構図 13 集石遺構 420、落込み状遺構 405・425 (1/50)

土器溜215



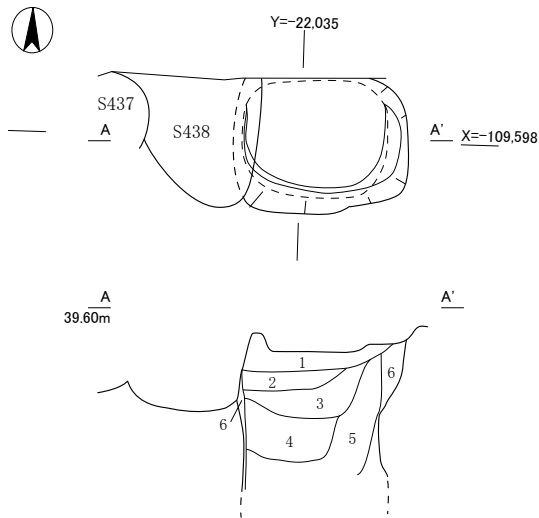
- 1 2.5Y4/1黄灰色砂泥 粘性強い、φ15cmの礫・遺物微量含む
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂 粘性・しまりあり、土師皿多量に含む
- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 しまり強い、φ5~10cmの礫含む、土師皿含む
- 4 2.5Y6/2灰黄色泥砂 しまり・粘性強い

土器溜415



- 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 2 2.5Y4/1黄灰色泥砂 しまり・粘性あり、遺物大量に含む
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 しまり・粘性強い

井戸410



- (410)
- 1 2.5Y5/1黄灰色砂泥 しまりあり
 - 2 2.5Y3/2黒褐色砂泥 しまり・粘性強い
 - 3 5Y6/1灰色泥砂 しまり弱い、粒砂多く含む
 - 4 5Y5/1灰色砂泥 粘性強い、粒砂多く含む
 - 5 5Y4/3暗オリーブ色砂泥 しまり・粘性強い
 - 6 5Y4/1灰色砂泥 しまり強い



図 27 個別遺構図 14 土器溜 215・415、井戸 410 (1/50)

に壊される。直下に、後述する溝状遺構 252 が存在する。

(8) 第6遺構面の遺構

第6遺構面で検出した遺構はピットが多く、他に土坑や土橋、落込み状遺構を確認した。

溝状遺構 252 (図 13)

C～D1 グリッドで検出した、調査区外の北側へ続く溝状の遺構である。長軸長 (6.7) m、短軸長 0.5 m、深さは 0.2 m で、埋土はしまり・粘性ともに強い黒褐色砂泥である。直上に溝状遺構 220 があり、遺物の年代もほぼ同一であることから、同一遺構であった可能性も考慮に入れておきたい。

落込み状遺構 285・297 (図 28、図版 9)

調査区東 (D1～3 グリッド) で検出した、幅 2.65 m、検出長 11.0 m を測る緩やかなカーブを描く溝状の落込みである。深さは最大で 0.2 m であった。埋土はオリーブ褐色砂泥である。埋土からは土師器皿が出土した。遺物量は少ない。

なお、落込み状遺構 285・297 の底面からは関連する遺構として集石遺構 250 や土坑 280、溝 281 を確認した。以下付属施設として報告する。

集石遺構 250 D2 グリッドで検出した集石遺構である。長軸長 2.9 m、短軸長 1.2 m で深さは 0.1～0.4 m を測る。埋土は大きく分けると 2 層である。上層は 0.1～0.2 m の礫を多く含み、中央付近に大量の瓦が集中していた。下層はしまり・粘性の強い黒褐色砂泥である。

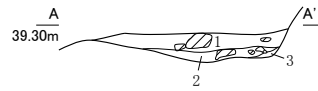
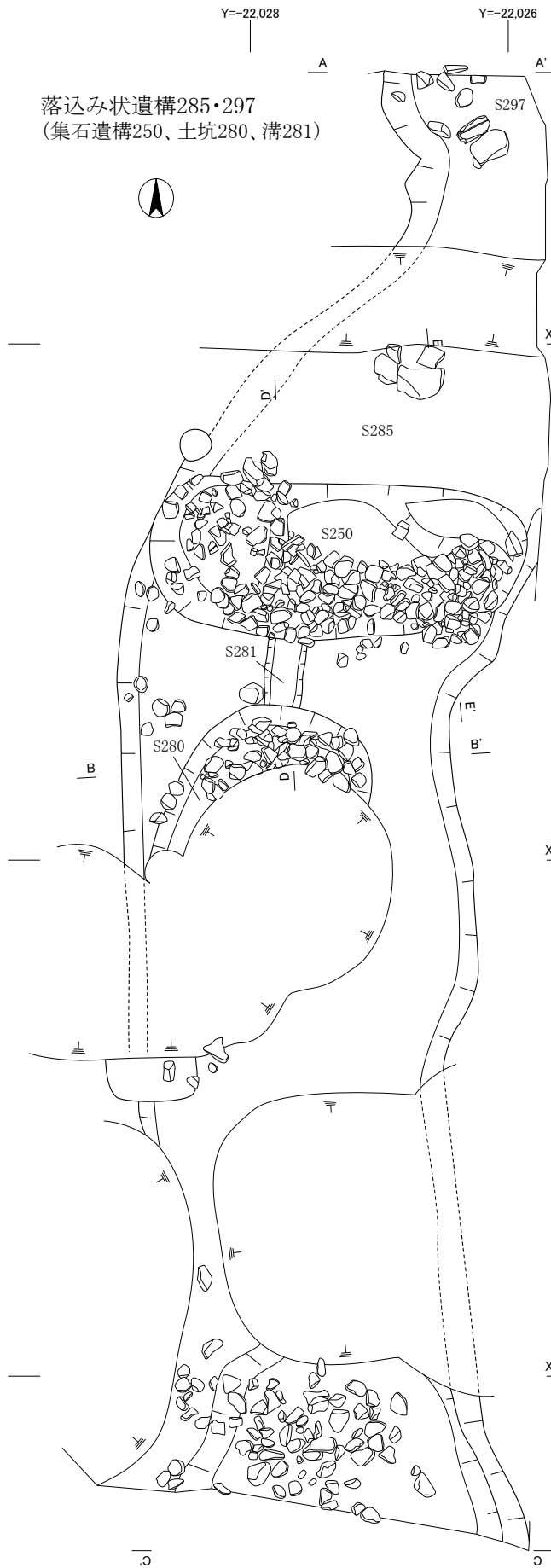
土坑 280 D2 グリッドで検出した土坑である。長軸長 (1.6) m、短軸長 (1.4) m で深さは 0.4 m である。南側は上層の遺構で大きく壊されている。埋土は 2 層に分かれており、上層はしまりの強い黒褐色泥砂で、下層はしまり・粘性の強い暗灰黄色粘土で 0.1～0.2 m 大の礫を多く含む。

溝 281 集石遺構 250 から土坑 280 につながる溝である。幅 0.35 m で、検出長は 1.0 m である。土坑 280 の下層に潜り込む様子を確認した。埋土はしまりが弱い黒褐色砂泥でほぼ空洞化している。

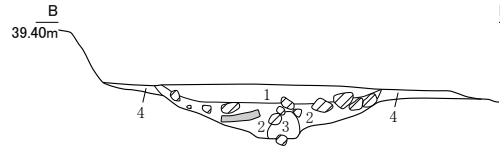
土橋 465 (図 29、図版 9)

B1 グリッドで検出した遺構である。四方を溝と攪乱に壊されているため、平面形は不明である。長軸長 (1.7) m、短軸長 (0.6) m を測り、深さは 0.8 m である。埋土は上層が地山に似た灰黄色シルトで、下層は黄褐色泥砂や黄灰色砂泥である。上層はしまりが強い。遺物は出土していない。

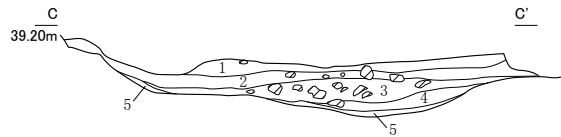
落込み状遺構285・297
(集石遺構250、土坑280、溝281)



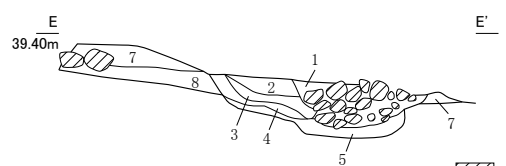
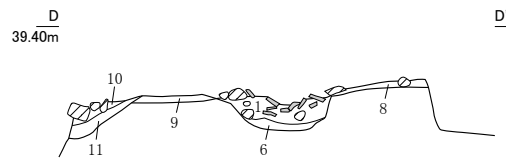
- (297)
- 1 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥
 - 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
 - 3 2.5Y3/1黒褐色粘土



- (280)
- 1 2.5Y3/1黒褐色泥砂 しまり強い
 - 2 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 しまり・粘性強い
 - 3 2.5Y3/2黒褐色砂泥 しまり弱い、ほぼ空洞
 - 4 7.5YR4/2灰褐色シルト



- (285)
- 1 2.5Y6/8明黄褐色シルト しまり強い
 - 2 5Y5/1灰色粘土 しまり強い
 - 3 5BG5/1青灰色粘土 しまり・粘性強い、φ15~20cmの礫多く含む
 - 4 5Y7/1灰白色シルト
 - 5 5Y8/1灰白色シルト



石
瓦

- (250)
- 1 2.5Y7/1灰白色粘土 しまり・粘性強い、φ15~20cmの礫・瓦多く含む
 - 2 2.5Y6/8明黄褐色シルト しまり強い、暗灰黄色粘質土まじる
 - 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 しまり・粘性強い
 - 4 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 しまり強い、φ3~5cmの礫含む
 - 5 2.5Y3/1黒褐色砂泥 しまり・粘性強い
 - 6 2.5Y6/2灰黄色砂泥
- (285)
- 7 2.5Y6/8明黄褐色シルト しまり強い
 - 8 2.5Y5/4黄褐色シルト しまり強い
- (281)
- 9 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- (280)
- 10 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
 - 11 2.5Y3/2黒褐色砂泥



図28 個別遺構図15 落込み状遺構285・297 (1/50)

土橋465

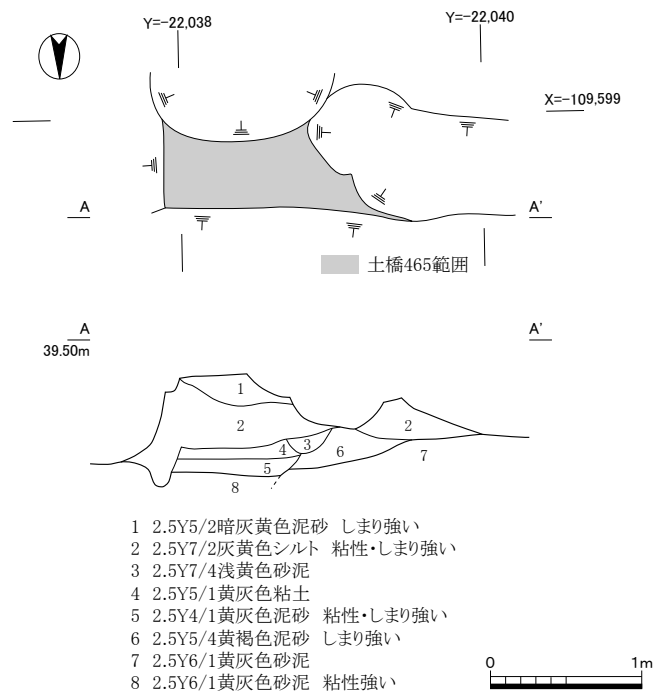


図 29 個別遺構図 16 土橋 465 (1/50)

4. 遺物

今回の調査では、平安時代から江戸時代の遺物が出土した（表3）。第1・2面は主に江戸時代、第3面は主に桃山時代、第4・5面は主に室町時代、第6面は主に平安時代から鎌倉時代の遺物が出土した。

出土遺物全体の傾向をみると、室町時代の土器や瓦が大半を占め、次いで桃山時代、鎌倉時代、江戸時代、平安時代となる。江戸時代の遺物が僅少であることや、室町時代の瓦が多いことが特徴である。平安時代の遺物は出土したが、該当時期の遺構に伴うものが少ない。

表3 遺物概要表

	Aランク	Bランク	Cランク	コンテナ箱数
江戸時代	土師器5点、肥前磁器2点、施釉陶器3点、焼締陶器2点、瓦質土器1点、土製品1点、瓦1点			
室町時代～桃山時代	土師器98点、磁器3点、白磁2点、施釉陶器14点、白色土器3点、焼締陶器8点、瓦器3点、瓦質土器7点、須恵器1点、石製品2点、瓦17点			
鎌倉時代	土師器1点、白磁1点、青磁1点、瓦質土器1点、瓦10点			
平安時代	緑釉陶器1点、灰釉陶器1点			
	合計190点（7箱）	0箱	107箱	114箱

（1）江戸時代の遺物

井戸 027（図 30）

1・2は肥前磁器の碗である。外面に呉須で文様を描く。3は焼締陶器の播鉢である。信楽産。

これらの土器の特徴は、京都Ⅻ期中段階と考えられる。

（2）室町時代から桃山時代の遺物

集石遺構 015（図 30）

4・5は土師器の皿Sである。体部内面から口縁部外面にかけてヨコナデを施して調整した皿で、口縁部はゆるやかに外反する。体部外面は器面調整をほとんど行わない。4・5とも体部内面に圏線状の凹みを有する。

これらの土器の特徴は、京都Ⅺ期中段階と考えられる。

集石遺構 045（図 30）

6は土師器皿Sである。7は土製品の塩壺で、身にあたる。口縁部のみ丁寧にヨコナデし、肩部が不明瞭である。8・9は焼締陶器の播鉢である。丹波産。

これらの土器の特徴は、京都Ⅺ期中段階と考えられる。

土器溜 043（図 30、図版 10・12）

10～12は土師器皿Nrである。小ぶりで、内面全体をナデ仕上げしており、外面はほぼ未調整（オサエ）である。13は土師器皿Sbである。小ぶりな丸底の皿で調整は土師器皿Sと同じである。14

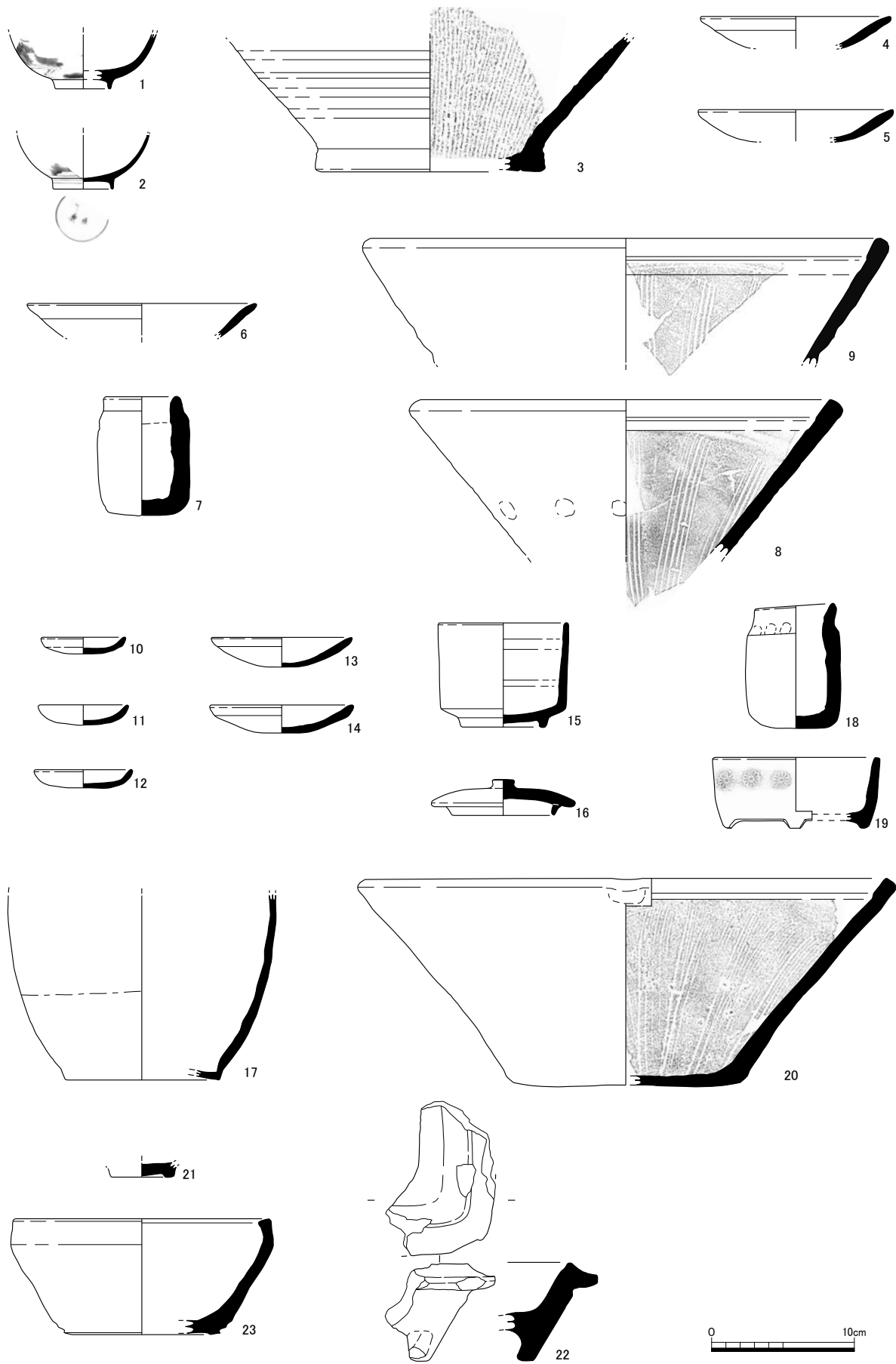


图30 遺物実測図1 (1/4)

は土師器皿 S である。

15～17は施釉陶器である。15は筒茶碗である。16は蓋である。17は壺である。18は土製品の塩壺の身である。19は瓦質土器の火鉢である。20は焼締陶器の播鉢である。

これらの土器の特徴は、京都XI期中段階と考えられる。

集石遺構 080 (図 30)

21は施釉陶器の天目碗である。瀬戸産。22は瓦質土器の火鉢である。方形の火鉢で脚部を四隅に配置するものと考えられる。23は焼締陶器の鉢である。

これらの土器の特徴は、京都XI期と考えられる。

土取坑群 124・125・129～131・141 (図 31)

24・25は土師器皿 S である。25は口縁部に油煙が付着する。

26は青磁の皿である。27は緑釉陶器の碗である。28は灰釉陶器の碗である。26～28は混入品で、26は鎌倉時代、27・28は平安時代の遺物である。29・30は輸入磁器の染付碗である。呉須で内外面に文様を描く。31～34は施釉陶器である。31は碗である。32は折縁皿である。33は注口鉢である。34は沓茶碗である。35は土師器の焙烙である。36は焼締陶器の播鉢である。

これらの土器の特徴は、京都XI期中段階と考えられる。

土取坑 381 (図 31、図版 10)

37は土師器皿 Nr である。38～41は土師器皿 S で、38・39は燈明皿として使用している。42は施釉陶器の折縁皿である。瀬戸産。43は施釉陶器の志野の蓋である。長石釉を全体に施す。44～46は施釉陶器の志野皿である。44・45は二次被熱して全体が煤けている。47は焼締陶器の壺である。

これらの土器の特徴は、京都XI期中段階と考えられる。

溝 185 (図 31)

48・49は土師器皿 N である。底面から強く屈曲して口縁部が外反し、器壁の凹凸が顕著な皿である。橙色系の色調を呈し、指オサエが明瞭に残るものもある。50は土師器皿 Sh である。いわゆるへそ皿で、小ぶりで底部を小さく押し上げた形状である。51は土師器皿 S である。室町時代の土師器皿 S は、口縁部が内湾気味に立ち上がり、器壁が薄く丁寧なつくりである。白色系の色調を呈する。

これらの土器の特徴は、京都X期古～中段階と考えられる。

土坑 145 (図 31、図版 10)

52は土師器皿 Sh である。53～58は土師器皿 Sb である。59～62は土師器皿 S である。63は白磁の皿である。64は施釉陶器で、瀬戸の盤である。小さな粘土塊をつぶして短い脚部とする。65は瓦器の椀である。体部内面に暗文ミガキを施す。66は瓦質土器のミニチュア羽釜である。脚部は欠損している。67は瓦質土器の火舎である。大型の火鉢で口縁部に2条突帯を廻らせ、その間に菱文を刻む。

これらの土器の特徴は、京都X期古段階と考えられる。

土取坑 187 (図 32)

68～70は土師器皿 S である。71・72は施釉陶器である。71は椀で唐津産、72は皿で瀬戸産。73は須恵器の鉢で混入品である。

これらの土器の特徴は、京都X期新段階と考えられる。

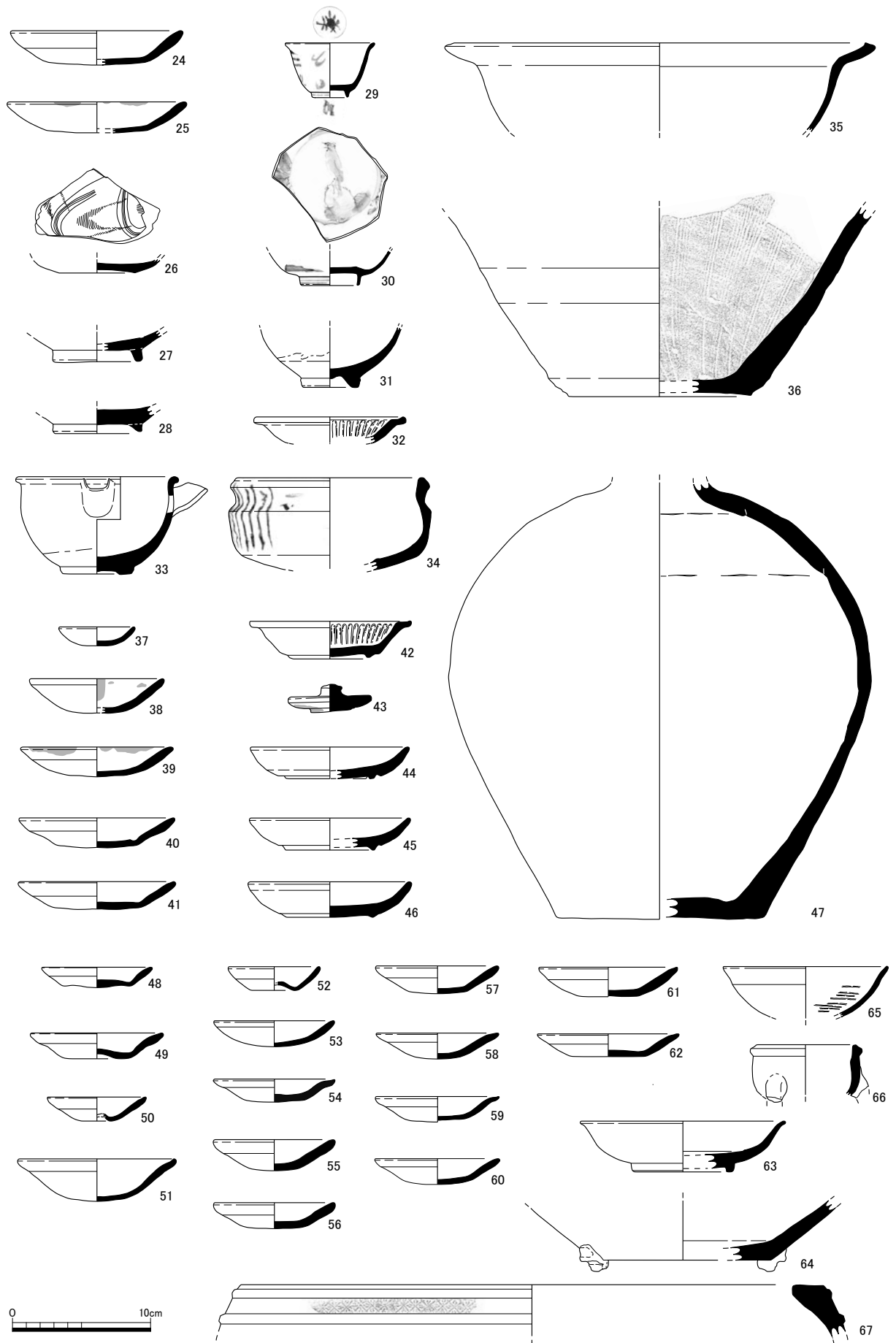


图 31 遺物実測図 2 (1/4)

土器溜 207 (図 32、図版 10)

74 は土師器皿 Sb である。75～78 は土師器皿 S である。75・76・78 は燈明皿として使われている。79 は焼締陶器の壺である。丹波産。

これらの土器の特徴は、京都X期新段階と考えられる。

土器溜 413 (図 32、図版 10～12)

80 は土師器皿 Nr である。81 は土師器皿 S である。82 は輸入磁器の染付碗である。83 は施釉陶器の輪花鉢である。口縁部内面と体部内面に草文を印刻し、淡黄色釉を全体に施す。瀬戸産。84 は土師器の焙烙である。85・86 は焼締陶器である。85 は水差である。体部上方に円孔が一カ所ある。86 は盤である。

これらの土器の特徴は、京都XI期古～中段階と考えられる。

落込み状遺構 240 (図 32、図版 11)

87 は土師器皿 N である。88 は土師器皿 S である。89 は瓦質土器の羽釜である。

これらの土器の特徴は、京都IX期古段階と考えられる。

落込み状遺構 425 (図 32、図版 11)

90 は土師器皿 N である。91・92 は土師器皿 Sh である。93～100 は土師器皿 S である。93 は小皿で、口径 7.2 cm である。94～100 は中皿で、口径 11.1～11.8 cm の法量分布がある。

101 は白色土器の高坏である。102・103 は瓦質土器である。102 は鍋、103 はミニチュア羽釜である。104 は瓦器の椀である。105 は石鍋である。滑石製。

これらの土器の特徴は、京都VIII期古～中段階と考えられる。

土器溜 215 (図 33、図版 11・12)

106～118 は土師器皿 N である。106～114 は小皿で口径 7.3～8.2 cm、115～118 は中皿で口径 10.3～10.7 cm の法量分布がある。119～122 は土師器皿 Sh で、口径 6.6～6.8 cm の法量分布がある。123～128 は土師器皿 S である。123～125 は小皿で、口径 6.8～8.2 cm、126～128 は中皿で口径 11.5～11.6 cm の法量分布がある。129 は土師器の皿で、京域外産か。130 は瓦器碗である。

131 は白磁の高坏である。132・133 は白色土器の高坏である。132 は坏部から脚部にかけて残存し、脚柱部は丸みを帯びる。133 は脚部で、裾部は内湾する。

これらの土器の特徴は、京都VIII期古～中段階と考えられる。

土器溜 415 (図 33、図版 12)

134 は土師器皿 Nr である。135 は土師器皿 Sh である。136～148 は土師器皿 S である。136～144 は小皿で、口径 7.8～9.5 cm の法量分布がある。145～148 は中皿で、口径 13.4～14.8 cm の法量分布がある。144 は燈明皿として使われている。

これらの土器の特徴は、京都X期古段階と考えられる。

溝状遺構 220 (図 33、図版 12)

149・150 は土師器皿 N である。151・152 は土師器皿 S である。153 は瓦質土器の鍋である。

これらの土器の特徴は、京都VIII期古～中段階と考えられる。

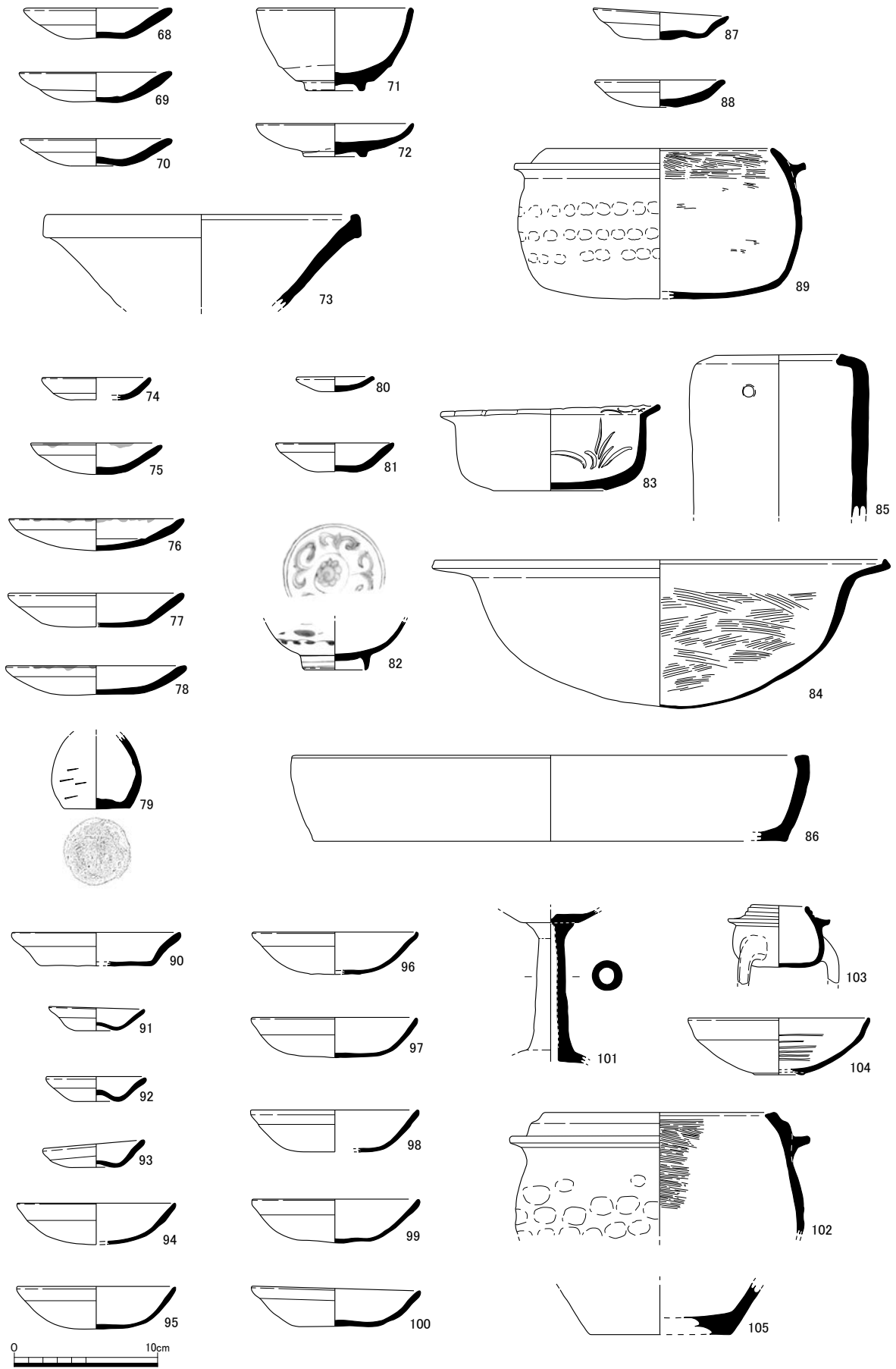


图 32 遺物実測図 3 (1/4)

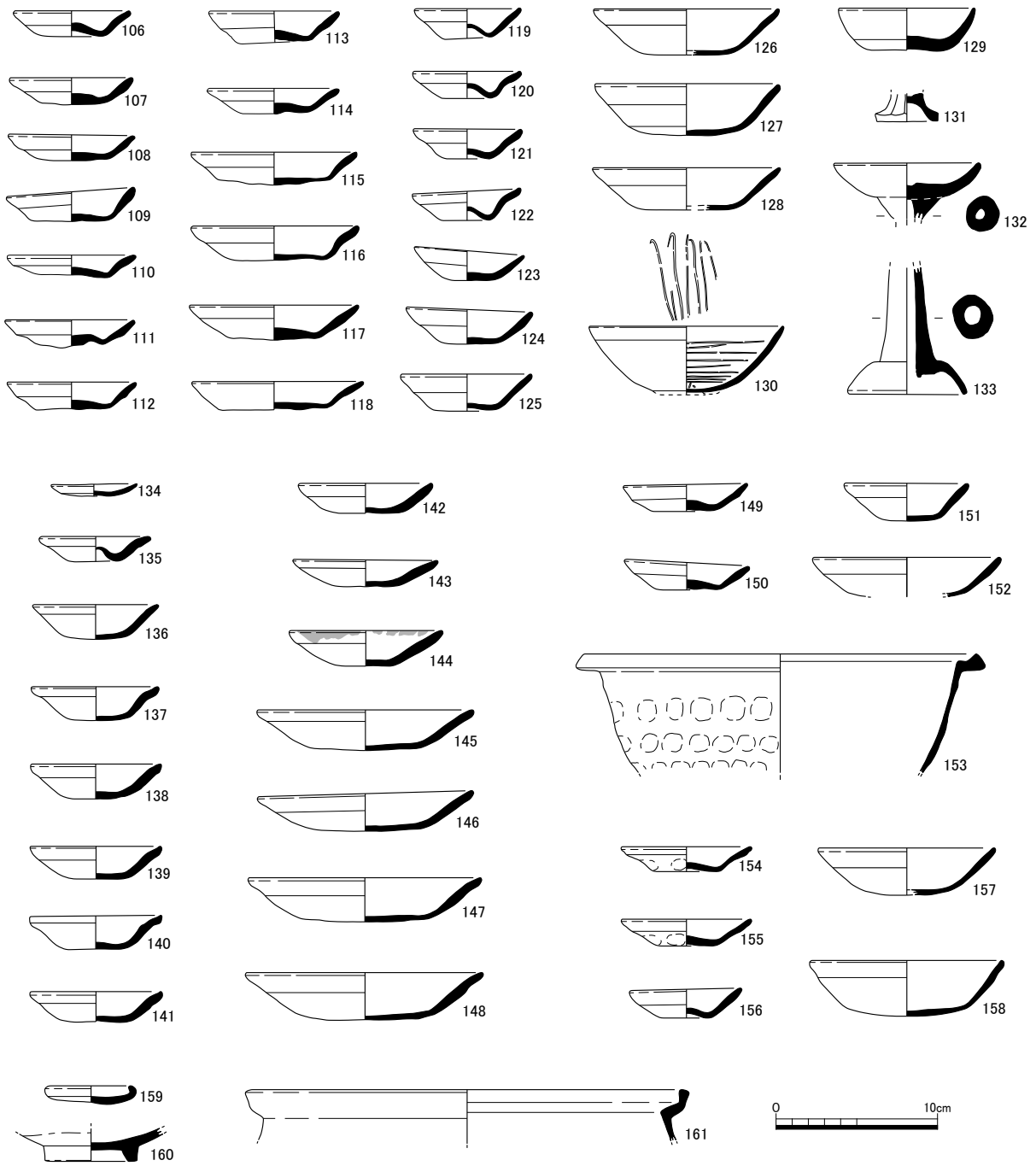


图 33 遺物実測図 4 (1/4)

溝状遺構 252 (図 33)

154・155 は土師器皿 N である。156 は土師器皿 Sh である。157・158 は土師器皿 S である。
これらの土器の特徴は、京都Ⅷ期古段階と考えられる。

(3) 鎌倉時代の遺物

集石遺構 250 (図 33)

159 は土師器皿 Ac である。いわゆるコースター形で、口縁を短く折り返す。160 は白磁の碗である。161 は瓦質土器の鍋である。

これらの土器の特徴は、京都Ⅶ期古～中段階と考えられる。

(4) 石製品 (図 34)

石 1 は砥石である。扁平な仕上砥で鳴滝産と考えられる。頁岩製。土取坑 124・141 から出土。

(5) 瓦 (図 35～37、図版 13)

瓦 1 は土管と考えられる。丸瓦を円柱形のままにしたものである。江戸時代。集石遺構 015 から出土。

瓦 2～9 は巴文軒丸瓦である。瓦 2～6 は室町時代、瓦 7～9 は鎌倉時代と考えられる。瓦 2 は土取坑 381、瓦 3 は土取坑 187、瓦 4・5 は溝 402、瓦 6 は土器溜 415、瓦 7 は溝 185、瓦 8 は土坑 145、瓦 9 は溝状遺構 252 から出土。

瓦 10・11 は唐草文軒平瓦で、瓦の側面上端に水切りをつける。室町時代。瓦 10 は溝 402 から出土。瓦 11 は溝 188 から出土。瓦 12～19 は唐草文軒平瓦である。室町時代。瓦 12 は土坑 145、瓦 13 は土取坑 187、瓦 14・15 は溝 186、瓦 16 は溝 402、瓦 17～19 は溝 188 から出土。瓦 20 は唐草文軒平瓦で、凹凸がなく、直線的な形状である。室町時代。瓦 20 は溝 188 から出土。瓦 21～24 は剣頭文軒平瓦である。鎌倉時代。瓦 21 は土坑 145、瓦 22 は落込み状遺構 425、瓦 23 は溝 239 から出土。瓦 24 は集石遺構 250 から出土。

瓦 25・26 は丸瓦である。瓦 25 は室町時代、瓦 26 は鎌倉時代。瓦 25 は土取坑 381、瓦 26 は集石遺構 250 から出土。瓦 27 は平瓦である。凸面に縄目タタキを施す。鎌倉時代。落込み状遺構 240 から出土。瓦 28 は平瓦である。凹面はナゲ調整を施し、凸面はコビキ痕が残る。鎌倉時代。集石遺構 250 から出土。

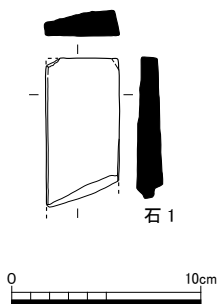


図 34 遺物実測図 5 (1/4)

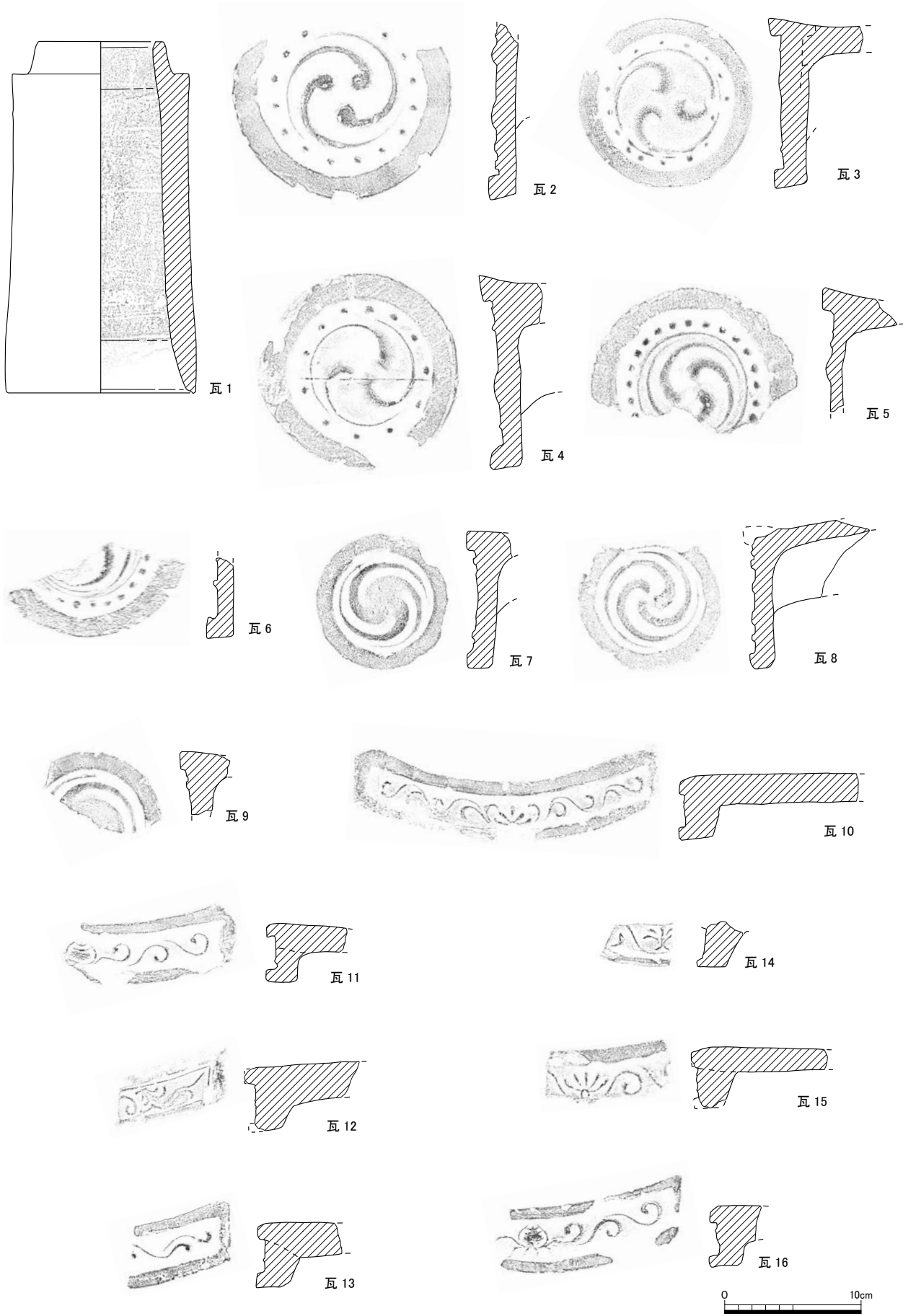


图 35 遗物实测图 6 (1/4)

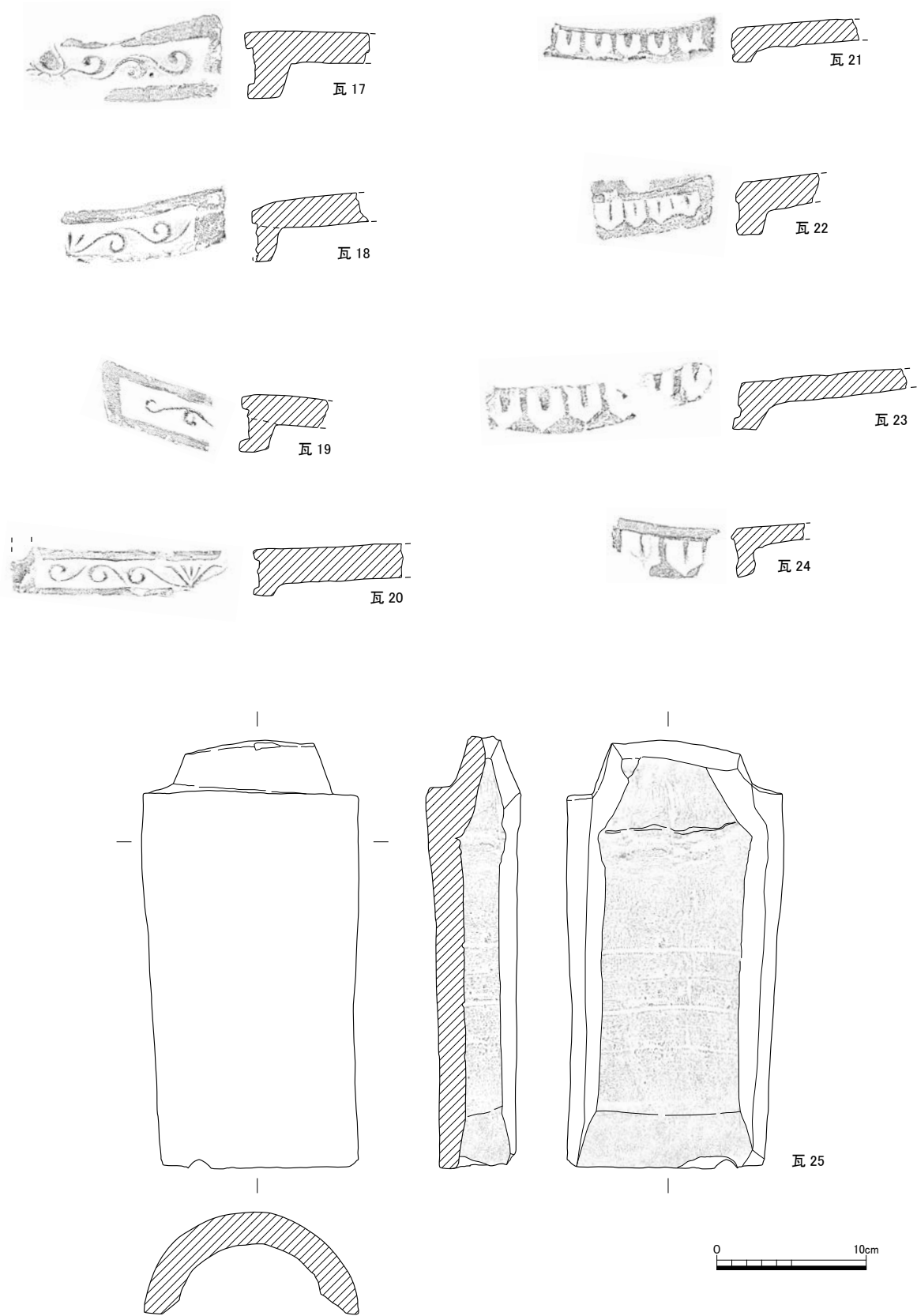
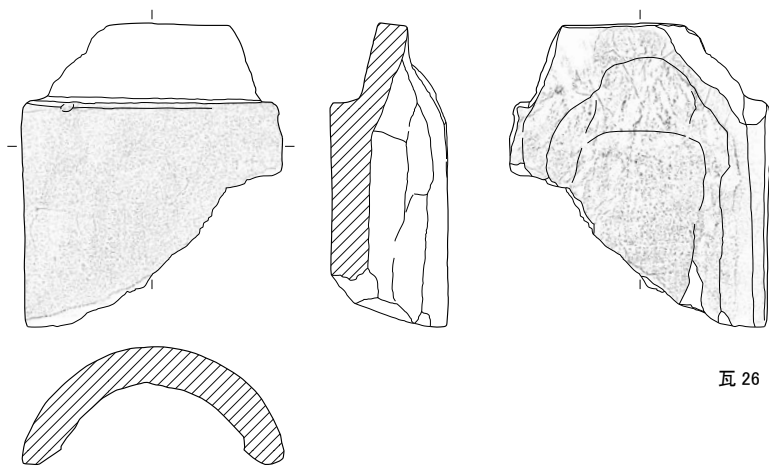
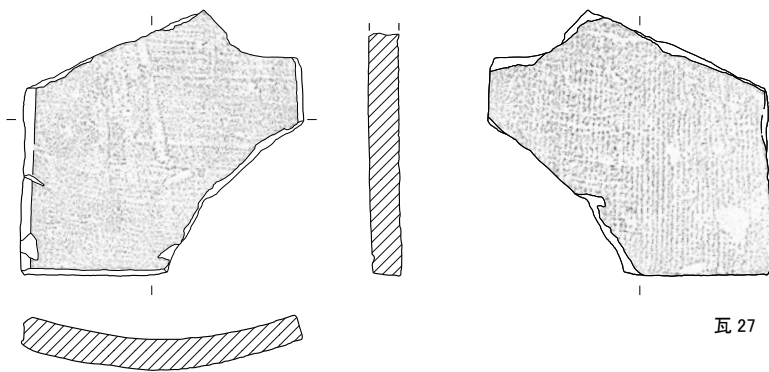


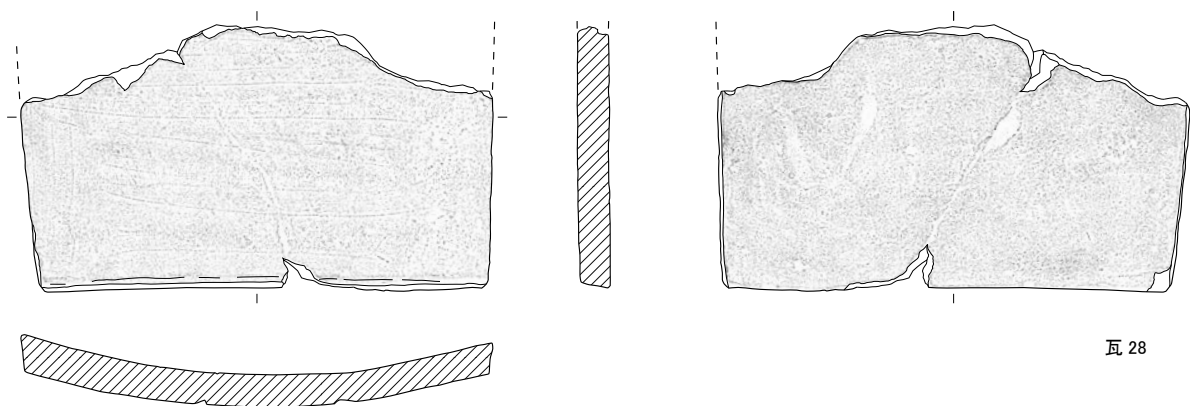
图 36 遺物実測図 7 (1/4)



瓦 26



瓦 27



瓦 28



图 37 遺物実測図 8 (1/4)

5. まとめ

2章でも触れたが、改めて今回の調査地である平安京左京三条三坊十町の邸宅の変遷を顧みると、以下の通りである。

1 三条坊門室町殿（陽明門院禎子内親王御所）

承暦四（1080）年、焼失。

2 押小路殿（三条坊門烏丸殿、押小路烏丸泉殿など / 後鳥羽上皇御所）

承元三（1209）年、渡御。承久の乱後、陰明門院藤原麗子邸。貞応元（1222）年、焼失。

3 押小路殿（後嵯峨天皇御所）

正嘉元（1257）年、造営。弘長二（1262）年、藤原成子の邸宅。

4 押小路烏丸殿（二条殿 / 二条家邸宅）

永仁六（1298）年以前の13世紀後半に二条富小路殿と相博か。文明九（1477）、焼失。

5 押小路烏丸殿（二条殿 / 二条家邸宅）

文明十八（1486）年、再建。天正四（1576）年、譲渡。

6 二条殿御池城（織田信長邸）

天正四（1576）年、修繕工事。天正五（1577）年、信長転居。天正七（1579）年、譲渡。

7 二条御所（下御所・二条御新造 / 誠仁親王）

天正七（1579）年、渡御。天正十（1582）年、本能寺の変にて焼失。

大まかに第1期から第7期までの変遷があるが、平安時代から鎌倉時代前期にかけての第1～3期は今回の調査地で遺構を確認することができなかった。

今回の調査では、鎌倉時代から江戸時代までの各時代の遺構を検出した。以下、時代ごとに概要を述べ、変遷を追いたい。

（1）調査地の遺構の変遷（図38）

鎌倉時代～南北朝時代の遺構として、調査区東側の、湾曲する溝状の落込み285・297、それに伴う集石遺構250、土坑280、溝281が挙げられる。これらは一連のものとみられ、庭園遺構に付随する導水施設である可能性も考えられる。

室町時代の遺構は今回の調査の中で特に集中している。調査区東側の落込み状遺構240は前述の285の上層にあることから、作り替えに伴う整地の可能性も考えられる。また、西側の落込み状遺構425は一部鎌倉時代の遺物も含むことから、埋没時期は240と同様に室町時代だが実際に使用されていた時期は285と同様に鎌倉時代からである可能性が考えられる。また、溝185・186・195・402・439・440の一連の溝については、四行八門のラインと軸はややずれるものの並行するため四行八門関連の可能性も加味して考えたが、当時二条家が一町分の敷地を有していたことを考えると敷地内での区画の可能性が高いと考えられる。その他溝状遺構220・252については調査区外（北側）へ続いており溝か土坑かは不明なため溝状遺構として報告する。

表 2 でも主要遺構をまとめたが、この時代の傾向として、室町時代前期、室町時代中期、室町時代後期で大きな差異がみられる。室町時代前期は落込み状遺構の作り替えと区割り溝がメインとなる。特に、調査区西側の 420・425 では、落ち際より西に円礫が集中することから、築山状の遺構も想定される。室町時代中期はわずかに埋土に遺物を含むものの、主要遺構とするほどの目立った遺構は見当たらなかった。室町時代後期は土器溜や土坑が多くみられる。

表 4 遺構変遷

時代	編年	遺構名		
鎌倉時代	京都6	古		
		中		
南北朝時代	京都7	古		
		中	落込み状遺構285・297 (集石遺構250、土坑280、溝281)	
室町時代	京都8	古		
		中	落込み状遺構240	溝220・252
	新			溝185・186・195・402 土器溜215、集石遺構420、 落込み状遺構425
	京都9	古		
安土桃山時代	京都10	古		
		中	土坑145	土器溜415
江戸時代	京都11	古		
		中	土取坑187	土器溜207
		新	集石遺構015 集石遺構080	集石遺構045 土器溜043
江戸時代	京都12	古		
		中	井戸027	
		新		

安土桃山時代の遺構は室町時代と同じく集中して確認された。安土桃山時代の遺構は前期と後期に分けられ、前期は集石遺構と土坑、土取坑が多くみられる。後期は土坑群が主体である。礎石建物1は土取坑が埋められた上から礎石を配していたためこの頃とみられる。なお、調査区東側のD1～3グリッドにかけて、粗砂とシルトの整地範囲を確認した。遺物がなく整地の一部としているが、花崗岩質の粗砂が広がる不成形な土坑112と、落込み状遺構240直上を整地する土坑106・115は礎石建物に関連するものと考えられる。

江戸時代の遺構としては井戸や土坑、集石遺構を多く検出した。また、A～D1グリッドの溝011を境界として南北で整地の様子が大きく違うことが確認できた。特に北側は灰黄色シルトの、三和土のようにしまりの強い層が基盤となっており、その境界と並行することから溝010は区割りの溝と想定した。南側は黒褐色で緩やかに南に下がる様子を確認した。遺構としては井戸027や漆喰で作られた室307等が集中していることから南北で使い分けがあった可能性も考えられる。

以上、本調査地内で検出した遺構の変遷は、文献資料にも記されているように当町が平安時代以降、脈々と生活の拠点として歴史の変遷をたどったことを反映していると思われる。

(2) 落込み状遺構について (図 39)

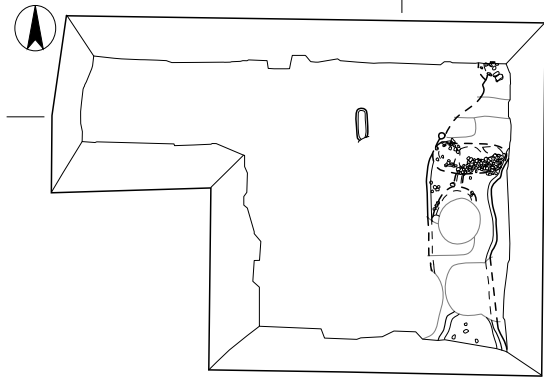
本調査では鎌倉時代～室町時代にかけての落込み状遺構とそれらが整地されていく様子を追うことができた。

調査区東側で検出した、鎌倉時代の瓦や遺物を多く含む落込み状遺構285では、落ち際の標高値が39.1～39.3mと南北でやや高低差があるものの、底面は38.8～39.0mである。なお、この落込み状遺構285に伴う集石遺構250や土坑280、溝281は底面が38.65～38.7mである。また、落込み状遺構285を青灰色粘土でパッキングするように整地する、室町時代前期の遺物を含む落込み状遺構240は落ち際が39.6～39.7m、底面は39.1～39.4mである。

調査区西側で検出した、室町時代前期の遺物が入る集石遺構420、落込み状遺構405・425は、

鎌倉時代

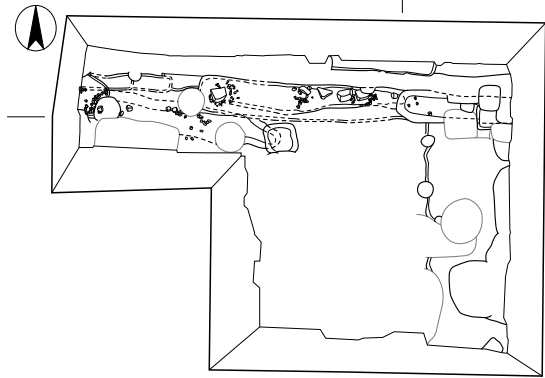
Y=-22.030



X=-109.600

室町時代前期

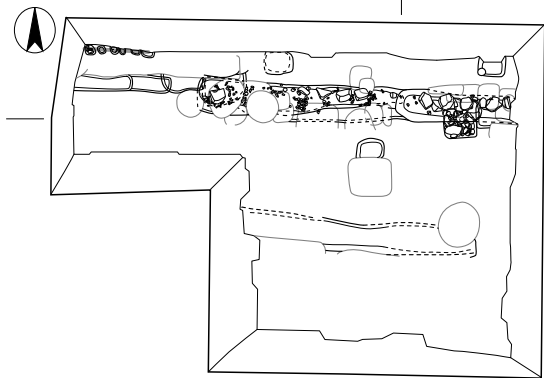
Y=-22.030



X=-109.600

室町時代後期

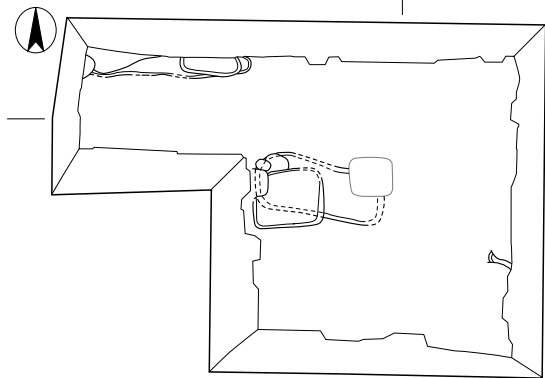
Y=-22.030



X=-109.600

安土桃山時代前期

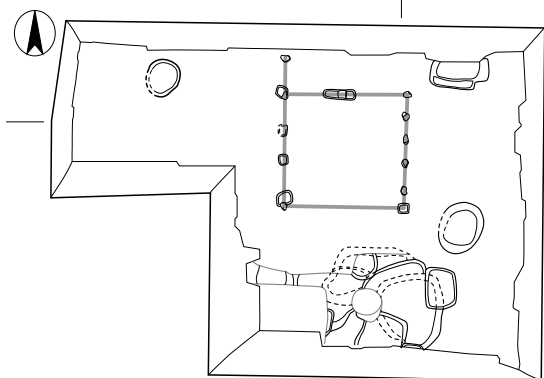
Y=-22.030



X=-109.600

安土桃山時代後期

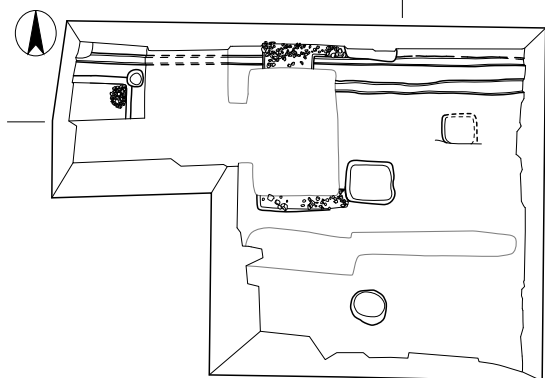
Y=-22.030



X=-109.600

江戸時代

Y=-22.030



X=-109.600



図 38 遺構変遷図 (1/300)

表5 落込み状遺構の比較

	遺構	年代	標高 (m)		特徴
			落ち際	底面	
本調査	落込み状遺構285	鎌倉時代	39.1 ~ 39.3	38.8 ~ 39.0	鎌倉時代の瓦や遺物を多く含む 伴う集石遺構250や280、溝281は底面が38.65 ~ 38.7m
	落込み状遺構240	室町時代前期	39.6 ~ 39.7	39.1 ~ 39.4	落込み状遺構285を青灰色粘土で整地
	集石遺構420 落込み状遺構405・425	室町時代前期	39.4	39.0	調査区西側で検出。落ち際より西に円礫が集中する。
2002年調査	庭園遺構	鎌倉時代	39.0	38.7	一部地山を削って段差を作る 平坦面を作って建物を建てている
		室町時代前期	39.0	38.7	小石を敷き詰めた緩やかに湾曲する州浜と庭石を持つ。
		室町時代中期	39.1	38.7	前期と基本構成は同じだが、白砂のみで州浜を作っている。平坦部には植木鉢とみられる土坑があり、東部の平坦面に建物を建てている。
		室町時代後期	39.4	38.7	基本的な構成は前・中期と同じだが、小石と白砂で州浜を作り、庭園の傾斜が変わる位置に庭石を据えている。また、中期に存在した建物と同じ位置に建物を再度建替えている。
2009年調査	落込み状遺構	13 ~ 14世紀初頭	39.1		北東から南西へ低くなる旧地形を踏襲しており、室町時代前期にこの落ち込みが埋められる。 この面の標高値は39.1m前後で2002年の調査と矛盾しない
	落込み状遺構 (東から西に浅く落込む)	—			洲浜状の施設などは伴わない。落込みの肩に沿うように区画溝と考えられる南北方向の溝と瓦敷きを確認。 苑池の一部の可能性
	調査地の北東から東側	—	39.2 ~ 39.3		周りよりやや高くなっており、築山状の景観を想定されている。

落ち際の標高値が 39.4 m、底面の高さは 39.0 m である。

周辺の調査では 2002 年の調査で苑池の痕跡が確認されている。また、2009 年の調査でも関連するとみられる落込み状遺構が確認されている。(表 5)

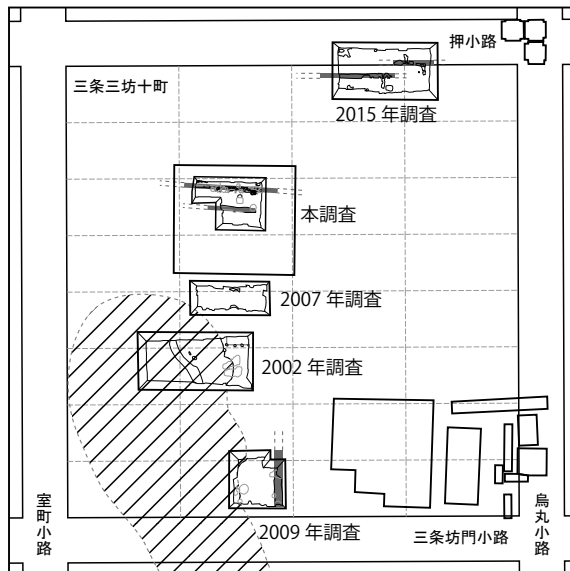
改めて本調査地の遺構と比較すると、落ち際の標高が 39.4 ~ 39.6 m、底面の高さが 39.0 m と全体に本調査地の方が 0.4 ~ 0.6 m ほど高いことが分かる。しかし、当町内の北端にあたる調査(2015 年)において地山面の標高が 39.8 m であったことや、旧地形が北東から南西へかけて低くなることなどを踏まえると地形を生かした庭園遺構とすると、矛盾はないと考えられる。

また、落込み状遺構 285 中の集石遺構 250 で、集石の中央に大量の瓦が埋まっているのを確認した。集石にわざと入れて趣を楽しむものか、あるいは屋根から崩れ落ちたものかについては想像の域を出ないが、二条良基が殿舎や庭園、庭間施設から 10 の名勝を選定した「二条殿十境」には、池水に臨む 2 階建ての建物をあらわす「閣」が含まれており、池の畔に建物を建てる様子は過去の調査にも表れているため考慮に入れておきたい。

なお、義堂周信の日記『空華日用工夫略集』によれば、二条良基に請われて康暦 2 (1380) 年 8 月 8 日に押小路烏丸殿に初めて参上した際、

「二条殿の倭漢聯句会に赴く、西門より入る、泉園池亭水石を巡視す、その美、勝げて言ふべからず、その池を名づけて龍躍と曰ふは、実を記すなり、このごろ昼に当り龍の雨下に躍るの変あり、御搦閣と曰ふは、天子の坐したまふ所の搦在り、曰く、洗暑亭、曰く聴松亭、曰く蔵春閣、曰く緑揚橋、曰く政平水、曰く観魚台、曰く古靈泉、曰く水明楼、曰く梅香軒。既にして准后出で、余を水亭に来接す、互に久渴の懐を叙べ、引きて御搦閣に入る、倭漢聯句百韻、時に会する者、安

1. 室町時代後期（15世紀中～16世紀中）



国の相山・洞春の玉岡・大龍の器之・准后摂政の令子梵樟侍者なり。」

としていることから、客人用の入口が西門にあり、そちら側に苑池が広がることを示唆する。この記述は上杉家本『洛中洛外図屏風』に描かれた「二条殿」の、東側に建物、西側に池がある配置や池・庭石・植栽によって庭園が構成される様子や、過去の調査結果、今回の落込み状遺構の配置とも矛盾しない。

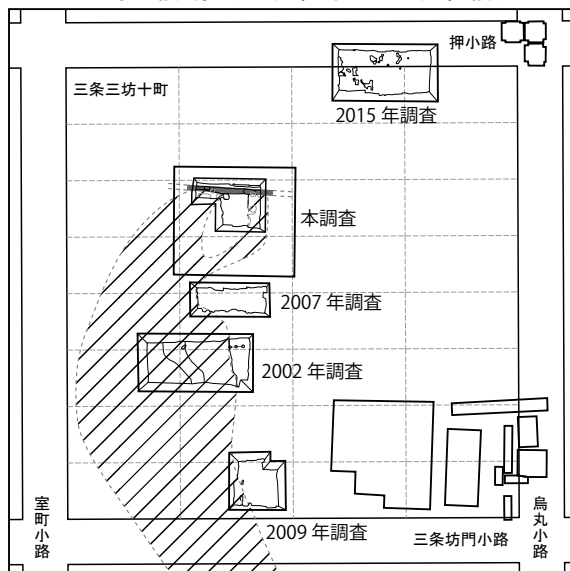
(3) 溝 185・186・195・402、溝 439・440 と土橋について (図 40)

落込み状遺構 240 や落込み状遺構 425、集石遺構 420 の北側に接して、溝 185・186・195・402、溝 439・440 があり、これらの溝を繋ぐように土橋 465 を検出した。検出当初は、長楕円形の土坑が連続するような、やや不成形な形状に見えていたため個別に遺構番号を付けていたが、これらは軸方向や埋土の様子が類似するため同一の遺構であると考えられる。以下、これらの溝を総称して溝 185 として述べる。

この溝 185 は埋土に3段階の時期を確認できる (図 41)。残りの良い東壁面で確認すると、1段階目 (下層 /6～8層) は黒褐色粘土と砂泥である。2段階目 (中層 /4・5層) はしまりの強い粘土で遺物を含まない。3段階目 (上層 /1～3層) は焼土と粘土が混在し、瓦と小礫を大量に含む。埋土の状況から見て、溝を壊す深さ 0.25 m ほどの土坑 178 も溝の一部の可能性が考えられる。

この溝は周囲の遺構や、出土した遺物により、凡その埋没時期を追うことができる。はじめに、室町時代前期～中期に埋まり (1～2段階)、後に周囲を整地する (2段階で整地土混じる)。2段階以降に集石遺構である土坑 243 を掘りこむ。しかし、この溝部分が、たわみとして残っていたためか、あるいは再度掘削されて使用さ

2. 室町時代前期（14世紀中～15世紀前）



3. 鎌倉時代後期（13世紀中～14世紀中）

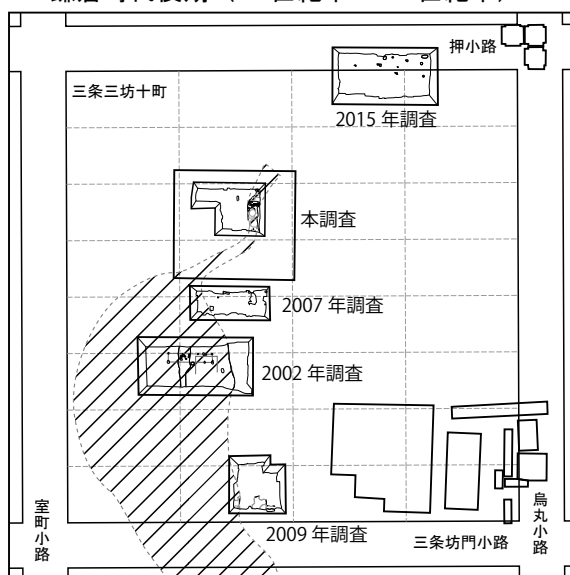


図 39 二条殿龍躍池推定範囲 (1/2000) ※注 1

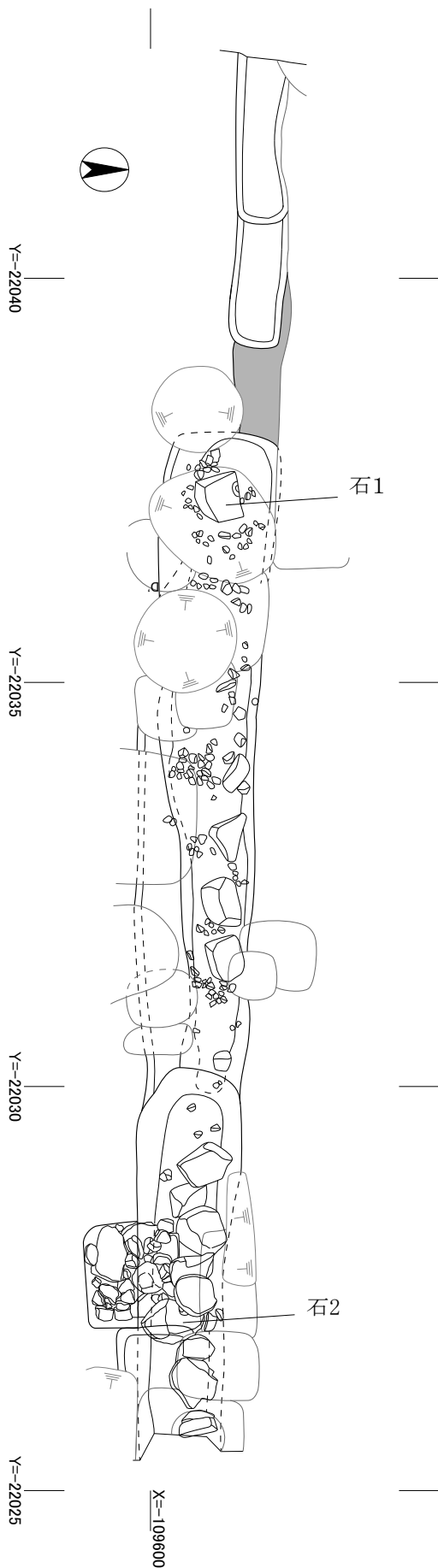


図40 溝185 関連遺構図 (1/80)

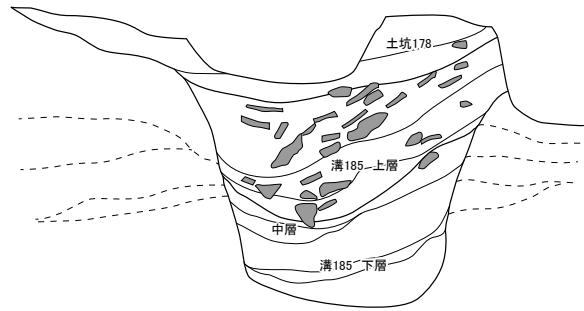


図41 溝185 断面模式図

れていたのかは不明だが、同一の場所に土坑状に掘りこんで焼土や瓦、庭石や礎石といったものを廃棄している（3段階）。おそらく、検出した際に割り振った土坑状の単位が第1段階で掘りこんだ単位のものであろう。

なお、この溝の第3段階の焼土中の石の大きさは0.4 m前後が4点、0.5 m前後の石が5点、0.6 m前後の石が3点、0.7 m前後の石が3点、0.8 mを超える石が2点確認され、それ以外は0.2 m前後のぐり石である。興味深いことに、土橋465を境にして東側でのみ、焼土や石の廃棄がみられる。この石はほとんどが庭石（景石や飛び石等）とみられるが、0.4 m大の石の一部に、中央を避けて被熱した痕跡のある石も確認されていることから礎石の可能性も考えられる。0.8 mを超える石は2点とも周囲を割り欠かれている（石1・2、図42）。石2は上面・底面ともに平らに加工されており、上面中央に0.13 mの円形の穿孔を施している。礎石とみられる。石1は中央の穿孔部分が底面まで貫通している。礎石ではなく庭石と考えられる。

これらのことから、本来落込み状遺構に配されていた庭石や礎石が、二条殿の焼失後、再整備と造営に伴って廃棄されたものと考えられる。

石1(庭石)

石2(礎石)

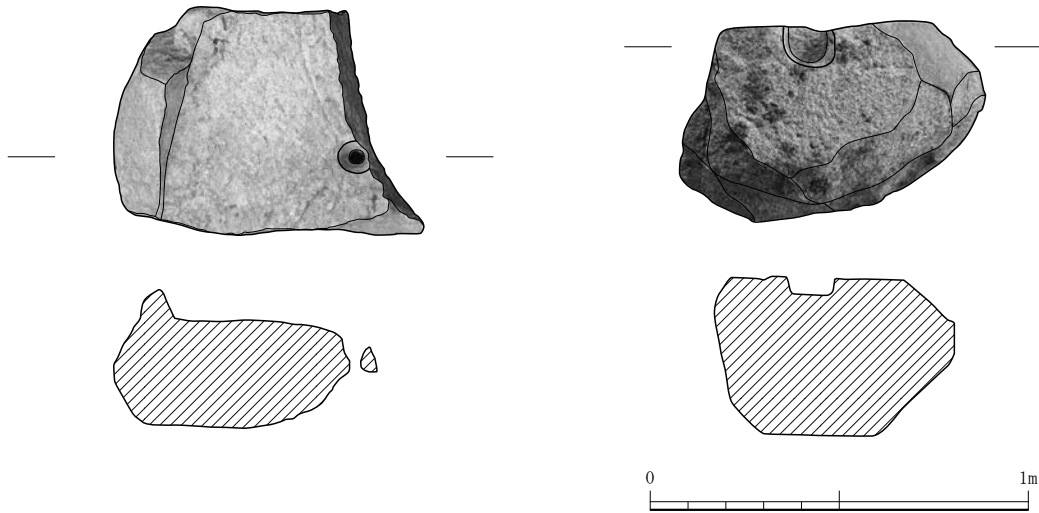


図 42 溝 185 出土石製品 (1/20)

【参考文献】

上村憲章 『平安京左京三条三坊十町・二条殿御池城跡』 古代文化調査会 2015 年

小川剛生 「二条家の泉一室町時代の住居と文化」『三田評論 【特集：日本の住環境、再考】』 2021 年

小川剛生 『二条良基』 人物叢書 吉川弘文館、2020 年

柏田有香 『平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-20 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010 年

山本雅和 『平安京左京三条三坊十町（押小路殿・二条殿）跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2002-07 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002 年

※注 1 図 39 の龍躍池推定範囲については、妙覚寺城域推定変遷図（家崎孝治『妙覚寺城跡—平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡—』 古代文化調査会 2013 年）を参考に、周辺調査における各時代の遺構変遷をあわせて作成した。

表6 二条殿の変遷

時代	和暦	西暦	出来事	関連文献
平安時代中期～後期	承暦4	1080	三条坊門室町殿（陽明門院禎子内親王 御所） 焼失	『百鍊抄』
平安時代後期	天治2	1127	大火により、町内の民家が焼失	『中右記』
			大火以後、中納言藤原家成が町内の一部を購入、邸宅を営む	『仁和寺所蔵古図』
鎌倉時代	承元3	1209	後鳥羽上皇御所「押小路殿」完成 (三条坊門烏丸殿、押小路烏丸/三条坊門泉殿、三条坊門殿)	『玉葉』
	貞応元	1222	焼失	
	正嘉元	1257	後嵯峨天皇が御所を造営	
	弘長2	1262	後嵯峨天皇の後、藤原（西園寺）成子の邸宅	
	永仁6	1298	これ以前の13世紀後半、二条富小路殿と押小路烏丸殿の相博（交換）以後、二条家代々の邸宅となる（二条殿）	
	元応2	1320	二条良基誕生。	
南北朝時代	建武3	1336	8.15 持明院統の光厳上皇及び弟の豊仁親王（後の光明天皇）が押小路烏丸殿に入る。親王の元服が行われ、そのまま上皇の猶子として寝殿において踐祚の儀が執り行われた。 (北朝の成立)	
室町時代	貞和3	1347	春、泉殿蔵春閣にて親王らと連歌	
	貞和4	1348	10.27 光明天皇譲位、崇光天皇踐祚、光厳上皇院政。讓国節会、押小路烏丸殿を新帝の里内裏とする。	
	文和2	1353	6.6 後光厳天皇、押小路烏丸殿次いで延暦寺へ非常行幸、乗輿して供奉する。	
	応安元	1368	6.13 雷雨の押小路烏丸殿の池から白龍が昇天するのを目撃したという話があり、これを聞いた中巖円月がこの池を「龍躍池」と命名。島が点々と浮かぶ池や高さ五尺ほどの滝があったことが知られる。	『おもひまの日記』
	応安4	1371	7.25 後光厳上皇、押小路烏丸殿に御幸	
	康暦元	1379	2.20 香聞あり。 4.28 義満と参内、泉殿で酒宴、「右大将義満参内饗宴仮名記」を記す	
	正長元	1428	足利義教が訪問	
戦国時代	文明9	1477	11.11 西軍の放火により焼失 同年、持通が「二条押小路家門亭泉記」を足利義政の見参に入れる。	
	文明12	1480	庭園の勝趣は失われていなかったが、旧跡の烏丸小路面に「小家一字」を建てて移住	『宣胤卿記』
	文明18	1486	建物は再建。 これ以降二条家は当主の急死が相次ぎ、政治的にも経済的にも没落の一途を辿る。	
	永禄11	1568	織田信長が足利義昭と上洛	
戦国時代/安土桃山時代	天正4	1576	二条家が立退き、織田信長へ譲渡・増改築（村井貞勝に修繕工事を命じた。二条殿御池城）	
	天正5	1577	二条殿御池城に信長が移る	
	天正7	1579	誠仁親王に御所として提供。以後「二条御所」・「下の御所」などと呼ばれていた。二条御新造。	
	天正10	1582	本能寺の変で焼失。親王を逃がしたのち信忠が自害。	
	天正15	1587	正親町天皇の勅命で、信忠の菩提を弔うために大雲院建立。同年中に寺町へ移転。	
	天正18	1590	この頃、両替町通が開かれる	
	慶長5	1600	京都に金座を設ける	
江戸時代	慶長13	1608	伏見の銀座を京都に移す	
	寛永14	1637	『洛中絵図』に「両かゑ丁」の記載	
	元禄期	1700頃	金座商人が全盛	

表7 出土遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調(胎土)	外面調整	内面調整	備考	時代
1	井戸027	肥前磁器	碗	—	(3.8)	3.9	胎土：浅黄橙色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ	肥前産 流水文	江戸時代
2	井戸027	肥前磁器	碗	—	(3.9)	4.2	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ	肥前産 草花文	江戸時代
3	井戸027	焼締陶器	播鉢	—	(9.5)	16.2	胎土：灰白色 釉：赤紫色	ロクロナデ	ロクロナデ	信楽産	江戸時代
4	集石遺構015	土師器	皿S	13.7	(2.3)	—	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
5	集石遺構015	土師器	皿S	13.7	(2.3)	—	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
6	集石遺構045	土師器	皿S	16.1	(2.4)	—	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
7	集石遺構045	土製品	塩壺身	5.0	8.0	4.6	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
8	集石遺構045	焼締陶器	播鉢	15.2	(11.0)	—	胎土：褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	丹波産	桃山時代
9	集石遺構045	焼締陶器	播鉢	37.1	(8.8)	—	胎土：褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	丹波産	桃山時代
10	土器溜043	土師器	皿Nr	6.0	1.2	2.0	胎土：にぶい橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
11	土器溜043	土師器	皿Nr	6.3	1.4	2.0	胎土：にぶい橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
12	土器溜043	土師器	皿Nr	6.9	1.4	3.0	胎土：浅黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
13	土器溜043	土師器	皿Sb	9.9	2.1	丸底	胎土：にぶい橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
14	土器溜043	土師器	皿S	10.1	2.0	3.2	胎土：明黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
15	土器溜043	施釉陶器	筒茶碗	9.2	7.4	5.9	胎土：灰白色 釉：緑青灰色	ロクロナデ	ロクロナデ		桃山時代
16	土器溜043	施釉陶器	蓋	7.1	2.5	—	胎土：淡黄色 釉：褐色	ロクロナデ	ロクロナデ		桃山時代
17	土器溜043	施釉陶器	壺	—	(13.0)	10.7	胎土：褐色 釉：暗オリーブ色	ナデ	ナデ		桃山時代
18	土器溜043	土製品	塩壺身	5.2	8.8	4.0	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
19	土器溜043	瓦質土器	火鉢	11.8	5.0	10.2	胎土：黒灰色	ナデ、ミガキ	ヨコナデ		桃山時代
20	土器溜043	焼締陶器	播鉢	38.0	14.6	16.2	胎土：褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	丹波産	桃山時代
21	集石遺構080	施釉陶器	天目碗	—	(1.1)	4.4	胎土：灰白色 釉：黒褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	瀬戸産	桃山時代
22	集石遺構080	瓦質土器	方形火鉢	—	(6.1)	—	胎土：灰白色	ナデ	ナデ		桃山時代
23	集石遺構080	焼締陶器	鉢	18.2	8.1	10.7	胎土：橙色	ロクロナデ	ロクロナデ		桃山時代
24	土取坑124、141	土師器	皿S	12.5	2.4	7.4	胎土：にぶい橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
25	土取坑124、141	土師器	皿S	13.1	2.2	7.6	胎土：にぶい黄褐色	摩滅	ヨコナデ、ナデ	燈明皿	桃山時代
26	土取坑124	青磁	皿	—	(1.0)	5.6	胎土：灰白色 釉：灰白色	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	見込みに櫛描文様	鎌倉時代
27	土取坑124	緑釉陶器	碗	—	(2.2)	6.5	胎土：浅黄褐色 釉：緑色	ロクロナデ	ロクロナデ		平安時代
28	土取坑130	灰釉陶器	碗	—	(1.8)	6.5	胎土：灰白色 釉：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ		平安時代
29	土取坑141	磁器(染付)	碗	6.5	4.0	2.6	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ	中国産 外面に幾何学文、見込みに花文	室町時代
30	土取坑129、141	磁器(染付)	碗	—	(2.5)	4.1	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ	中国産 見込みに鳥	室町時代
31	土取坑124	施釉陶器	碗	—	(4.4)	3.9	胎土：灰白色 釉：褐色	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	瀬戸産	桃山時代
32	土取坑124、141	施釉陶器	折縁皿	11.0	(1.9)	—	胎土：オリーブ黄色 釉：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	瀬戸産	桃山時代
33	土取坑131(127)	施釉陶器	注口鉢	11.8	7.1	5.0	胎土：黄褐色 釉：オリーブ黄色	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	瀬戸産	桃山時代
34	土取坑129、141	施釉陶器	沓茶碗	14.5	(6.7)	—	胎土：灰白色 釉：にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	瀬戸産 外面に直線文	桃山時代
35	土取坑125	土師器	焙烙	31.3	(6.5)	—	胎土：灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
36	土取坑124	焼締陶器	播鉢	—	(13.7)	14.7	胎土：灰黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ		桃山時代
37	土取坑381	土師器	皿Nr	5.5	1.4	2.3	胎土：黄褐色	オサエ	ナデ		桃山時代
38	土取坑381	土師器	皿S	9.7	2.5	3.6	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	燈明皿	桃山時代
39	土取坑381	土師器	皿S	11.0	2.1	—	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	燈明皿	桃山時代
40	土取坑381	土師器	皿S	11.3	2.2	6.0	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
41	土取坑381	土師器	皿S	11.4	2.0	6.5	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
42	土取坑381	施釉陶器	折縁皿	11.8	2.8	6.0	胎土：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	瀬戸産	桃山時代

遺物番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調(胎土)	外面調整	内面調整	備考	時代
43	土取坑381	施釉陶器(志野)	蓋	6.0	2.1	—	胎土：灰白色 釉：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部糸切り痕	桃山時代
44	土取坑381	施釉陶器(志野)	皿	11.5	2.3	6.4	胎土：灰白色 釉：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	二次的に被熱	桃山時代
45	土取坑381	施釉陶器(志野)	皿	11.7	2.3	6.4	胎土：灰白色 釉：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	二次的に被熱	桃山時代
46	土取坑381	施釉陶器(志野)	皿	11.8	2.6	6.3	胎土：灰白色 釉：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ		桃山時代
47	土取坑381	焼締陶器	壺	—	(31.7)	15.1	胎土：褐色	ナデ	ナデ	丹波産	桃山時代
48	溝185	土師器	皿N	8.0	1.5	4.7	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
49	溝185	土師器	皿N	9.6	1.8	4.8	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
50	溝185	土師器	皿Sh	7.1	1.7	2.2	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
51	溝185	土師器	皿S	11.5	3.1	丸底	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
52	土坑145	土師器	皿Sh	6.7	1.7	3.2	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
53	土坑145	土師器	皿Sb	8.8	1.9	丸底	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
54	土坑145	土師器	皿Sb	8.8	1.6	4.5	胎土：黄橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
55	土坑145	土師器	皿Sb	8.8	2.2	3.0	胎土：浅黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
56	土坑145	土師器	皿Sb	8.9	1.9	丸底	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
57	土坑145	土師器	皿Sb	8.9	2.0	4.0	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
58	土坑145	土師器	皿Sb	8.9	1.9	丸底	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
59	土坑145	土師器	皿S	9.0	1.8	3.8	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
60	土坑145	土師器	皿S	9.1	1.9	丸底	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
61	土坑145	土師器	皿S	10.0	2.1	4.0	胎土：明黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
62	土坑145	土師器	皿S	10.3	1.7	4.8	胎土：浅黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
63	土坑145	白磁	皿	14.9	3.7	7.3	胎土：灰白色 釉：白色	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	ロクロナデ		室町時代
64	土坑145	施釉陶器	盤	—	(6.5)	13.4	胎土：明黄褐色 釉：浅黄色	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	瀬戸産	室町時代
65	土坑145	瓦器	椀	12.0	(3.7)	—	胎土：灰色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ミガキ		室町時代
66	土坑145	瓦質土器	ミニチュア羽釜	7.1	(3.7)	—	胎土：灰色	ナデ	ナデ		室町時代
67	土坑145	瓦質土器	火舎	42.3	(3.7)	—	胎土：灰色	ナデ	ナデ、ミガキ		室町時代
68	土取坑187	土師器	皿S	10.4	2.2	3.7	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
69	土取坑187	土師器	皿S	10.6	2.2	3.6	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
70	土取坑187	土師器	皿S	10.6	1.9	3.6	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
71	土取坑187	施釉陶器	碗	10.9	5.8	4.1	胎土：橙色 釉：灰白色	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	唐津産	桃山時代
72	土取坑187	施釉陶器	皿	11.0	2.3	4.1	胎土：黄褐色 釉：灰白色	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	瀬戸産 見込に目跡3か所	桃山時代
73	土取坑187	須恵器	鉢	22.0	(6.5)	—	胎土：灰色	ロクロナデ	ロクロナデ		鎌倉時代
74	土器溜207	土師器	皿Sb	7.6	1.6	3.5	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
75	土器溜207	土師器	皿Sb	9.2	2.1	丸底	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	燈明皿	桃山時代
76	土器溜207	土師器	皿S	12.2	2.3	丸底	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	燈明皿	桃山時代
77	土器溜207	土師器	皿S	12.3	2.4	4.8	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
78	土器溜207	土師器	皿S	12.7	2.0	4.8	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	燈明皿	桃山時代
79	土器溜207	焼締陶器	壺	—	(5.2)	4.5	胎土：褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	丹波産	桃山時代
80	土器溜413	土師器	皿Nr	5.5	1.1	—	胎土：にぶい黄褐色	オサエ	ナデ		桃山時代
81	土器溜413	土師器	皿S	8.3	2.0	3.2	胎土：にぶい黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		桃山時代
82	土器溜413	磁器(染付)	碗	—	4.2	(3.4)	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ	中国産 内外面に草花文	桃山時代
83	土器溜413	施釉陶器	輪花鉢	15.3	5.6	7.8	胎土：灰白色 釉：淡黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	瀬戸産 口縁部と内面に草文を練刻	桃山時代
84	土器溜413	土師器	焙烙	31.6	10.4	丸底	胎土：黄褐色	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ		桃山時代
85	土器溜413	焼締陶器	水差	8.7	(11.4)	—	胎土：明黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	丹波産 体部上方に円孔1か所	桃山時代

遺物番号	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調 (胎土)	外面調整	内面調整	備考	時代
86	土器溜413	焼締陶器	盤	36.3	6.0	33.0	胎土：褐色	ナデ	ヨコナデ	丹波産	桃山時代
87	落込み状遺構240	土師器	皿N	9.4	2.2	6.0	胎土：にぶい橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
88	落込み状遺構240	土師器	皿S	9.1	1.9	1.4	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
89	落込み状遺構240	瓦質土器	羽釜	16.2	10.6	16.0	胎土：灰色	ヨコナデ、オサエ、ナデ	ヨコハケ、ハケのちナデ		室町時代
90	落込み状遺構425	土師器	皿N	11.8	2.3	7.2	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
91	落込み状遺構425	土師器	皿Sh	6.7	1.6	2.7	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
92	落込み状遺構425	土師器	皿Sh	7.0	1.6	3.0	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
93	落込み状遺構425	土師器	皿S	7.2	1.4	3.2	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
94	落込み状遺構425	土師器	皿S	11.1	2.9	丸底	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
95	落込み状遺構425	土師器	皿S	11.1	3.0	丸底	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
96	落込み状遺構425	土師器	皿S	11.6	3.0	丸底	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
97	落込み状遺構425	土師器	皿S	11.6	2.8	丸底	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
98	落込み状遺構425	土師器	皿S	11.7	2.9	丸底	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
99	落込み状遺構425	土師器	皿S	11.7	3.1	丸底	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
100	落込み状遺構425	土師器	皿S	11.8	2.8	4.8	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
101	落込み状遺構425	白色土器	高坏	—	(10.5)	—	胎土：灰白色	摩滅	摩滅		室町時代
102	落込み状遺構425	瓦質土器	鍋	16.3	(8.6)	—	胎土：黒褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコハケ		室町時代
103	落込み状遺構425	瓦質土器	ミニチュア羽釜	4.1	(5.3)	3.4	胎土：黒灰色	ヨコナデ、ナデ、オサエ	ナデ		室町時代
104	落込み状遺構425	瓦器	椀	12.7	4.0	3.4	胎土：黒灰色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ミガキ	見込に暗文	室町時代
105	落込み状遺構425	石製品	石鍋	—	(3.6)	9.7	黒色	ケズリ	ケズリ	滑石製	室町時代
106	土器溜215	土師器	皿N	7.3	1.6	4.0	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
107	土器溜215	土師器	皿N	7.7	1.7	3.3	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
108	土器溜215	土師器	皿N	7.9	1.7	4.5	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
109	土器溜215	土師器	皿N	8.0	2.0	4.4	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
110	土器溜215	土師器	皿N	8.0	1.4	4.2	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
111	土器溜215	土師器	皿N	8.0	1.6	4.0	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
112	土器溜215	土師器	皿N	8.0	1.7	4.5	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
113	土器溜215	土師器	皿N	8.1	1.7	4.2	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
114	土器溜215	土師器	皿N	8.2	1.6	4.0	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
115	土器溜215	土師器	皿N	10.3	2.0	6.6	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
116	土器溜215	土師器	皿N	10.4	2.2	5.3	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
117	土器溜215	土師器	皿N	10.5	2.1	5.5	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
118	土器溜215	土師器	皿N	10.7	1.8	6.4	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
119	土器溜215	土師器	皿Sh	6.6	1.7	2.8	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
120	土器溜215	土師器	皿Sh	6.7	1.6	2.7	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
121	土器溜215	土師器	皿Sh	6.7	1.8	2.6	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
122	土器溜215	土師器	皿Sh	6.8	1.6	2.8	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
123	土器溜215	土師器	皿S	6.8	2.1	2.6	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
124	土器溜215	土師器	皿S	7.9	2.2	3.0	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
125	土器溜215	土師器	皿S	8.2	2.2	3.0	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
126	土器溜215	土師器	皿S	11.5	2.9	4.4	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
127	土器溜215	土師器	皿S	11.6	3.2	丸底	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
128	土器溜215	土師器	皿S	11.6	2.6	5.6	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代

遺物番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調(胎土)	外面調整	内面調整	備考	時代
129	土器溜215	土師器	皿	8.5	2.7	4.2	胎土：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	京外産か	室町時代
130	土器溜215	瓦器	碗	12.0	4.1	—	胎土：灰白色	ヨコナデ、ナデ	ミガキ	見込にジグザグ状暗文	室町時代
131	土器溜215	白磁	高坏	—	(1.8)	3.9	胎土：白色	ナデ	ナデ		室町時代
132	土器溜215	白色土器	高坏	9.1	(3.6)	—	胎土：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ		室町時代
133	土器溜215	白色土器	高坏	—	(7.9)	7.4	胎土：灰白色	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		室町時代
134	土器溜415	土師器	皿Nr	5.4	0.7	2.0	胎土：灰黄褐色	オサエ	ナデ		室町時代
135	土器溜415	土師器	皿Sh	6.9	1.6	2.6	胎土：灰黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
136	土器溜415	土師器	皿S	7.8	2.2	2.4	胎土：黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
137	土器溜415	土師器	皿S	7.9	2.1	3.0	胎土：灰白	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
138	土器溜415	土師器	皿S	8.1	2.2	2.5	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
139	土器溜415	土師器	皿S	8.2	2.0	2.8	胎土：灰黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
140	土器溜415	土師器	皿S	8.2	2.1	3.4	胎土：にぶい黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
141	土器溜415	土師器	皿S	8.2	1.9	3.5	胎土：にぶい黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
142	土器溜415	土師器	皿S	8.3	1.9	3.7	胎土：にぶい黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
143	土器溜415	土師器	皿S	9.0	1.7	2.8	胎土：明黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
144	土器溜415	土師器	皿S	9.5	2.2	2.8	胎土：明黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	燈明皿	室町時代
145	土器溜415	土師器	皿S	13.4	2.5	7.0	胎土：明黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
146	土器溜415	土師器	皿S	13.4	2.0	6.5	胎土：にぶい黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
147	土器溜415	土師器	皿S	14.5	2.8	4.2	胎土：にぶい黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
148	土器溜415	土師器	皿S	14.8	3.0	5.0	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
149	溝状遺構220	土師器	皿N	7.7	1.6	3.7	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
150	溝状遺構220	土師器	皿N	7.8	1.8	3.8	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
151	溝状遺構220	土師器	皿S	7.7	2.4	3.0	胎土：淡黄色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
152	溝状遺構220	土師器	皿S	11.6	(2.4)	—	胎土：淡黄色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
153	溝状遺構220	瓦質土器	鍋	24.2	(7.4)	—	胎土：黒褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
154	溝状遺構252	土師器	皿N	8.1	1.5	3.8	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
155	溝状遺構252	土師器	皿N	8.1	1.7	3.4	胎土：橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
156	溝状遺構252	土師器	皿Sh	6.9	1.6	3.0	胎土：浅黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
157	溝状遺構252	土師器	皿S	11.0	2.9	丸底	胎土：淡黄色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
158	溝状遺構252	土師器	皿S	12.0	3.5	7.4	胎土：灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		室町時代
159	集石遺構250	土師器	皿Ac	4.9	1.2	3.0	胎土：浅黄褐色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		鎌倉時代
160	集石遺構250	白磁	碗	—	(2.1)	5.7	胎土：灰白色 釉：白色	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	ロクロナデ		鎌倉時代
161	集石遺構250	瓦質土器	鍋	27.4	(3.4)	—	胎土：灰色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		鎌倉時代

表8 出土石製品観察表

遺物番号	遺構名	遺物種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	色調	材質	備考
石1	土取坑124・141	石製品	砥石	7.8	4.2	1.4	浅黄橙色	頁岩	鳴滝産

表9 出土瓦観察表

遺物番号	遺構名	遺物種類	器種	瓦当幅(cm)	瓦当高(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	色調	凸面調整	凹面調整	備考	時代
瓦1	集石遺構015	瓦	土管	—	—	25.7	13.9	1.9	橙色	ヨコナデ、ナデ	ヘラナデ、布目痕		江戸時代
瓦2	土取坑381	瓦	軒丸瓦	16.0	(13.0)	—	—	瓦当厚2.0	褐色	ナデ	—	右巻き巴文	室町時代
瓦3	土取坑187	瓦	軒丸瓦	13.0	12.5	(6.7)	13.0	2.0	灰白色	—	タテナデ	右巻き巴文	室町時代
瓦4	溝402	瓦	軒丸瓦	14.5	14.3	(4.6)	14.5	3.0	灰白色	ナデ	ナデ	右巻き巴文 汜傷	室町時代
瓦5	溝402	瓦	軒丸瓦	14.9	(9.2)	(5.6)	14.0	2.2	浅黄橙色	ナデ	ナデ、コビキ痕	左巻巴文	室町時代
瓦6	土器溜415	瓦	軒丸瓦	(12.0)	(5.9)	—	—	瓦当厚2.0	オリーブ黄色	—	ナデ	巴文	室町時代
瓦7	溝185	瓦	軒丸瓦	10.0	10.1	(3.3)	9.8	瓦当厚1.9	橙色	—	—	左巻巴文	鎌倉時代
瓦8	土坑145	瓦	軒丸瓦	10.6	10.5	(8.8)	10.2	1.3	褐色	ナデ	ナデ	右巻き巴文	鎌倉時代
瓦9	溝状遺構252	瓦	軒丸瓦	(9.0)	(4.6)	(3.7)	(9.0)	1.5	黄橙色	ナデ	ナデ	巴文	鎌倉時代
瓦10	溝402	瓦	軒平瓦	22.0	4.3	(13.2)	22.0	2.0	灰黄橙色	タテナデ	タテナデ	唐草文 水切り左	室町時代
瓦11	溝188	瓦	軒平瓦	(12.5)	4.3	(6.0)	(12.5)	1.8	灰白色	タテナデ	タテナデ	唐草文 水切り右	室町時代
瓦12	土坑145	瓦	軒平瓦	(10.5)	4.7	(8.4)	(10.0)	2.6	黄褐色	摩滅	摩滅	唐草文	室町時代
瓦13	土取坑187	瓦	軒平瓦	(8.3)	4.8	(6.3)	(9.2)	2.5	褐色	ヨコナデ、タテナデ	ヨコナデ	唐草文	室町時代
瓦14	溝186	瓦	軒平瓦	(5.0)	推定3.5	(3.4)	(5.0)	瓦当厚2.1	灰白色	—	—	唐草文	室町時代
瓦15	溝186	瓦	軒平瓦	(9.3)	4.2	(10.0)	(9.3)	1.5		ヨコナデ	ナデ	唐草文	室町時代
瓦16	溝402	瓦	軒平瓦	推定22.0	4.6	(3.9)	(11.0)	2.6	灰白色	ヨコナデ	ナデ	唐草文	室町時代
瓦17	溝188	瓦	軒平瓦	(13.0)	4.6	(8.4)	(13.0)	2.1	灰白色	ナデ	ナデ	唐草文	室町時代
瓦18	溝188	瓦	軒平瓦	(11.3)	3.5	(8.0)	(11.3)	2.0	灰白色	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	唐草文	室町時代
瓦19	溝188	瓦	軒平瓦	(8.0)	3.9	(5.9)	(8.5)	2.0	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	唐草文	室町時代
瓦20	溝188	瓦	軒平瓦	推定24.6	3.0	(10.1)	(14.5)	2.2		ヨコナデ、タテナデ	タテナデ	唐草文 直平	室町時代
瓦21	土坑145	瓦	軒平瓦	(11.8)	2.0	(8.8)	(11.3)	1.4	黄褐色	ヨコナデ、ナデ	ヘラケズリ、布目痕	剣頭文	鎌倉時代
瓦22	落込み状遺構425	瓦	軒平瓦	(8.0)	2.7	(5.6)	(8.3)	2.0	にぶい橙色	ナデ	布目痕	剣頭文	鎌倉時代
瓦23	溝239	瓦	軒平瓦	15.0	3.1	(10.8)	(14.5)	1.4	にぶい黄橙色	ナデ	布目痕、ナデ	剣頭文	鎌倉時代
瓦24	集石遺構250	瓦	軒平瓦	(7.4)	3.6	(4.9)	(7.4)	1.2	灰黄橙色	ナデ	布目痕	剣頭文	鎌倉時代
瓦25	土取坑381	瓦	丸瓦	—	—	29.0	14.6	2.0	褐色	ナデ	布目痕		室町時代
瓦26	集石遺構250	瓦	丸瓦	—	—	(16.0)	13.9	2.0		ナデ	布目痕		鎌倉時代
瓦27	落込み状遺構240	瓦	平瓦	—	—	(12.8)	14.9	1.6	浅黄橙色	縄目タタキ	コビキ痕		鎌倉時代
瓦28	集石遺構250	瓦	平瓦	—	—	(13.8)	25.1	1.8	黄褐色	コビキ痕	板ナデ		鎌倉時代

※法量の()内は残存値を示す。

図 版



1区第1遺構面 全景（南から）



1区第2遺構面 全景（南から）



1区第3遺構面 全景（南から）



1区第4遺構面 全景（南から）



1区第5遺構面 全景（南から）



1区第6遺構面 全景（南から）



2区第3遺構面 全景（東から）



2区第4遺構面 全景（東から）



2区第5遺構面 全景（東から）



2区第6遺構面 全景（東から）



第1遺構面 溝 010 (東から)



第1遺構面 集石遺構 005 (東から)



第1遺構面 集石遺構 050 (北から)



第1遺構面 集石遺構 045 (南から)



第1遺構面 土坑 310 (北から)



第1遺構面 室 307 (南から)



第1遺構面 土器溜 043 (北から)



第1遺構面 井戸 027 (西から)



第2遺構面 集石遺構080 (南から)



第2遺構面 井戸066 (西から)



第3遺構面 礎石建物1 (北から)



第3遺構面 土取坑群 (南東から)



第3遺構面 井戸351断面 (北から)



第4遺構面 柵1 (西から)



第4遺構面 溝185・186・195 (東から)



第4遺構面 溝188 (西から)



第4遺構面 土坑 145 (南から)



第4遺構面 土取坑 187・404 (東から)



第5遺構面 溝 439・440 (西から)



第5遺構面 落込み状遺構 240 (南から)



第5遺構面 落込み状遺構 425 (南から)



第5遺構面 土器溜 215 (南から)



第5遺構面 土器溜 415 (北から)



第5遺構面 井戸 410 (南東から)



第6遺構面 落込み状遺構 285・集石遺構 250・土坑 280・溝 281（北西から）



第6遺構面 落込み状遺構 297（西から）



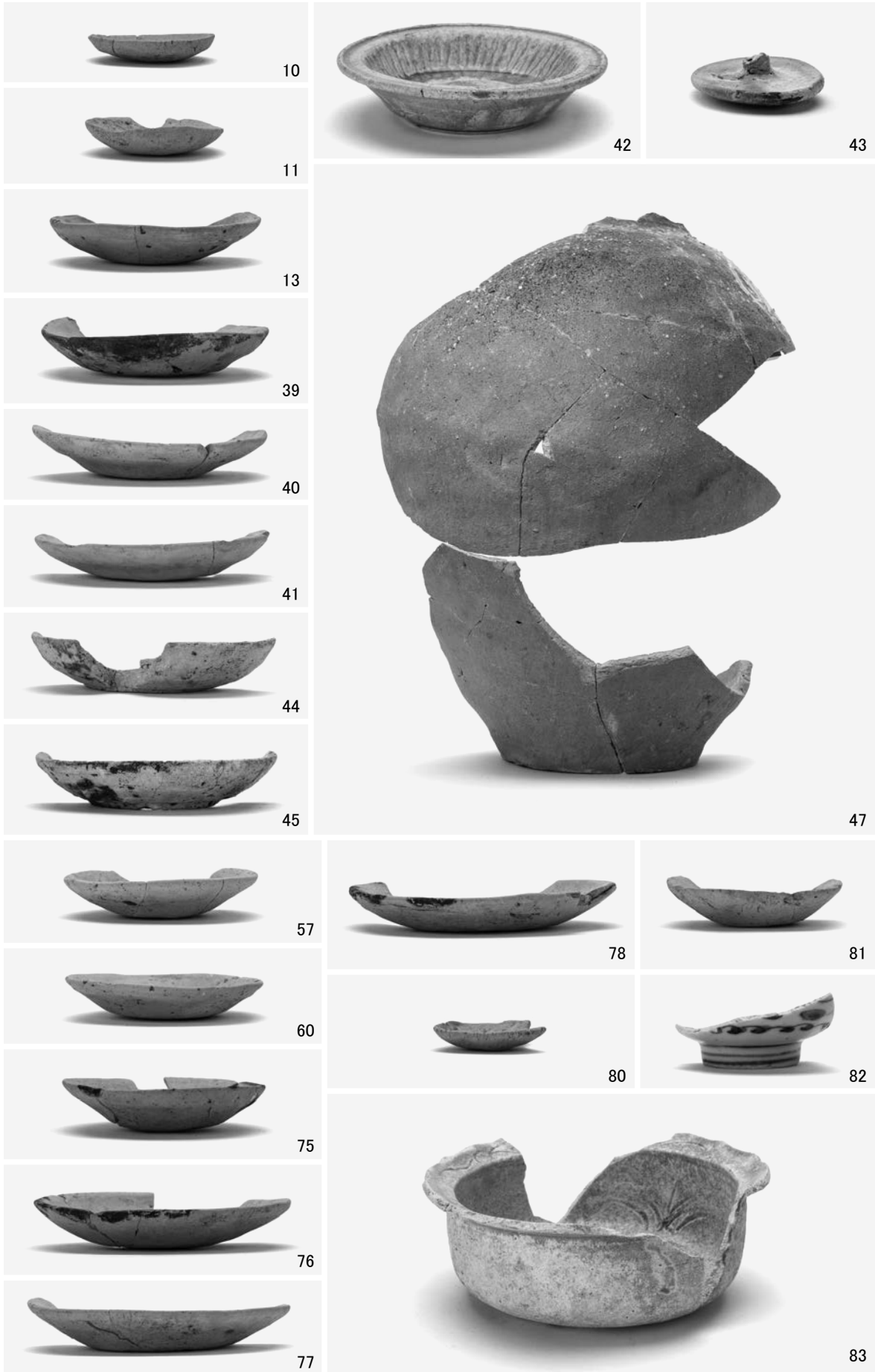
第6遺構面 集石遺構 250 断面（東から）



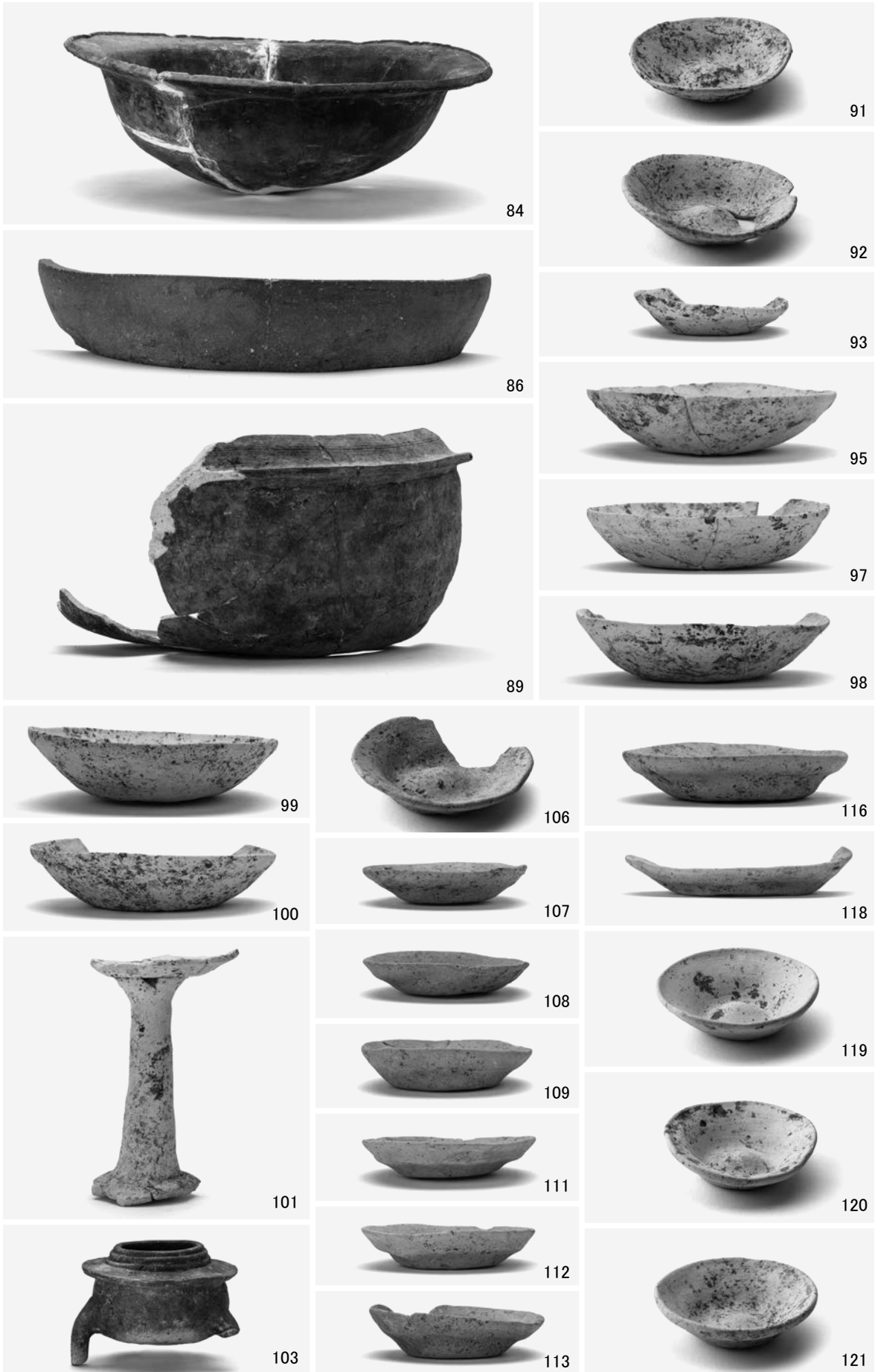
第6遺構面 土坑 280 断面（南から）



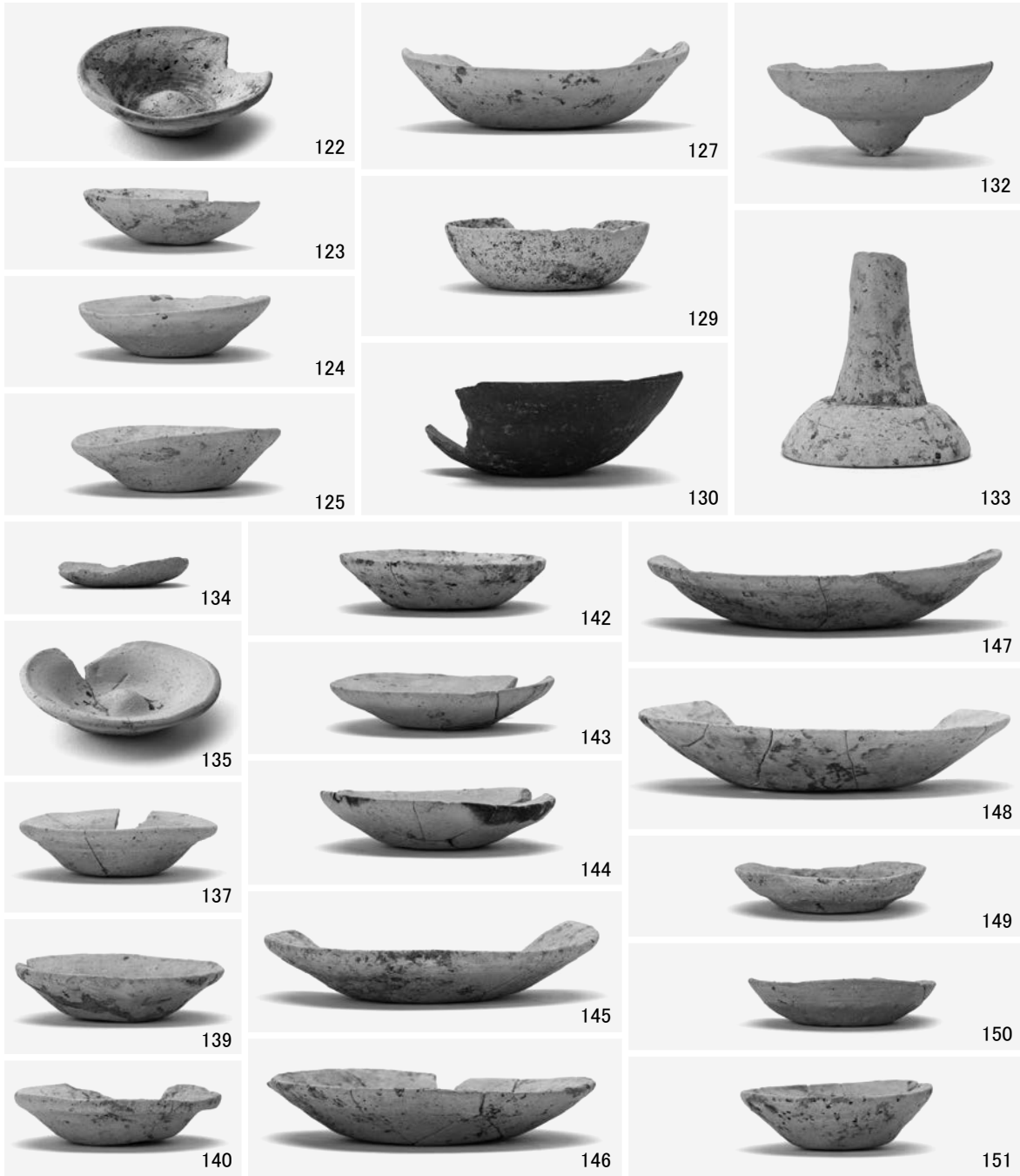
第6遺構面 土橋 465（北東から）



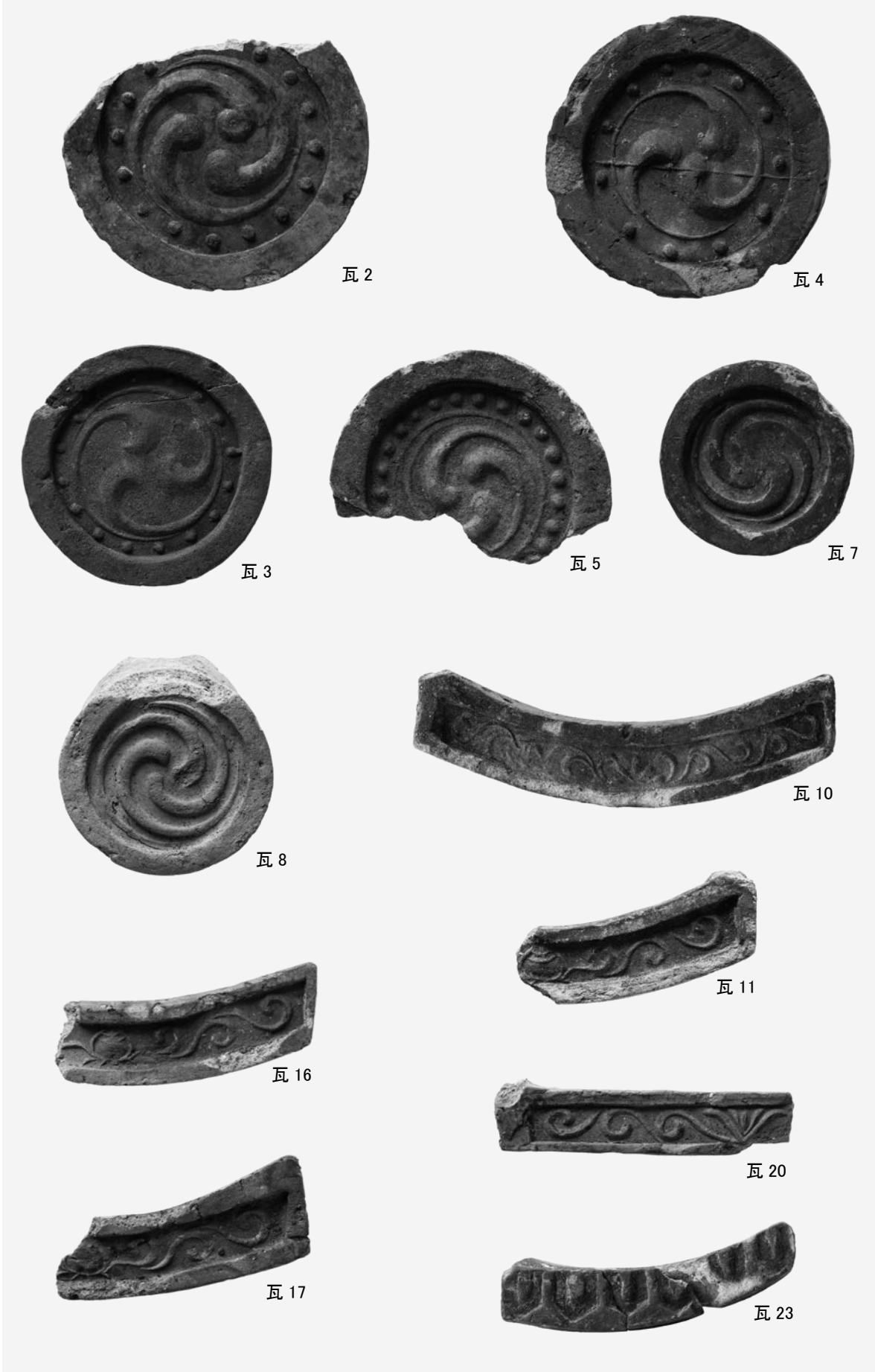
出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうさんぼうじつちょうあと・にじょうどのおいけじょうあと・からすまおいけいせき							
書名	平安京左京三条三坊十町跡・二条殿御池城跡・烏丸御池遺跡							
シリーズ名	アルケス発掘調査報告							
シリーズ番号	4							
編著者名	石井明日香							
編集機関	株式会社アルケス							
所在地	京都市山科区西野山中臣町75番地6							
発行所	株式会社アルケス							
発行年月日	西暦2022年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょう 平安京	きょうと しながさうく 京都市中京区	26100	1	35度 0分 43秒	135度 45分 31秒	2021年5月 6日～2021 年7月31日	224㎡	集合住宅 建築工事
さきょうさんじょうさんぼう 左京三条三坊	りょうがえちやうじつおしこう 両替町通押小		471					
じつちやうあと にじょうど 十町跡・二条殿	じさが きんぷきちやう 路下の金吹町		464					
おいけいせき 御池城跡・烏丸 御池遺跡	454、455、 457-5							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
烏丸御池遺跡	集落跡	古墳時代						
平安京 左京三条三坊 十町跡・ 二条殿御池城跡	都城跡 ・城館	鎌倉時代	溝、落込み状遺構、 集石遺構	土師器、白磁、青磁、瓦 質土器、瓦				
		室町時代～安土 桃山時代	溝、落込み状遺構、 集石遺構、土取坑、 礎石建物、柵	土師器、磁器、白磁、施 釉陶器点、白色土器、焼 締陶器、瓦器、瓦質土 器、石製品、瓦				
		江戸時代	溝、井戸、集石遺構、 室	土師器、磁器、施釉陶 器、焼締陶器				

平安京左京三条三坊十町跡・
二条殿御池城跡・烏丸御池遺跡

発行日 2022年8月31日
編集発行 株式会社アルケス
住所 京都市山科区西野山中臣町75番地6
〒607-8305 TEL 075-582-5172
印刷 奥田印刷株式会社

